肉身靈魂は惡地の如し、徒らに荊棘又は種々の惡草を生じて、繁茂蔓延し、朝に芟截すれば、夕に萠孽し、動もすれば滋繁して全地惡蟲の巢となるなり、儻も怠りて惡草の毒蟲を鋤滅せざれば、何を以て五穀の豐穰を期せん哉、故に常々耳目口舌及び五官七情を固く守り、私慾に克ちて肉身と靈魂の罪惡を剪滅せざれば、如何ぞ天上の樂境を現するを得ん哉、されば救世主基督が誕生より八日を經過して、マリアとヨセフは救世主の意向を豫め知れる故、此割禮を受けたるものなり、併し此割禮は何處に於て受けしや、普通の傳說に據れば、其の降誕したるベトレエムの洞內なりとせり、又之を行ふ時には常に石にて造れる小刀樣のものを以てせりと云ふ、その祝日は一月の初一日なり、此時名をイエズスと命じたり、此名稱は即ち救世主の意義を有せるものにして、誠に善く基督に適應せるものなり、此は人之を與へしには非ずして、天之を與へたるなり、卽ち嘗て大天使ガブリエル、マリアに顯れて天の命を報告し、救世主の降誕を知らしめし時、蚤く此イエズスの名稱を告げたり、『御身男子を生まん、其名をイエズスと呼び玉ふべし』と、又淨配ヨセフにも天使現れて左の如く告げたり、『其名をイエズスと命ずべし、そは其民

施割の場所及器具

イエエスの名稱

を罪惡の中より救ふべければなり』と、蓋しイエズスと云へる名稱は、最も聖き名稱にして、天地の內之に比すべきものなし、又人々の爲に最も大なる慰み樂みにして、世人は此の名稱を有する至尊者に依りて、幸に罪惡の赦を得、救拯の幸福を受くるなり、聖書に曰く、此外に別に救拯ある事なし、蓋し天下の人の中に吾等の依賴みて救はるべき名は他に與へられざるなりと、亦以て此の名稱の如何に大切にして又如何に重ず可きかを知るべし、宜なる哉救世主基督は穉身を以て割禮を受傾し、寶血を流して以て後年犧牲となるべき功德を爰に肇めたるや、然るにマリア及びヨセフは如何程か愛兒の紅血を流すを見て哀憐に思召されしぞ、此は言語筆紙の能く盡し得べき所にあらず、旣に此の如く稚兒の內より紅血を流して、痛傷を受け、早く救世主の功を奏したり、ヨセフは此等の事情を悟り、イエズスの名は永遠に高く天上に輝きて、人力の得て及ぶ所にあらずと了解し、深く憫然に思ひながらも、其の聖意を感心し、益々兒を大切に致し、愛敬の情をぞ盡したりける。

(3)基督の公現

三王の國名

基督降誕の後主として貧賤なる牧者を招き、之に降誕を告げ、程なく又東國の三王を召して、之に其誕生を示し、以て萬國の人民を招く意を表せり、聖書には此の三王の名を明記せず、唯だ複數の字を用ゐたる而已、即ち『マージ』と云ふ字是なり、此字は『博士』若くは『王侯』と云ふ意義に解釋せらる、其の國名も聖書に明文なきを以て、學者の間に是非の議論ありて、其の歸着する所を知らず、然れども其中に最も信すべきものはアラビア國なり、蓋し該國は古昔モアブ國と稱したり、國人にバラアンと云ふ豫言者あり、此人能く救世主の降臨を豫言して曰く、新星ヤコブより出んと、故に彼の三王は救世主の降誕に當り、天に異星の懸るを見て、此の豫言を回想し、當時又天の默啓を受け、ユデア國に降誕ありし事を曉知し、各々本國を發足して、ユデアに赴きたり、之を來朝と云ふ、救世主基督より見て之を公現と云ふ、此事降誕より幾日の後に有りしや、聖書に記載なきを以て判然之を知ること能はざれども、往古より降誕后十三日目即ち一月六日を以て此の祝日と定めたり、又アラビアとユデアとの距離は大約十三四日を要する路程なり、故に此等を參考すれば三王が拜謁せし日は、蓋し十三日目なるべきか、且其の『マージ』なる名稱は、ペルシア國の語にして、學士又は高貴なる人を指すものなり、昔時同國にては王僉な其位に登る前『マージ』族中に入るを常とせり、故に或はペルシアより、或はカルデアより、或は又アラビアの沃饒地より來れりとして、各々其說く所同じからず、ペルシア或はカルデアより來れりと云ふ者は『マージ』なる名稱が二國の固有の語なるを以て斯く主張すれども、此名は同國のみに限らずして、西方の他の諸國にも移入せしが故に、強ち彼の『マージ』等は同國より來れりと爲す可からず、蓋し彼の『マージ』等が救世主基督に獻せし物品を見れば、恐くはアラビアの沃饒地より來れるものゝ如し、又福音書には彼等を『マージ』と記せども、常に呼びて王となせり、此王と云へるは大國の王の如き者にはあらで、唯其國の一郡の治者、或は一族の首長の如き者を指すなり、尙又彼等がユデアに入り來れる嚴肅なる有樣は寔に王の如くなりしを以て、當時の人々之を呼びて王と爲せしものか、此の三王の名は如何と云ふに、此は素より聖書に記載せざるを以て、之を知るに由なしと雖、古史に據りて左の如く云ふ者あり、(去れど此は固より確實なるものにはあらざるなり)一名はメルキオル、一名はガスパル、一名はバルタザルと云ふ、又

三王の姓名

福音書中に右の『マージ』等の幾人なりしやを記載せざれども、傳說に據りて三人なりとせり、此三人の博士は天文に精通したり、且豫言者の遠裔なれば、聖書の豫言に依り、尙天の默啓に賴り、救世主の降生遠からざるを識り、朝夕天を仰ぎて企望する事年久し、然るに十二月二十四日の夜忽然異星の天空に懸り、現出して榮光を發しければ、偖こそと三人の博士は星の常ならざるを覩、救世主の降誕を知りて宣はく、往古より先知諸聖人等四千有餘年間祈禱し、世俗の快樂を棄てゝ、救世主の降誕を待望し、其の恩を被らんが爲、日々齋戒沐浴して、只管其哀憐を祈求す、然るに我等は幸福なる哉、其久しきを待たずして、救世主の仁惠を被る者なれば、五體六根を潔淨にして、救世主を拜朝し奉らんと、黃金、乳香、沒藥の三品を禮物として、各々之を携ひ、遙遠の異邦に赴かんと、親族國務を棄て、各々駱駝に打乘り、異星を目的として、二百里餘の山川險隘を跋涉し、艱難に遭際すれども、意を變へず、唯々星の光に順ひ行き、數日間は只管救世主を拜せんことをのみ考へたり、其誠心と學殖とを以て、譽を求むるが爲にあらず、唯眞を尋ぬるが爲に遙々ユデア國迄旅行の勞を取れり、蓋し斯の如く一片の誠心を以て眞を尋ね求めし者は、古

三王の旅行

今に其數多からざるなり、然るに天は三王の意を試みん爲、ユデア國に入る頃、星の光を遮蔽し、遽に星の韜隱して見えずなりけるに因りて、三王は該國の王ヘロデスの館中に入り、王に謁見して曰く、新星現出して、天空に懸れる故を以て、正しく經典に云へるユデアの王(救主)の降誕は當國なれば、拜朝せん爲東國より遙遠の行旅を取來れり、そも何れの地なるか、賢意を得ん爲來訪せりと、國王ヘロデスらく經典に謂ふ基督とは定めし之には非ざる哉と、之に因りて諸學士諸敎師を呼び集めて、種々討議なしたるが、僉な云ふ樣、經典に記せし所を考ふるに、ミケヤス豫言者の曰く、汝ユダの地ベトレエムよ、ユダの郡中に於て至少なるものにあらず、我がイスラエルの民を治むべき王汝より出んと、此の豫言を引てダヴィドの鄕ベトレエムならんと云ふに決しける故、國王漸く誕生の所在を知り、益々怕れて其心安からず、己の位を奪はれんを思ひ、遂に心竊に謀計を設け、三王に敬禮して曰ベトレエムに行かしめ、實を認め、嬰兒に遇ひ玉はゞ、我にも報じ玉ふ可し、我も又行きて朝拜せんと云ふ、三王其命を聆き、遂にヘロデスの宮殿を出づるや、イエ

ヘロデス王の驚愕

三王の拜謁

ルサレムとベトレエムと孰れにも稍や近き距離の所に至りて、復た忽ち東方に見えし異星現れて導きたり、今に至る迄其の途上に一の古き井を存して、人々之を呼びて三王の井と云ふ、偖又其星は行手の先きに當り、宛然嚮導をなす樣なれば、三王は之に順ひ行く程に、星は倍々光を增し、遂に救世主の居れる所に至り、此處ぞ即ち其處なりと語れるが如くなりしかば、遂に三王も足を止めて、歡喜に堪へず、一の洞窟に到りしが、是れぞ即ち新たに生れし救世主の宮殿なれ、彼等は其の宮殿の有樣の奇異なるにも拘らず、更に怪み驚かず、直に其内に入りて、救世主を拜し奉れり、救世主は嬰兒となりて無言を守り、是非善惡を辨へざるに似たり、又其外貌を見れば、常の兒子に毫も異ならず、そも彼の三王等が此無言の救世主の召しに預りしは、何ぞ其れ幸福なる哉、救世主基督の生れたる處より七歩計り隔て、横に穿てる所あり、是れ即ち馬槽のありし所にて、嬰兒は乃ち其槽内に置かれたりと云ふ、茲にて三王が嬰兒を見て、歡喜に耐へず、俯伏して頂禮をなし、其後に寶の盒を啓き、バルタザル王は黄金を献じて恭しく主を拜し、カスパル王は乳香を奉じ進んで主を拜し、メルキオル王は沒藥を貢し謹で主を拜せり、此時マリア、ヨセフは如何爲し居られしや、若し尋常の婦人なれば高貴なる異邦人が遠く其國より來りて、今己が子の足下に拜跪せるを見て、多少其心に傲慢の意を惹き起したるならんと思はるれども、マリアは最も謙遜の德に秀でたる者なれば、決して斯る思念を惹き起さゞりしは、言を待たざる所なり、唯だ極めて深き謙遜の德の中に、堅く其心を持して、『マージ』等の來拜を喜び居たり、時に三王は救主を拜して、喜悅と幸福とに充され、將に明日ヘロデスの所に至り、先きに約せし如く、其由を告げんとせし時、恰も彼等は夢にて再びヘロデス王に返る勿れとの默示を蒙りぬ、夫れヘロデスは能く三王を欺くことを得たるも、能く天をば欺くことを得ざりき、之に因りて三王はヘロデスに還報せずして、外の途より故國に歸りたれば、復び國王へは此の事を知らせざりき、嗚呼天の攝理も亦妙なる哉、全く惡王の謀計を破りたり、古來三王の禮物には各々深意ありと解釋せり、即ち一には黄金を献じたり、黄金は常に國王に献ぐる貢物なり、之を基督に献げしは、基督の眞正の王たるを表せり、且黄金は德を表するものにて黄金が五金の王たる如く、基督は萬國の宗王たるを表するなり、二には乳香を献じたり、乳香は常に神に捧ぐる

三王の禮物の深意

ものなり、之を基督に献げしは、基督の眞の神たるを表したるなり、蓋し乳香は之を燒き、神を拜して、恭敬を顯はすものなればなり、又乳香の四方に馥郁たる如く、善德祈禱の香氣も六合に充盈し、黨煙天に達して神の聖意を悅ばし奉るを表するなり、又三には沒藥を献じたり、沒藥は常に屍に殯殮して、腐敗を防ぐものなり、之を基督に献げしは、基督は神なれども、朽敗すべき人間の肉身を取りたれば、此事を表せりと云ふ、且沒藥は肉體を戒責する事を指すものにして、屍をして腐敗せしめざる如く、己れに克ち慾を抑へて、罪惡の腐敗を受けしめざるものと解釋せり。

古代宮參の規定

(4)基督の參堂

基督は降誕後四十日を閲し、即ち二月二日イエルサレムの聖堂に參拜して、身を奉献したるに因りて、マリアは取潔の禮を行ひたり、ユデア國に於ては男子を擧ぐれば、四十日目に當り之を聖堂に捧げ、其の身代として性畜或は通貨を献せしむる規定あり、古昔モイゼスの敎規にて、婦人子を產みたる時、其子若し男子なれば、其の婦人は必ず七日の間他の人と交際を絶つ可き事なり、又八日目に及び、其子に名を命じたる後、尙三十三日の間其の婦人は聖堂に行きて祭祀等に與かること能はざるものなり、而して其生兒若し女子なれば、其母は十四日の間他の人との交際を絶ち、十五日に及びて其子に名を命じたる後、尙六十六日の間其母は聖堂に行きて祭祀等に與かること能はざるものなり、されば男子なれば四十日目、女子なれば八十日目に及び、其母初めて其子を抱きて聖堂に行き、子の爲には羔羊、自分の爲には雌鴿或は山鴿の雛を各々一つ宛捧げて以て、其の汚れを清められし事を謝する例なり、去れど若し其子の爲に捧ぐること能はざる時は、或は二羽の山鴿或は二羽の雛鴿を捧ぐるも隨意なり、モイゼスの掟にて子を產みたる婦人を潔からざる者となせしは、出產を以て罪とせしにはあらずして、唯だ人類の本源既に汚れて、其汚は出產を以て傳り、尙出產にも附着するが故に、宜しく之を清むべしと爲せしものなり、蓋し此掟は人々をして原罪の事を記憶せしめ、且後日來るべき救世主に對する信仰を豫め起きしめたるものなり、又男子を聖堂に奉献するの禮は、モイゼスの立つる所にして、古昔イスラエルの民がエジプト王の嫌疑に依て、百年の間甚だ嚴酷なる取扱を蒙り、不慮の艱難を嘗て、其國を出で

男兒を聖堂に奉献したる理由

んとする時、國王ファラオ之を許さゞりき、時に神モイゼスに命じて、種々の異能を行はしめ、ファラオを畏怖せしめたり、然れども彼は剛腹にして更に之れを聆かず、故に神は再び天使に命じて、該國の王及び庶元の冢子を始め、其の六畜の初子に至る迄、悉く殺戮せしめたり、然れ共イスラエルの人民中には一人も此の災厄の害を加へざりき、流石剛愎なるファラオも太く恐怖し、終にイスラエルの民にエジプト國を出づるの自由を與へたり、故に此の大恩をイスラエルの人民に記臆せしめんが爲め、神は聖人モイゼスを以て此禮を立てたるが故に、其後イスラエル人初て男子を産むときに、之を神に奉献して以て、此の殊恩を追念したるなり、マリアが救世主基督を一般の初子の如く、聖堂に捧げて、モイゼスの例規に順ひたるは、世の人々に神の總ての掟に從ふべき模範を示さんが爲なり、マリアも亦自ら卑して常の産婦の如く穢れを負ふを顯はし、モイゼスの法律に從つて、一歳の羔一匹と鴿一羽を献じたり、尤も羔をば焚き、祈禱を爲し、聖堂の祭壇の上に捧げ、又鴿をば司祭に禮物として備へ、以て其の祈禱を乞へり、是に於て司祭は祈求して以て産婦の汚を清除したり、尚マリア及びヨセフは嬰兒基督を抱き、鳩鴿二羽を以て恭しく天に犧牲として捧げたり、抑々此の犧牲は開闢以來古敎の司祭及び諸聖人の犧牲に優ること萬々なり、是は唯々禮のみにして、必ずしも之を殺して献ぐるにあらず、マリア及びヨセフは基督を抱き、聖殿に造り、愛兒を神に献じ、又習例に從ひて若干金を司祭に奉納し、以て基督を身受したり、是れ固より謙遜順從を手本として、吾人に示さんが爲なり、又マリアは其の聖意を明に曉りて之を天父に献げたり、若夫れ其の身命に至りては、全く實の犧牲として、後日人類を救贖せんが爲に、十字架の上に寶血を流して死去すべきことを知りて、之を心に許したり、蓋しこれは基督の誠意なれば、マリアは神の名代なる司祭の手に我が愛兒を渡して曰く、嗚呼天父よ、此の嬰兒は我が胎内に我が血を分けて、人體を受けたれば、我が子なり、然れども之を授け玉ひし者は天父なり、今之を天父に捧げ、其の身血生命迄も皆奉献し奉る、唯今金を以て此身を償ひ受くると雖、此は一時の名目にして、後日再び捧げんとする聖き羔羊と稱せらるゝ犧牲なるべしと、天父の聖意を悅ばし奉りぬ、昔時ユデア國人がバビロンより歸り、イエルサレムの聖堂即ちサロモンの創建せし聖堂の全く破壞せるを見て、都府と聖堂との再

基督献身の理由

基督の參拜したる聖堂

立に從事せり、然るに以前の聖堂の宏壯雄麗なるを記憶し居たる故、老人等は今其の再建せる聖堂の昔時に如かざるを見、又其の國民の勞力に乏しきを知り、爲に流涕襟を沾せり、此時先知者は人々を慰撫せんが爲曰ひけるは、汝等力を出せよ、汝等は是れ前人の子孫に非ずやと、神も又曰く、我は必ず汝等に爲せし約を守るべし、汝等恐るゝこと勿れ、我は天と地とを震動せん、又萬民の待望する者來りて此堂の光榮を爲すならん、此堂の光榮は前代よりも尙大ならん、我は茲に平安を與へん云々と、果して此の聖言の如く、昔の聖堂はサロモン王が力を盡して美麗に之を飾りたりと雖、未だ曾て再建の聖堂の如き光榮を見ること能はざりき、其光榮とは何ぞや、即ち救世主基督の其内に親臨したること即是なり、是れ誠に聖堂の爲め最上の榮譽に非ずして何ぞや、夫れ救世主の聖堂に捧げられたることとは、其從順の德を明示し、且救世主一生の行爲は、僉な天父の聖意に從順せざるはなし、其の嘗て自ら宣ひし言に曰く、我を遣はせし者の聖旨に遵ひ、其業を成し遂ぐるは、是れ我が糧なりとあり、以て其の從順の德を知るに足るべし、吾人も若し救主基督の典範に倣ひ、能く從順の德を盡して、我は終始天父の聖意に愜ふ如

マリア取潔の理由

く行へりと言ひ得るに至りては、誠に幸福なる者と云ふべきなり、マリアが取潔の禮を受けたるは、其條に詳しく記したるが如く、謙遜の德を表明せんが爲なり、蓋し人々の心は大概傲慢の念を有する者にして、人に譽を求め、人に高ぶるを好む者なり、然れども、マリアは天の殊恩に依り、高く人々の上に擧げられ、其位其德共に勝ぐるゝと雖、纖毫も傲慢の意なく、唯謙遜を以て其心を治め、其身を處せり、其の尋常の婦人と同じく、一般の例規に從ひ、取潔の禮を受けたるは、全く其の謙遜の德を表示するが爲なり、以上記せし救主基督の參堂及び其母マリアの取潔の記念の爲、基督教會にては二月二日を以て、其の祝祭を執行す、此の祝祭を稱して救主奉献の祝祭と云ふ。

(5)古老の豫言

此時イエルサレムの聖堂に於て有德の老翁あり、シメオンと名く、此人義者にして且愼みあり、每に救世主降來してイスラエルの民の慰められんことを深く切望し、之を慕ふこと茲に年あり、聖靈其上に臨み、救主基督を見ざる迄は、死なじと示さる、彼れ聖靈に感じて入りけるに、此日マリア、ヨセフはモイゼスの法度に遵

古老嬰兒を抱て感涙に咽ぶ

ひ、嬰兒を懷抱して聖堂に造りければ、シメオンなる聖人は疾に天の默示にて知れるものから、聖堂に至りて之を觀るや否や、忽ちこれは萬民の久しく希望せし救主たるを識り、欣然として嬰兒をマリアより受け取り、歡喜に堪へずして、之を己の懷に抱き、神を讃美して曰く、我れ恭しくも今眞の救世主を觀奉る、是れ萬民の光輝、我國の榮福を與ひ玉ふ御方にて、最も我が本望に愜へりと感謝して、主よ、今聖言に從ひて、僕を安然に世を逝らしめ給ふ、是れぞ誠の幸に侍るなれ、蓋し我が目既に萬民の前に設け給ひし救主を見奉つるなり、是れ異邦人を照す光にして又イスラエルの民の榮譽なりと、シメオンの喜び言語に絶せり、即ち今一生の夙願を遂げ、全く心を安慰して、終に救主の玄義を豫言す、此時マリアとヨセフは嬰兒に就て語れる事を奇異み居たり、誰か此のシメオンの玄妙なる語を聽き感嘆せざらん哉、誰かシメオンが救主の降來を侍望せし厚き信心を見て嘆稱せざらんや、又誰か天が聖人シメオンに告げて、救主を見ざる迄は死なじとの約を遂げたる其の誠實に接して之を感佩せざらんや、彼は天の約束の如く果して其の待望せる救世主を目に觀、又之を手に抱き奉るを得しは、是れ實に幸福と云ふべ

古老の豫言

し、シメオンは又マリアヨセフを祝して、其母マリアに打向ひ、猶も其兒救主を指して曰く、聖母よ、此の嬰兒を視給へ、此の嬰兒はイスラエルの許多の人の興亡の誹毀を受けん、其の號しに立てらる、これ多くの心念の露はれん爲なりと、シメオンの此の語は救世主の此世に降りたるは、人々の滅亡を爲さんが爲なりとの意義にはあらざるなり、人々却て天與の救世主に對し己の惡心より之を受けずして、自ら滅亡を招くを指示したるなり、即ち世の人々は其の與へられし救拯と幸福とを以て、自ら己を利せずして、却て之を以て一層己を有罪者たらしむとの意なり、基督自らも左の如く宣へることあり、我れ若し來りて語らざりしならば、彼等罪なからん、去れど今は其罪言ひ開らく可き樣なしと、シメオンは又マリアに云ひけるは、憂苦の劔御身の心を貫くべしと、是れ即ち許多の民救主の敎訓と其の死去の功力とに賴り、靈魂の救ひを得べきを、却て之を輕蔑して、遂に十字架に釘し、大罪を犯して滅亡する者尠からず、善人惡人の心推して知るべしとの意なり、シメオンは救主基督の事に就き豫言せし後、尙續きてマリアの將來に就きて豫言せる『憂苦の劔御身の心を貫くべし』との意義は、マリアも又後日其子基督の

受難の爲め、己も俱に其心に苦難を受けて、宛も彼の劔が其心を貫くが如けんとの事なり、而してマリアは此日よりシメオンの言の違ひなきを思ふて、我子を目に觀、手に抱く毎に、其の後日の受難を豫想し、慈愛の心と共に深き悲哀の情を生じ、其の都度涙を濺がれたるならん、爰に又一人の老婦あり、アセルの支派バヌエルの女アンナと云へる豫言者なり、甚老邁なり、若き時夫に適きて七年倶に居りしが、寡婦となりて今茲に其齡八十四歳の老女なりしが、聖堂を離れず、夜も晝も斷食と祈求を爲して、能く未來の事を語り、敎を奉ずること最も篤き者にてあれば、天は豫て其心を啓き玉へる故を以て、善く主に事へり、此時此の老女も側に立て、嬰兒を觀奉り、眞の救世主たるを識認め參らせ、これぞ世界の御助手にて在すなりと、神を拜し、嬰兒を讃美して止まず、又イエルサレムにて贖を望める凡ての人々に示す樣、基督の此世に降誕在し玉ふを幾久しく望み參らせたるが、是れぞ眞の救世主にて在すなりとぞ申上げたりける、前條に記せし救主參堂、聖母取潔の祝日は、希臘敎人之を其語にて、『邂逅』の意を有せる名稱を以て呼べり、开は彼のシメオン、アンナ等の救主基督に邂逅せしを感謝せんが爲なり、然れども羅馬敎

老女嬰兒を讃美す

『蠟燭の祝日』

者は通常之を呼びて、『蠟燭の祝日』と云ふ、其故は當日彌撒聖祭中に於て司祭蠟燭を祝聖して、之を他の司祭及び補祭等に與へ、各々點火せしめて、聖堂内を一周するの式あればなり、此式は彼のシメオンが救主基督に就き、是れ異邦を照らさん光なりと云へしを表示するものなり、而して其の點火せる蠟燭は人々を照らす救主を顯はし、之を手にして列行するは、人類が救主の明光に依り、世の路を辿るべきを示せるなり、此の祝祭は始めイエルサレムに於て執行せられ、紀元四百九十四年羅馬に移入せり、彼の第四世紀の頃羅馬にては都人士毎年二月の初を以て、所謂『牝狼の祝祭』を行へり、此は羅馬の建國者ロムルスを養ひし牝狼を祝讃するが爲なり、然るに外敎者僉な此日に於て遊樂歡喜其度に過ぎ、淫靡醜行言ふに堪へざる程にて、道德上大害ありしを以て、當時の羅馬敎皇は之に代ゆるに盛大なる聖祭を以てせり、即ち前記救主參堂の祝祭是なり、茲に於て此の祝祭には人々力を盡して之を盛大にし、羅馬の都人士、信者未信者の別なく、僉な擧つて松明を手にし、行列を整ひ、羅馬全部を巡行せり、其後毎年傚ふて例とせり、蓋し敎皇の此令は救主基督の光明をして、僞敎の冥暗を照らさしめ、淫祀復た起らざるに至

古老豫言の應驗

らしめたり、故を以て此の祝日は今日に至る迄西方に於ては基督教の僞神僞教に勝ちたる記念と爲すものなり、去程にシメオンの語は後日一々驗ありぬ、即ち救主基督死去の時、マリアは十字架の下に立ちて、救主の創口より紅血漓流して、遍體血に染み玉ふを看、又我子の心身に受くる苦難憂悶を知り、哀憐の爲め如何程悲痛を感せしや、實に測り難し、此時シメオンの豫言せる所、適中して、痛苦の刀眞に其の心を貫けり、又惡人は慘酷を極めて、其の愛子に害を加ふれば、マリアは眼前に之を覩、嘗て己の胎内に孕り、ナザレットに於て撫育せし聖子の身體が此の如く苦難を受け、卒に十字架の上に死去せるを思ひめぐらし、其心の中の愛惜痛悼は、寔に無限にして、筆舌の能く述べ得る所にあらざるなり、偖又ユデア國王ヘロデスは曩に三王を詐りて、彼等に嬰兒を尋ね遇はゞ、我に告げよ、我も又行きて拜せんと約せしかとも、『マージ』等は天の默啓に依り、國王に復命せざりしかば、國王は以爲らく、彼等は必ず或る妖象に欺かれて來りしならんとて、敢て復た此の事を問はざりしに、救主基督の聖堂に參詣したる時、イエルサレムにてシメオンが救主を指し、此は神より遣はされし救主なりと明言して、之を稱讃せし言、いつしか國王ヘロデスの耳に達しければ、國王ヘロデスは嘗て尋ねたる嬰兒の事を復た茲に想起し、自ら彼等に欺かれたるを曉りて大に怒り、人を遣はして彼等に詳しく問ひたる時を度り、ベトレエムと其境内に於ける生れて二歲以下の嬰兒を盡く殺害したり、嗚呼ヘロデス王は殘忍極まれる惡虐無道の君と謂ふ可し。

嬰孩屠戮の謀計

(6)基督の避難

ユデア國王ヘロデスは該國の新王出生せしと聆くや、自ら以爲く若し別に王の出づる事あらば、我れ將に國を失ひ逐はれんとするかと、疑懼の念を生じ、茲に於て之を殺して身を全ふせんと謀計を廻したり、然るにヘロデスの畏懼は空しく己を欺くに過きず、如何となれば救世主を新王と稱するも、現世の王と云ふに非ず、精神界を統治する眞王の謂なり、而して又其の求めて殺害せんとする一嬰兒が、尋常の嬰兒にあらずして、古來ユデア人が待望せし救世主ならば、假令尙未だ襁褓の中に在りと雖、到底得て之を殺害する事能はざるならん、畢竟、是れ無益の計と云ふべきなり、天若し之を遣はしたりとせば、能く其兒を保護して、些少の害だも受けざらしめしならん、古經に左の如く記せり、天に敵すべき計策あるなし

と、夫れ眞に然り、去れども國王は愈々疑心晴れやらず、何卒稚兒を求め出して殺さんと思へしが、生れし時と居所の詳かならざれば、大に苛立てぞ怒りける、嗚呼ヘロデスは殘逆極まれる者なり、何の爲に斯の如く嬰兒を殺戮するや、其の尋ね求めて殺害せんとする者は、唯一個の嬰兒にあらずや、而して之を尋ね求むること甚だ難きにあらざるが如し、蓋し國中にて新たに生れし嬰兒は其の生るゝや程なく族籍に記名せしむるを以て、其の族籍に依りて之を求むること最と易ければなり、設令之を尋ね得ずとするも、一嬰兒の爲に更に關係なき許多の嬰兒をも併せて危害を受けしむる理由あらざるなり、夫れヘロデス王が此の如き慘酷なる事を爲せしは、其心惡の爲に蔽はれて、盲となりしに緣るなり、然るに神は救主の生命を顧みて、夜中天使を以てヨセフに夢の中に顯はれ、其の良策を告げて曰く、汝速に起て稚兒と其母とを伴ひて、早く當地を去りてエジプトに遁るべし、そは國王汝の兒を尋ねて殺さんと欲すればなり、故に國王ヘロデスの死する時迄彼處に止れと、ヨセフ天使の告を聆て大に驚き、此由マリアに諗けて、直に發足の用意をぞなしける、基督は此時恰も落魄せるが如く、其夜直に本國ベトレエムを

故郷を去りて異郷に彷徨す

出發す、ヨセフとマリアは基督の降誕の爲めに悅びたるも束の間にて、忽ち又た其地を去りてエジプト國に遁るゝの必要を生じたり、而して又救世主が兩親と倶に其の故國を離れて、エジプト國に赴き、恰も漂浪の身となりしは、是れ眞正の鄕里を離れて、斯世に生を寄する吾人の爲に一種の模範と一種の慰安とを表はせしものゝ如し、何故天は二聖をして特にエジプト國に遁れしめしやと云ふに、蓋しエジプト國はユデア國に甚だ近く、且つ甚だ安全の地なりしを以てなり、尙又ユデア人は昔より其の仇人等を避くるが爲め、常にエジプト國に遁るゝの習ひありしを以てなり、往昔太祖ヤコブスの時ユデアの全地は、饑饉の爲大に苦めり、時にヤコブス及び其の子孫等はエジプト國に往き、糧食を得て生活を爲し、其の子孫は二百年間エジプト國に住みて、宛も賓客の如き優待厚遇を受けたり、今や救主基督が降誕後程なくして此國に來臨したるは、往昔同國人のヤコブス及び其の子孫に行ひたる厚德を深謝せられしものゝ如き感あり、二聖は天の命を受け、片時も猶豫せず、直に其命を實行し、毫も之を厭ひ拒む等の事なく、又此兒は天より遣はされし聖子なれば、人得て之に害を加ふる能はず、エジプト迄遁れざ

るも、何ぞ他に方法なからんや抔との意をも絶て起すなく、此は是れ天の命じ給ふものなれば、固より適當の攝理ならんと少しも否まず、直に其國を出奔して、遠き異邦に漂浪し、救世主に害の及ばんとを恐れ、急に路を山野に取り、深山幽谷を跋渉したり、投宿の費もなければ、山に伏し、窟に匿れ、露宿夜行して、艱苦を嘗む、殊に向寒の時なれば、彼の三人即ち、救世主及び其の兩親は凍飢困厄寔に測り難し、又行く〳〵ユデア國の堺を離れて、漸くヘロデスの害を避けたりと思ふに、又茲に一苦あり、即ちエジプトに達する其間、茫々たる曠野あり、此所は人家の跡もなく、唯往來する旅人を掠殺する兇徒山賊等の匿れ居る巣窟なり、マリアとヨセフは救世主を扶助することをのみ思ひて、幸に無難にて、エジプト國に至りけり、斯も此二聖の結婚は實に天の攝理に出で、最も妙なるものなり、今茲に天がマリアに淨配ヨセフを與へたる所以を推究するに、概ね三つの理由あり、即ち一に救主基督を養育する勞苦をヨセフに分擔せしめんが爲にして、二に世の人の嫌疑を拂はんが爲なり、蓋し處女マリアにして若し配者なく救主を生めば、世人は其由來を知らず、必ずマリアに私通の疑を挾み、汚名を負はしむるに至らん、且又當時

天淨配を聖母に與へたる理由

ユデアの法律に婦女嫁せずして子を產む者は、死刑に處するの明文あり、マリアにヨセフの配なければ、此の災を免かるゝ能はず、又三には救主基督は幼きより其身に種々の患苦災厄を受く可き者なり、例へばエジプト國に走る時の如き、マリア一人にては之を如何ともすること能はざる可し、ヨセフの看保此時に在つて最も必要なり、天のマリアに淨配を與へたる所以は、豈絶妙なる攝理と云はざる可けん哉、夫れエジプト國は古より一の大國にして、西方の他の諸國が尙未だ野蠻の中にありし時より、蚤く既に文明の途に進み居りて、頗る盛昌なり、又同國の法律政治等は今に至る迄世の人の知る所と爲れり、斯の如くエジプト人は種々の事物に智才ありたるにも拘らず、眞神及び宗敎の事に至りては頗る暗冥無智なりき、元來該地方は眞敎を奉ずるものにあらず、固より異端邪說の藪なれば、日月晨星、禽獸惡魔を神として尊崇せり、智者學者輩と雖、大概傲慢貪欲邪情を恣にしたれば、救主此地に來臨するや、國內數多の木像金像皆傾倒し、之を以て眞神の來臨を示せりと云ふ、マリア、ヨセフが基督と共にエジプト國に移居したる時、ヘリオポリスと稱する一邑に住めり、ヘリオポリスとは太陽の邑と云ふ意義なり、

埃及の國狀

聖母樹

異郷に於ける聖族

此邑は昔時ヤコブス及び其の子孫等が住居せし地なり、今はマタリッチと呼べる寞寂たる一小邑に過ぎず、此處に無花果樹に類する一樹ありて、人々之を稱して聖母樹と云ふ、此處ぞ聖族の住居せられし所なりと云ふ、蓋し此樹の幹は甚だ大なる者にして、又綠葉の繁茂せる三條の大枝にて、其樹の邊りの地を翳蔽し居れり、都て旅行者は此樹の下に到る毎に其幹に己が氏名を彫記せり、此樹は四時綠色を呈せる荆棘の滿生し居る一大園の中央に在り、其側に一の清冽なる泉水あり、蓋し聖族は此水にて渴を治されたり、此泉はエジプトの國中にて最も甘美なりと云ふ、右の大なる庭園と樹とは、今を距る四十有餘年前エジプト國王より佛國の皇后に献納せられたり、其後該國滯在の佛國派遣宣教師は其庭園中に一の美麗なる禮拜堂を建設したり、又マリアとヨセフは救主を養育する爲に、ヨセフは木工を業とし、マリアは衣を縫ひ、絲を紡き、布を織り、以て俱に生活を營めり、亦以て其辛苦艱難を想ふ可し、殊に彼の地の人民は聖族を輕蔑し、異邦の人たるを以て、交を結ばず、故に二聖は恰も敵地に在るが如し、斯の如き艱難を極むること、實に七ヶ年なりと云ふ、但し該國に滯留したる年月に至りては、其の幾年なるや

嬰孩殺戮の慘狀

聖書に記載なきを以て、判然之を知ること能はずと雖、傳說に據れば、概ね七ヶ年なりと云ふ、基督の既に去れる後、ヘロデスに選ばれたる好血者十二月二十八日ベトレエムに飛び來り、生れて二歲以下の夥多の嬰兒を其母親の腕と懷より强奪し、刀劍を以て刺殺せり、其時衆民の歎き悲みは目も當てられぬ有樣にて、天を仰ぎ、地に轉び、哭き叫ぶ聲天地に響く計りなり、ベトレエムの四境の嬰孩數百人此時救主の爲に殺されたり、是れ即ち未だ是非を辨へざる孺孩なれど、全く殉死なり、致命なり、是れ昔時ゼレミアスと云ふ豫言者の言に應ず、其言に曰く、ラマに於て歎き悲み愁ふる聲聽ゆるなりと、ラケル其兒子を歎き、存命せざるに依りて慰みを得ずと、ラマと云へるは、ベトレエムを豫言せしなり、而してラケルは太祖ヤコブスの妻にて、茲に葬むられたる者なり、蓋しゼレミアスは之を以てベトレエムの衆婦を豫示せしなり、去れども又此の嬰兒等は救主基督の爲に其身を以て犧牲と爲し、有限の世を去りて無限の世に入り、許多の悲哀不幸の充滿せる世を離れて、許多の喜悅幸福の充滿せる世に往くを得たり、今は此等無辜の嬰兒を譽めて、救世主基督の第一の犧牲なりと云ふ。

(7)基督の歸國

天の應報は立どころに到るものなり、茲に惡王ヘロデスは斯る血を流す所爲をなせし責罰として、世にも恐ろしき惡疾を生じたり、即ち全身盡く腐敗を催して、惡臭甚しく、人をして其側に在る事能はざらしむるに至り、終に惡蟲全身に生じて、其喰ふ所となり、痛苦極りなく、汚臭堪へ難くして、死するに至れり、或歴史家は王はベトレエムの嬰孩を殺戮せし一年を出でずして死せりと云ひ、又他の歴史家は四年の後死せりと云ふ、何れが確實なるや、今遽に之を決し難しと雖、要するに二年乃至四年の間なり、斯てヘロデス王死せしかば、天使は夢にヨセフに顯はれて云ひけるやう、起きて嬰兒と其母とを携へ、イスラエルの地に往け、嬰兒の生命を索むる者既に死せりと、ヨセフ起きて嬰兒と其母とを携へイスラエルの地に到りしが、アルケラウスが父王ヘロデスに代りユデアの王たりと聽き、彼處に往くを恐る、時に又夢に默示ありて、ガリレアの内に退き、ナザレットと稱する邑に往けと云ふ、ヨセフ命を受けて最と喜び、片時も猶豫せず、聖子基督と其母マリアとを携へ、エジプト國を立出でたり、而して其のユデア國に還るや、先づイエルサレムに赴き、聖堂に至りて天の指導と其庇護とを深謝せんとしたれども、ヘロデス王の子アルケラウス、ユデアの王となり、イエルサレムに在りと聽き、彼處に往くを嫌忌せり、即ちアルケラウスも父王の如く或は救主を殺害せんかと恐れたり、ヘロデス王死に就けるや、生れながら王の貪欲を享有せるアルケラウス及びアンチパスの二子は、互にユデアの王位を取らんとして相爭へり、而して其の爭や到底和合すること難かりしを以て、終に羅馬の皇帝オグストスに訴へ、以て其の裁決を求むるに至れり、是に於てオグストス皇帝はユデア國を別けて四部と爲し、四部毎に各々一の首長を置きて之を宰治せしむることとなせり、而してアルケラウスはイエルサレムとユデアとを有するを得たり、是に於て其心竊に以爲く、此の如くイエルサレムとユデアを有しつゝ、終には能く諸部の總王たるを得んと、(即ち之を詳言せば、ユデア全國の王たるを得んと)、然れども此の空望は成就するに至らざりき、即ち九年の後アルケラウスは國人の嫌忌の爲に、終に其の位を退けらるゝに至りたり、是より以後はオグストス皇帝己が代理として之を宰治せしむる爲め一人の主治者を立てたり、後年惡徒等に强られて救世主を死刑に

天の應報立に到る

歸國して天に深謝す

定めたるポンシウス・ピラトスの如きは、第五の主治者たりき、ヨセフは救世主と其母マリアとを携ひ、エジプト國よりユデアに還り、ユデアを左にして北の方なるガリレアに入り、ナザレットと稱する邑に居を定めたり、是れ即ち投世主基督がナザレヌスと稱せられし所以なり、ナザレヌスとはナザレット人を指す語なるが、其の意義は離居せる者、或は聖者、又は美花にて飾れる者を云ふなり、蓋し此時基督は寔に人々に離れて偏陬なるナザレットに退きたれば、ナザレヌスの名稱偶々之に適中せるものゝ如し、又基督は寔に聖者中の聖者即ち至聖者なれば、聖者の義を有せるナザレヌスの名稱適中せるものと云ふべし、尙又基督は寔に無形の美花にして、天の美麗純精なる榮寵を以て其の心を莊飾せられたれば、美花にて飾れりとの意を有せるナザレヌスの名稱又之に契合せりと云ふべし、聖書に左の如く云へり、我等其榮を見るに、寔に父の生み玉ひたる獨子の榮にして、恩寵と眞理にて充てりと、是れ救主基督の榮寵を指して云へる語なり、抑ナザレットはガリレアの一小邑にして、イエルサレムの北方二十餘里の處に在り、元來此邑は救主降世以前には世人の多く知らざる所なりしを以て、舊約聖書中には此邑に就

歸來ナザレットに居をトす

ナザレットの名稱及風景

きて記載せざるなり、新約書には左の如く記せるあり、ピリップス、ナタナエルに遇ひて之に曰ひけるは、我等掟の中にモイゼスが載せたる所、豫言者の記したる所の者に遇へり、即ちヨセフの子ナザレットのイエズスなりと、ナタナエル之を聆き曰けるは、ナザレットより何の善き者出でんやと、夫れ此のナタナエルの言を以て見るもナザレットの古來人々に知られず、且輕視せられたるを知るに足るべし、去れども第十八世紀の頃よりして此の微賤なる一邑は變じて非常に有名となり、無限の榮譽を得るに至り、ナザレットの名稱は萬國に愛慕せらるゝに及べり、ユデアとナザレットとイエルサレムを以て最も尊貴なる福地と爲すに至れり、亦もナザレットはガリレアの中央に在りて、沃饒にして且佳麗なる一邑なり、此のナザレットなる名稱は如何なる義を有するやと云ふに、花の義を有せり、ナザレットの名稱自から能く其佳麗の地なることを表示せりと云ふべし、昔時或著述家は薔薇花が綠色の葉を以て圍繞せらるゝが如く、ナザレット邑も亦綠色の山丘の上に隨在せらると云へり、寔に此言の如くナザレットの邑は階級を爲せる山丘の上に隨在せり、而して此の山丘は綠樹繁茂して其の眺望頗る佳なり、人家は皆石にて建造し、

聖族の家屋

其の屋上は平坦なり、這は是れ亞細亞西部一般の風なり、其の道路は狹隘にして、山丘の階級に隨ひ、昇降し得べし、又人家は大率ね山丘の岩面に附接して建てり、又其の山丘の岩石中に一二の洞窟を穿ちて、家屋の狹隘を補足せるものゝ如し、且盛暑の日には人々此の洞窟中に退きて、暑氣を消せり、今時人若しナザレットの有樣如何を見れば、則ち又昔時の有樣の如何をも推知し得べし、如何となれば此邑は屢々破壞の患ひに罹れりと雖、復又往時の有樣に建築せられしを以て、今も尙依然として當初のナザレットと大差なければなり、聖族の住みたる家屋は許多の家屋と異なる事なし、蓋し此の家屋は後年(即ち一千二百九十一年に當り)回々教徒がバレスチナの諸聖地を略奪せしときに破壞の患にかゝらんとせり、去れども天は救主の久しく生活したる聖家の空しく破壞せらるゝを許さゞりしにや、同年五月十日の夜其礎を離れて遠くダルマシア國のアドリアチック海濱の地に移り去り、後又一千二百九十四年十二月十二日此地より伊太利亞國の露助得と稱する所に移り去れり、即ち此の露助得は殆ど今より六百年前より聖家の現存せる所にして、諸國の基督教者は勿論、好事者流も聖家を見ん爲め、遠く此地に來遊する者甚だ多し、今此の聖家の內部を見るに、其の天井は木にて造れり、其色は淡青にして處々に黃金色の小星を畫き出せり、其壁は厚ふして凡そ一尺ありて、其の壁面は高低ありて平かならず、一の戶扉ありて、其の右方に又一つの小窓あり、小窓の前に當り石にて造れる祭壇あり、其上に木にて造れる十字架あり、十字架の上には基督の聖像を畫けり、其又上部にユデア人の王ナザレットのイエズスと書せり、又其の祭壇の近き所には小器具を藏める爲に戶棚樣のものありて、其內には小兒を養ふに用ゆる小き飲食器等を藏め置けり、左の方には一の窟あり、其上に檜にて造れる基督を抱ける聖母の像あり、其面は黃金色に塗りあれども、年を經る事久しきと煤煙の爲とに依り、黑色に變じ居れり、聖母の頭には冠ありて、其の全身には赤色の羅紗の衣服を着けたり。

(8)基督の守節

基督は幼より三十歲に至る迄ガリレアのナザレットに寓居して、マリア、ヨセフに事ひ、深く孝敬を盡せり、此は聖書中にも見ゆ、されば基督は凡兒の如く無言を守り、智德を韜し、ナザレットに居住する事數年なれども、其間の事跡は絕て聖書に記

逾越の節筵の起因

載せず、唯聖書に記載せるは十二歳の時マリア、ヨセフと共に踰越の節筵を守る爲め、イエルサレムに到りしが、獨り聖堂に止り、諸學士と教法の奥義を問答し、大に衆人を感動せしめたる事のみ、夫れ踰越の節筵はユデア人の爲に最も大いなる祝日なり、今其の起因を尋ぬるに、昔時イスラエルの民がエジプト國を發足して、恰も紅海の岸に到りたる時に、ファラオ軍の爲に追擊され、前に海あり、後ろに敵ありて、進退茲に谷りたる時、天はモイゼスに命じて、紅海の水中に一條の道を開き、彼等をして徒跣にて大海を渡り、終に虎口を遁れしめたり、故にモイゼスはイスラエルの民をして、此の大恩を永く記憶せしめんが爲、踰越と稱する節筵を設けて、毎年此の祝祭日に國民は都府イエルサレムの聖堂に上り、天に謝恩の禮を盡さしむるの例を立てたり、惟ふにマリア、ヨセフも毎年基督を携へて、此の祝祭にはイエルサレムに上りたるものならん、偖其の祝祭には人々皆イエルサレムに赴く可き例規なり、舊約聖書に曰く、汝の男たる者は僉年毎にイオヴァの前に出づ可しと、又曰く、空手にて主の前に出づ可からず、必ず捧物を携へて主に進むべしと、又曰く汝の地に初めて結べる實の初物をイオヴァの尊前に持ち來るべしと、

父母基督を見失ふ

右に掲げたる所の例規に據りて、基督の義父ヨセフ及びマリアは毎年踰越の節には、必らず都府イエルサレムに赴きたり、而して汝の男たる者は云々の言に據れば、ヨセフのみ之を守りてイエルサレムに往かざるべからざれど、マリアは必ずしも往くべきの定規にはあらざりしなり、即ち婦人は往くと往かざるとは、隨意に屬せり、然れどもマリアは善く制規を守るを望みしを以て、敢て之を缺かず、年毎に淨配なるヨセフと同じくイエルサレムに赴きたり、又救主基督は是迄イエルサレムに赴きたる事ありや否や、之に就きて正史は何等の言をも記載せざるなり、只福音書中に於て簡單に誌記せるのみ、蓋し基督は十二歳より以前に赴きたる事なきが如し、如何となれば未だ幼弱にしてイエルサレムに到る路程は甚だ遼遠なりしを以て、之に堪ゆる事能はざりしが故なり、ユデア國にては古敎の規則に依り凡て士民の差別なく、其歳漸く長すれば、年毎にイエルサレムの聖殿に參詣して、瞻拜する事七日間打ち續けり、其の聖堂の規則には瞻拜畢れる時、男女各々班を分ちて出づれども、但だ稚童のみ其父母に從ひて出でたり、然るに基督はマリア、ヨセフと同しくナザレットに居りしが、歳十二歳に成りし時兩親

と共に踰越の禮を行はんが爲、道遠けれど、イエルサレムに上るを深く悅び、其悅びの一つは聖都と聖殿の美麗を見るなりき、去れば此日拜畢りて各々堂中より下るに、稚童は其の父母に從ひて下りけるに、基督は其時少しく其の聖光を彰さん爲、獨り聖殿に止まりしを、父母は之を知らずして、我子の見へぬを憂慮す、然れどもヨセフはマリアと俱ならんと思ひ、マリアは又ヨセフと共ならんと思ひ、遂に父母の聖殿を出でゝ往く事一日程、爰に父母は道にて出遇ひ、始めて我子を失ひしを知りて、同行の人々の中に有らん、親戚知音の方に有らんと思ひつゝ、行き過ふ親友知音に問ひたれども、更に之を知り得ざりしを以て、終に又路を返して探索する事餘力を殘さず、再び都城に歸りつゝ、遍く索むる事三日なれども、見當り得ず、如何せんと思ひながら、遂に聖殿に入りしかば、幸にして聖殿に於て之を見附けたり、其時の父母の喜悅は如何計りなりし哉、實に尠少ならざりけり、此時基督は今正に名高き夥多の敎師諸學士の坐中に在りて、經典の奧旨を問答せるに、之を聽聞する者、皆基督の智能を奇とし、嘆稱せざるはなし、マリア之を見、驚喜交々到り、深く喜びしが、前の悶ひを想起して、之に向ひて曰く、如何に愛兒よ、何ぞ

基督學者と論議す

我に離れしぞ、三日間爾を覓めん爲、痛苦を覺へたり、何の爲に我等に對し、是の如く爲せしや、視よ、我と爾の父心を痛めて汝を尋ぬと、基督此時答て曰く、奚ぞ我を尋しや、我は我が父の事あるに依て、我茲に在らざるを得ずと知らざるやと、此語を聆く者、僉な悉く不思議の應對に喫驚せざるはなかりけり、夫れ基督の行事は、吾人の模範なれば、苟も其母に對して不敬なる言語の有べき謂れなし、我は我が父の事とは、必ず在天の聖父を指したる語なり、即ち人は肉體の兩親よりも神を愛敬し、良し兩親の望みに違ふ共、寧ろ神の聖意に背くべからずと、至尊への報意を示したるなり、亦もマリア、ヨセフは此答を聆き、之を心に納めて、基督に逢ひしに依て、歡喜踴躍大方ならず、終に兩親に伴はれて、ナザレットに歸りたり、是より齡を增すに從て、其の智德の光、天地神人の前に彰はれたりとは、是れ即ち聖書の言なり、基督は凡兒の如く、歲月を積むに從て、其德を言行に顯はし、人々の標準とならんか爲、幼時の折は其の智德を韜し、漸を追ふて次第に之を顯はせり、基督はマリア、ヨセフに事へ、以て孝敬の表を立て、其後イエルサレムに於て機會を擇び、暫く顯擧し以て其能を顯はし、其後又再び智能德行を包み、三十年の久しき、只だ心

齒德俱に加はる

力を稼業に盡し、以て兩親に服事せり、されば救主基督の謙遜順從も亦實に大ならず哉、又基督は敎をユデア國に傳ふるに先立ち、先づ親躬ら諸德の表を立てたるは、是れ人々を訓誨するには、口傳よりも實行を以て正道に導くべきを示さんが爲なり、實に人々を敎導せんとするには、其身率先して善德を修めずんばあるべからず、基督の人を訓導せる方法を見るに、講說を以てしたるにあらず、躬親ら孜々として善を行ひ、德を積み、以て萬民の儀表となれり、何事も自ら實踐躬行して、以て人々に範を示せり。

基督の公生涯

(9)基督の受洗

粤若に西國の總王なるセザール、チベリウスが治世の十有五祀に當りし時、基督は愈々世の救主なりと公然世に出現す、時にポンシウス、ピラトスはユデア國を統治し、ヘロデスはガリレアを治め、アンナ及カイファスは司敎の首長たりし時、天は寂寞の地に居住せるザカリアスの一子ヨアンネス洗者をして野の聲を發せしめ、之を救世主の先驅となせり、偖此のヨアンネス洗者は救世主に先んじて生るゝ事半載なり、此人幼稚の時より曠野寂寞の山中に隱れて、道を修め、身には駱駝の毛衣を纏ひ、皮の帶を締め、蝗蟲と野蜜を喰ひ、又は橄枇菓の實を食糧として、一粒の米麥をも喰はず、嚴敷道を修する事殆と二十有餘年に及び、其齡三十歲に至りて、世上に出でヨルダン川と云へる川邊に來りけり、此のユルダン川と云へるは、聖地イエルサレムの東の方に在り、茲に至りて岸低く、幅凡そ七八十尺にて、深さ大約五尺なり、此所は昔時ヨスエと云ふ者ユデア人を引率して渡りたる所なり、其時上流の水は恰も墻壁の如く止りて流れず、下流の水は悉く流れ去りたるを以て、ユデア人は難なく渡る事を得たるなり、今時に至りては年々復活祝日前の月曜日に當り、グリシア及びルシアの公敎者と正敎者とを問はず、許多の人々此所に集り來りて、恰も洗禮を授かる時の如く、水中に其の身を沈め、昔時は洗禮を授かる時三度迄水中に全身を沈めたるなりとて、洗禮を授かりし時に立てし誓約を再度改めて歸るを常とす、开も此の川水は救主基督が其の尊體を沈めたりとて西人多く此の川水を以て受洗を希望す、就中フランスの王公貴族の如きは、此の川水を以て洗禮を領することを常例とせり、去程にヨアンネス洗者は此川の邊りに來り、呼びて曰く、天國は將に近つけり、世上の人々能く懺悔せよや

ヨルダン河畔のヨアンネ

と、其敎の道を敷き弘め、頻りに人々に勸化をなし、衆人をして眞實に悔ひ改めしむる爲洗禮を施せり、之を聆く人々愼んで其言に從ひ、深く罪科を白狀したり、其中にファリゼイ人も又サドセイ人もあり、ヨアンネス之を見て曰く、蝮の子孫よ、今茲に來りて其怒りを脫する事は、誰か敎へしぞ、汝能く後悔して、相當の實を結べよかし、我等の父は是れアブハムなりと云ふ勿れ、我れ汝に告げん、誠に天は石からにてもアバラハムの子孫を出だすことを得、今や釿が木の根に着けり、若し善き實を結ばずば、伐られて火の中に投げらるべしと、此時衆人ヨアンネスの風貌を見るに、身は毛衣に木葉を纏ひ、手足の爪は延び、如何にも寥々敷姿に其嚴き說諭を聆き、之に感じ救世主なるかと思ふに至れり、ヨアンネス之を悟り、我は救世主に非ず、我より後に來る者は我に勝れる權能あり、故に我は其人の履の紐を解くにも足らざる者なり、我は汝等を洗ふに唯此川水を以てすれども、後に來れる者は、聖靈を以て汝等を洗ひ淸む可し、今手から箕を携ひ、扨場を淸め、麥を己が藏に納め、藁を不滅の火に投ずと、從前より犯せし愆を痛悔せしめたりしかば、其名四方に聞えて、國人擧つて其の敎誨を受け、ヨルダン川水を以て衆人に洗禮を施

ヨアンネスの洗禮

したり、去れば天は救世主を世に降すの前き、屢々許多の預言者を遣はして、最後に遣はしたる預言者は救世主の先驅ヨアンネス洗者なり、此のヨアンネスが授くる洗禮は、今日の如く原罪自罪を洗除する功力あるものにあらざるなり、故にヨアンネスの洗禮は罪科を赦すの表標にして、衆人に悔改めを勸め、眞の洗禮を受領して、罪の赦しを願はしめたるものなり、抑もユデア國の規則は、歳三十歳に滿たざる者は、公衆の前に敎法を講說することを許さゞりし故に基督は三十歳迄世上に現はれざりしなり、昔時イザイアスが救世主の降生に就きて預言せし事あり、我れ天使を遣して、汝の前きにありて、預め汝の爲に道を開きなん、又も原野の中にて高く呼び、人々をして、主の途を治めしめ、曲る徑を直くするなり云々と、此の預言に天使とあるは、誰を指して云ひたるかと云ふに、此は疑ひなくヨアンネス洗者なり、偖も此折しもヨアンネスはヨルダン川の邊りを巡歷して、洗禮を望む者に過ちを悔ひ改めしめ、自後再度犯す間敷と、是より魂を入れかへしめたり、然るに基督は御歳三十歳ガリレアのナザレットよりユデアの國に至り、即ちヨルダン川の邊りに來り、ヨアンネスに面會して、洗禮を受くることを望めり、ヨアン

ヨアンネスと基督との推讓

ネスは再三辭退して、否みたれども、基督は自ら强て之を受けたるは、如何なる理由のある事なるかと云ふに、是れ即ち今日の洗禮の徵象なれば、基督は之を受けて以て吾人に洗禮を受くることの必要なるを示し、併せてヨアンネスの洗滌を聖からしめたる者なり、而して洗禮を受くるに於て正に順從を行ひ、惡人に代り、罪を負ひ、人類の赦を得んが爲、ヨアンネスに就き、恰も庸人の如く、敢て惡人の中に伍し、自ら視て惡人となし、惡人と同一になりたるは、實に無限の謙遜にして、之より更に卑賤の地位に下ることの能はざるなり、然れ共基督は殊に卑賤の地位に下りたる度毎に、終始高尙なる地位に上げられたり、即ち其時偉人なること愈々顯然となりたり、既に基督ヨアンネスに會して、洗禮を望みしに、ヨアンネス之を聆き心安からず、我こそ御身に洗禮を受くるを求むべきなれ、然るを爭で御身に授け奉らん哉と、固く辭退しければ、基督之を聆きて曰く、ヨアネンスよ、姑く許せ凡て善き事は吾等盡さゞるべからずと宣ひければ、ヨアンネスは漸くにも其言に從ひ、終に基督に洗禮を授けたり、而して基督は水中より上りしかば、之が爲忽ち天開け、光明輝き、渡りて、聖靈は鴿の形を借りて、基督の頭上に現はれ、空中にては天父の聲あり、是れぞ我が慈しむ所の愛子にて、眞に我が心を喜ばしむる所の者なれと、其聲空際に聆えたり、斯て基督の救世主たる事は天より證せられたり、

我は唯だ野の聲

然れども基督は其功を開くに先だちて、聖靈に導かれ、ヨルダン川を離れて、沙漠に至れり、聖靈が鴿の形となる所以は、鴿は素より柔順潔白なる鳥にして、最も人の愛する鳥なれば、其形を借りて基督の頭上に臨みたり、此は基督の諸德を表する所なり、然るにヨアンネス洗者は絕間なく人々に救世主の來れる事を知らしめんが爲、曠野に住すれど、信從する者甚だ多ければ、國中の古敎を司れる者此事を色々と考へたれども、未だ決する事能はざれば、學問の秀でたる者數人を集め評議してヨアンネス洗者の許に來りて、其の人々宣ふ樣、汝も御身は如何なる人にて候哉、先知諸聖人等が切りに希望せし救世主の基督には候はず哉と問ふ、ヨアンネス再三答て曰く、我身は唯聲を揚げて、此野に呼び、衆人を勸めて、塞がれる處を打開き、其道を繕ひて降誕する救主を迎ひ奉る準備をなす者なりと、學士再び曰く、既に救世主の御方に非ざれば、何の譯にて人を洗ひ玉ふ哉と、疑ふ心のありければ、ヨアンネス曰く、我が用ゆる洗水にては、唯人々の形體をのみ洗ひ清む

基督受洗當時の光景

るなれど、其洗ひを受けたる中の一人、我より後れて生るれど、誠は我れより前きなり、彼は聖靈を以て人々の心を洗ひ清むる能力を有する者なり、其手恰も簸揚なしつる箕の粃糠を別つが如し、其の粃糠は永苦の猛き火の中に投げられ、美穀は倉に納めらる、是れぞ則ち救世主基督に在すなれ、我れ固より其靴の紐をだも解くに足らず、且又彼れ予に洗禮を請ふの際、我れ固く辭退してけるに、彼れ宣ふやう、汝姑く許せ、我れ當に斯の如くして諸の義を成す可しと、故に予其言に順ひ、川水を以て彼れが頭上より洗を授け參らせたれば、忽ち上天開け、光明赫々として輝き渡り、聖靈は鴿の形を成して、彼が頭上に現はれぬと云へり、再三ヨアンネス、ベタニアと云ふ所に至りて、救世主世に來れりと衆人に知らしめたりしに、ユデアの司祭等人をイエルサレムよりヨアンネスの許に遣し、汝は誰ぞと問はしめたる時、ヨアンネスは諱す事なく、言明して、我は救世主に非ずと云へり、彼等又問ひけるに、然らば汝は救世主に非ず、エリアスなるかと、ヨアンネス然らずと答ふ、然らば汝は預言者なるかと、ヨアンネス又然らずと答ふ、是に於て彼等又問て曰く、汝は誰なるかと、我等を遣したる者に答をなし得る樣、我等に告げよと、ヨアンネス此時、我はイザイアスの云ひたる如く、主の道を直くせよと、野に叫ぶ聲なりと答ふ、ファリゼイ人又問ふて曰く、汝若し救世主に非ず、エリアスに非ず、預言者に非ざれば、奚ぞ洗禮を施すやと、ヨアンネス曰く、我は水を以て洗禮を授く、然れ共汝等の知らざる所の一人、汝等の中に立てり、彼は我に後れて來りたれど、我に優れる者なり、我は其靴の紐を解くにも足らざる者なりと、救主基督の齋戒を成せる間、絶えず救世主來れりと衆人に知らしめたり、素よりヨアンネスは獸臠に五體六根を凝して、嚴敷齋戒せしかば、衆人之を見て感動しけり、又常に沙漠原野を望みて、救世主の大道を顯はさんが爲、其の時日を待ち、其の德行益々進み、救世主が道をユデア人に示す時日に至る迄、寂寞なる深山に住居して、其身生れたる所より一里有餘隔たる山中の岩窟内に棲息せり、此の山中はイエルサレムを距る事西南二里に在りて、道路も頗る險惡なり、其麓に深淵なる溪谷ありて、岩窟は此の溪谷に臨み、至つて風景絶佳にして、珍らしき勝地なり、此の岩窟には二つの大なる穴あり、一つは出入口にて、他の一つは窓なり、入口の幅は六尺にして、長さ即ち行間一丈なり、而して又窟中に大なる石ありて、宛然臥床の狀態をなせり、今

ヨアンネスの隱退せる岩窟

は此石を呼んでヨアンネスの臥床と云ふ、又此の窟内の入口に接近せる所の岩石の割目より、泉水潺々と流れ出で、山の麓なる溪谷に注げり、これなんヨアンネスが幼少より三十歳に至る迄、塵世を脱して、上天の神と交り、專ら之に事へ、善德を積まんとの高尚の心より、此山中に棲ひたるなり、偖も基督は四十晝夜斷食の後荒野より歸りたる故、ヨアンネス又衆人に示して曰く、是れ世の罪を償ふ神の羔なり、彼は我に後れ來りて、我より優れる者なり、蓋し我より以前に有りし者なればなり、予の屢々言觸せしは、則ち此人なり、我れ此人を知らざりし、然れども我は彼をユデア人民に示さんが爲、水にて洗禮を施すなりと、又證して曰く、時しも聖靈鴿の形をなして、天上より下りて、彼が頭上に現はれたり、然り而して上天忽ち開け、光明赫々として輝き渡り、又空中にては天父の聲あり、我が慈しむ所の愛子なりと、正に聖靈の降臨せしを眼前に見たりし故、必ず彼れは救世主たる事を知りしなり、故に彼は必ず神の羔たる事を證せりと、何故ヨアンネスは救世主を指して羔なりと云へしやと云ふに、昔は罪の償の爲に、羔を殺して之を犧牲として天に捧げたり、而して基督は萬民の罪を償ふ所の救世主なり、且又昔時の羔は

世の罪を償ふ神の羔

自身にて罪を償ふ程の力を有せざりしが、基督は自身にて罪を償ふ効力を具ふるを以て、是れ即ち眞正の羔なりと云ふべし、ヨアンネスが世の罪を償ふ神の羔なりと云ひたるは、之が爲なり、尚ヨアンネスは衆人に示し、諭して曰く、天上より降り來れる者は、世の人々の上に立ちたり、地上に居る者は、地上の事をのみ知れる者にて、天上より下り來れる者は、衆人に超絶する者なり、去れば天父の遣はせる者は則ち天の聖子にて在ませば、天父の尊き御言を演へ玉ふ者なり、彼の天父は其の聖子を寵愛なし玉ひて、森羅萬有を司り玉ふ御力を世の人々に授け玉へば、之を信じ奉る者は、必ず永生を得べき者にして、又之を信せざる者は必ず永苦に墜落する者なりと云へり、是よりして基督に隨從する者日に增し多きを加へけり。

(10)基督の斷食

基督はヨルダン川にヨアンネスより洗禮を受けて後、聖靈の導きを蒙り、沙漠に適き、四十晝夜一粒の米麥をも食はず、一滴の水をも飲まずして、嚴敷斷食を守り、又默想祈禱をなして、日夜に身を責め、饑渴を覺へ、以て傳道の豫備をなせり、基督

聖四十日山

が斷食せし山は、イエルサレムに接近して、其西と北に當る所なり、今此所に聖四十日山と云ふ一の小山あり、是れ基督が四十日間斷食をなせしを以て、斯く名けたるものなり、而して基督は又人類の罪の赦免を天父に願ひ、夫れに代つて罰を受けたるは、是れ則ち人類の龜鑑とならん爲なり、抑斷食及び祈禱は人類に缺く可からざるの要道なり、斷食のことは遠き古代にありて既に行はれたる事、疑を容るゝ能はず、何となれば勤末記に曰く、『七月十日汝等當に皐め、自收すべし、此日に當り、司祭は既に汝等に代て罪を償ひ、我が前に於て惡を去り、潔をなさしむ』と、又約耳書に、主曰く、汝等一心に禁食號哭悲哀を以て、我に歸すべしとあり、其外又厄難を避け、恩寵を求むるが如き事ある時は、往々にして斷食を宣告するの常例ありたり、故に曰く、我れ亞哈瓦の川濱に在り、衆人をして禁食せしめ、主の前に於て痛く自ら怨艾(くいあらため)しめ、我等及び我等の子女と凡ての所有物と俱に坦途(たいらかなみち)を得んことを望むと、又以士喇紀に曰く、ニニウの如きは、四十日の久しき、危險の地位に立ち居たれども、斷食の力に由りて、遂に災厄を免れたる事實ありたり、故に曰く、王諸侯と出で、遍くニニウの邑に諭して曰く、人類を始めとして、六畜牛羊に至る迄、

斷食の方法

俱に糧を食ひ、水を飲むと勿れ、庶幾くは主或は其志を顧み、其怒を息め、我等をして亡びざらしめん、是に於て衆民舊惡を去り、之を鑑察し、則ち其志を顧み、災果して降らざりき、今新約書より之を考ふるに、救主基督自ら斷食をなして、人々に手本を示したり、故に曰く、基督禁食する事四十晝夜にして、斷食の方法を授けたり、又曰く、汝等禁食の時、僞善者の如く憂容を作す事勿れ、彼等色を變じ、禁食を以て人々に示す、我れ誠に汝等に告ぐ、彼等己に其賞を得たり、唯汝禁食の時、首に膏り、面に醒ひ、禁食を以て人々に現はす事勿れ、即ち隱微の父に現はせ、汝父隱に監る者、將に汝に報ゐんとす、又斷食の必要をも示したるとあり、使徒私かに基督に問ふて曰く、我等鬼を逐ふ能はざるは何ぞや、曰く不信の故なり、又曰く、祈禱斷食にあらずんば、此族出でざるべしと、又諸聖人の言行を見るに、古來聖人の位に列りたる世々の聖人の中には、一人として斷食の道に由らずして、聖域に入りたる者

斷食の効果

あるを見ざるなり、故に聖人の言行を考ふれば、人をして宛も斷食すると聖人となると同一理なる思想を惹起せしむ、尙道理上より論ずるも、斷食は德行に從事する者の缺く可からざる要務なる事明かなり、何となれば德を行ふには、先づ肉

身の慾を制するを要し、肉身の慾を制するには斷食を除て他に良好なる方法なければなり、現今斷食の如きは肉身の慾を制するに足らず、隨て德を行ふにも與つて力なしと主唱する異論者あれども、是れ自他を欺く異論者の一大謬說と云はざるを得ず、何ぞ哉、抑も德は心の剛强に在りて、心の剛强は肉身の慾をして全滅に歸せしむる能力あらざれ共、其の鋭鋒を挫折し、其勢力を減少し、肉身の慾をして大に衰頽の觀を呈せしむ、又斯肉身の慾を制する力をして、遂に心の慾を制するに及ぼすものなり、故に斷食は德を行ふに如何なる力を與ふるかは、古來德行を以て顯出せる道德家の實驗せる所なれば、此點に就て異論者が漫りに啄を容れて可否する能はざる者なり、加之、斷食は身體の健康に一大關係あるは、今更云ふ迄もなき事なり、其故は飲食を節すると過すとに由り、人身に著しき强弱を來す事は、世人の普く知る所なればなり、故に諺に云ふあり、曰く、飲食を過して死せる者は、之を節するに過して死せる者より多きに居れりと、偖又靈魂を救ふの道を獲んと欲する者は、先づ世の事を棄つべし、即ち壞れ易き事に心を繫けず、世の財寶名譽を慕はず、五體六根を責め、恣慾を懲らし、肉身上の樂み、浮世の喜びを

魔鬼基督を試探す

好まず、衣類、器財、飲食の外何等の事に就ても、中庸を主とし、又無用の談話、冗談等を避け、唯心を天に馳せ、神の美德と靈魂の救拯に係る事を專ら思念し、卒に己れの不足を認め、天に向つて罪惡の赦免を請ひ、恭敬感恩拜禮を盡し、以て其暗弱を助け玉へと懇ろに求むべきなり、夫れ這の敎訓に從ふ者は、眞に救主基督の徒なり、斯る人は必ず天より慰安を蒙るべし、偖も救主基督は四十晝夜の斷食を務め、又默想祈禱をなして、日夜其身を責め、太く飢へたるを見て、サタンと云へる魔鬼より、三個の誘惑を受け、之を禦ぎて以て、世の人々の魔鬼の誘へを拒ぐの龜鑑を示したり、此三個の誘惑は常々魔鬼は世の人々に對して試むる所の者なり、抑も此の魔鬼なる者は、元天使なり、天使は無數あり、位九品に分つ、色もなく、形もなく、明悟、記含、愛欲の三司あり、常に神の左右にありて、其令を奉じ、旨を承け、宛も朝廷の有司百官の如し、其中に一個の才能大なる者あり、ルシフェルと名く、自ら其の能力、其の高位を恃み、遂に傲慢の心を生じ、神の位を爭はんと欲す、开は又其心の中に己れ天に昇り、其位神の上に立ち、北極の山に坐し、尊き雲漢に登り、至上者の如くなるべしと思へり、當時其衆天使の中三分の一、ルシフェルに隨從して、神に背け

天使と魔鬼

り、默示錄に曰く、天に戰ひ起れり、ミカエル其使者を率ゐて、叛使と戰ふ、其の叛使も亦其徒を率ゐて之と戰へしが、勝つと能はず、且再び天國に居ることを得ず、是に於て此大なる龍即ち惡魔と呼ばれたるサタンは、全世界の人を惑はす龍蛇にして、地に突落さる、其徒も亦罰を受けて、獄に鎖され、永く無窮の苦を受くと、即ち今日稱する處の魔鬼なる者是なり、其餘の二分の善き天使は、常に神の左右に在り、永く天國の眞福を享け、今日稱する所の天使なる者是なり、此故に天と天に居る者は喜べ、地と海は禍ひなる哉、其の惡魔は自己が時の幾時もなきを知り、大なる怒りを懷きて、世の人の善を妒みて、罪に誘ふ者なり、神は叛使を罰するの後、方に吾人々類の始祖二人を造り、男をアダムと名け、女をエワと名く、黃土を用ゐて、肉身を造成し、一の靈魂を賦し、彼をして世にありて、虔心以て神に事ひ、德を修め、功を立て、死して後其の靈魂天に到り、以て叛使の位を補ひ、永く無窮の眞神を得せしむ、即ち今日稱する所の人の靈魂是なり、若し世上に在りて神に背き、魔に事ひ、兇惡を作さば、死して後は其の靈魂必ず地獄に下り、魔鬼と同じく無窮の苦を受く、是れ神と魔鬼と人類と三端の來歷なり、妄言以て之を混雜すべからず、又魔鬼は既に地獄に下り、必ず世上に反る能はざるに、今の世嘗て邪法の人を見るに、怪異の事を行ふ、若し魔鬼世に出で相助くるに非ずんば、唯人の自力萬々之を爲す能はず、見るべし邪魔尙ほ能く便に隨ひ、世に出で、以て人を騙らかすを、如何と云ふに、天は時により魔鬼の世上に出づるを許し、以て惡人の罪を形僂し、以て善人の功を試練せり、故に時として邪法の人及び邪佛の能力に非ず、則ち魔鬼其體に附着して、之をなし、人をして之を尊むを主となし、之を信じ、之を拜せしめ、死後彼と偕に同じく永苦の界に至らしむ、如斯魔鬼人を陷入して、永罰を受けしむ、是れ何の故なるかと云ふに、魔鬼は元と天使なり、但驕傲の罪に因て、天の罰を招き、天國の永福を失ひて、猛火の永苦を得、退て天下萬民を見るに、則ち天の愛子にして、若し世に在りて天を敬し、德を立つれば、死後必ず天國の永福を得るを知る、之が爲に上、天を恨み、下、世人を嫉み、天に害を加へんとす、然れども能はず、唯人を害するを得、故に百計以て、邪法人の身に附き、邪神佛の體に合し、名を冒し、簪を頂き、怪を作し、奇を弄し、人を誘へ、天に背き、己と同じく猛火の永苦に誘導陷入するなり、故に凡そ邪神佛を敬するの人、天の子と云ふ可からず、則ち魔鬼の奴なり、又天が

魔鬼の人を誘ふ所以

天の魔鬼に人を誘ふを許す理由

魔鬼に人を誘ふを許すは、一は人心の眞僞を顯すが爲、二は善人の功を增すが爲、三は惡人の罪を罰するが爲なり、當に知るべし、天、人に賜ふに明智の法あり、則ち自主の權あり、能く善惡を分ち、能く邪正を別ち、自ら能く取捨し、或は善を爲し、或は惡を爲す、僉な己より主張す、魔鬼能く人を誘ふて、惡を行はしむると雖、强て人をして罪を犯さしむる能はず、故に魔鬼の誘惑に順ふ者は、邪に從ふの罪あり、魔誘に從はざる者は、邪に克つの功あり、兵將の仇に勝つ者は、賞あり、仇に順ふ者は罰あるが如し、吾人則ち天の兵將にして、一生世に在つて即ち敵と戰ひ、若し魔誘に勝て、而も主の誡めを守り、死に至れども變せざれば、必ず以て天國永福の報を得、魔誘に順て天に背き、死に至れども改めずんば、必ず以て地獄の永苦の罰を受く、又知るべし、天は至公至義にして、更に偏頗あることなし、故に世人絲毫の善惡あれば、又必ず以て賞罰の報を受くるは必然の義なり、故に救主基督は其の魔誘を拒くの良法を垂れたり、サタンは救主の飢ひたる樣子を見て欺かんと思ひ、假りに修士の姿となりて近寄り、汝實に天の子なりとせば、何ぞ此石を化して以てパンとなし、以て其の飢ひたるを凌がざるやと、基督此時之に答て曰く、經典に云

魔鬼の基督を誘ひたる言葉

はずや、人たる者は其の生命を保つには飲食の養ひのみに非ず、夫れ肉身の生命を保つは、飲食に賴ると雖、吾人は肉身より更に貴き靈魂あり、而して其の靈魂の生命は飲食の能く保つ所に非ずして、必ず聖言に寄りて養はるゝと、故に天の敎に依らずんば能はざるも、のなり、是れ其の聖詞ある所以なりと宣ふ、時に又サタンは自分の智力に賴ましむる傲慢の誘ひを以て欺んとて、基督を携へ、都城イエルサレムの聖殿の頂上に伴ひて、經典に云へる天は天使に命を傳へて汝を諸途に守護せしめ、其　を以て、汝を扶けて躓かざる樣に致せりと、去れば汝若し天の子なりとせば、宜しく空を踏み、下に降りて此事を試みざるやと云へり、基督之に答て曰く、汝を司る全能の天を試みる勿れ、天の全能を以て將に汝の爲め其の天使に命じ、其天使將に手を以て汝を、扶けて、足の石に觸るゝを免れしめんやと宣へり、再三サタンは基督に世の財寶榮華を示して、貪婪に誘ひ欺かんとて、又々基督を携へ、至極高山なる頂きに登りて、天下萬國及び其の榮華を其前に擺列し、之に示して曰く、此等は悉く我が支配せる所なれば、汝能く俯伏して我を拜しなば、我れ必ず之を以て悉く汝に授けんと云へり、其時基督大聲に曰く、經典に云はず

基督が魔に誘惑せられたる理由

や、汝は汝を司る天地の主のみを敬ひて、專ら之に事へ奉るべしと、サタン立去れと叱咤しければ、遂に恐れ怖き詮方なくして何處ともなく遯れ去りたり、抑も基督は世の人々の鑑とならんが爲、魔鬼の誘ひを受け、彼より擁掖せられたるものなり、其誘惑には先づ飲食を用ゆ、今日世の人を誘ふも亦然り、即ち其の五體六根に逸樂を勸め、其心に邪望を發し、恣慾を煽き、以て其の心を不潔ならしむる者なり、次に基督を誘ふに、天に過分の倚賴を以てす、今も人々の罪を犯す便りあるときには、百方謀を廻らし、人々をして天を恐るゝの本心を失はせ、既に一の大罪を犯すに及びては、失望の心を生ぜしめ、遂に人々を坑に陷れ以て自ら快しとす、又高山の頂きに至りて、天下萬國の榮華を擺列して、汝我を拜せば、之を以て汝に與へんと云ふ、是れ即ち世の財寶を以て誘はんとしたるものにして、彼は常に貪慾、邪情、驕傲を以て人々を煽動迷惑せしむるものなり、亦基督は吾人に先き立ち此の如き大なる誘惑に會ひ、能く之を拒ぎて以て、人々に魔鬼の誘ひを破る方法を敎へ、能く天に奉事すべしと、去れば世の人々誘惑に會ふ時は、須らく基督の龜鑑に則り、之を拒くべきなり、其時サタンは立去りければ、天使其所に奔り赴き、形を顯し、供饌を進めて、奉仕したりと云ふ。

門徒の選擇

(11)門弟の選定

去程に基督は傳道に從事すべき時已に來りければ、許多の門徒を召して、其中より十二人の門弟を撰ばんとて、或日山に登り、祈願に夜を徹せり、即ち十二人の門弟を定む、其名左の如し、アンドレアス、其弟シモン、後ちペートルスと云ふ、ヤコブス、其の弟福音者のヨアンネス、及びヒリップス、及びナタナエル、後ちバルトルメウスと云ふ、マテウス及びトマス等なり、而して門徒中最も前きに召に應じたるは、ペートルスの兄アンドレアス及びヨアンネスの二人なり、此事は約翰傳に見ゆ、又アンドレアス、其弟ペートルス及びヨアンネスの三人の基督に謁したるは、アンネスの兄なるヤコブスの前にありしと云ふと雖、其の門徒の業を命せられしは、右四人等しく同時なり、又ヤコブス、ヨアンネスは基督の義父ヨセフスの兄の長女サロメとて、ゼベデウスと云ふ人に嫁して、此の二人を生めり、又サロメの兄弟なるヤコブスは門徒となりて後ち、イエルサレムの當初の司敎となれり、其弟シモンは其第二の司敎となれり、其他門弟に就ては何時又如何樣にして召に

就きしや、聖書に記錄なきを以て、知ると能はず、其後マテウスの召しに就きたるは馬太傳第九章及び路加傳第五章に載て詳かなり、又アンドレアスと云ふはユデアの國ベトサイダと云ふ處に生れ、父の名はヨナスと云ふ、其弟シモンと俱に漁獵を生業として暮し居たり、其時に當りヨアンネス洗者は沙漠より出て、ヨルダン川の邊に來り、ユデア國人に罪科を悔む改むる事を敎へ始めけり、折しもアンドレアスは往きて其敎を聆き、大に信仰の心をぞ起しける、去れ共未だ其業を止めてヨアンネスに隨ふことを決心するに至らず、度々其許に行きて敎を聆き、其心を養へ居たり、偖茲に救主基督の傳道に就きて一の記し置くべき事あり、そは他に非らず、即ち基督の容貌の事なり、抑基督の容貌は如何なりしやと云ふに、凡そ聖人善人杯が設令其の容貌の美麗ならざる者と雖、其心の清潔高尚なるに伴れて、自ら容貌に光彩を生じ、何となく麗しきものなり、是れ蓋し體軀は心に使用せらる者なるが故に、其心の如何は自ら體軀及び容貌の外に顯はるゝに依ればなり、故に人は其容貌を一見して、其心の如何を知ることを得べし、即ち容貌の輕躁浮薄にして、其心の穩靜なる者なく、其心穩靜高尚にして、溫順篤實なれば、其の容

基督の容貌

貌も亦自ら高尚にして、溫順篤實なる者なり、世の聖人善人に於て往々然り、況や世界の大聖基督に於てをや、其の容貌の美麗なりしは言ばすして明かなり、是を以て豫言者蚤く其の事を語れり、即ち舊約聖書に曰く、其の容貌の美麗なる、人々の子に勝りて、溫順寛裕の氣顏面に現はれり云々と、又基督の風采の秀美なりしことは、聖書に記載せざれども、聖傳に依りて明なり、今證と爲すへき者の中一を擧げんに、現今羅馬のワチカノ宮殿內の博物館に全體玻璃を以て作れる一の家屋あり、此家は基督の義父ヨセフ及びマリアの俱に棲みたるナザレットの家に擬したるものにて、其中に基督は四人の兄弟即ち小ヤコブス、ヨセフ、ユダ、シモンと俱にあり、然して基督は其帶の間に一の矩を狹み、左の手に建物の圖を畫きたる卷紙を持ち、右の手には一の杖を持てり、此の杖は權の標にて、基督が他の工人を監督せるを示せり、而して之を持て立てる風貌の美麗にして且秀逸なる事、實に驚くに堪へたり、是は基督の風貌の美麗なるを像らんが爲、工人の力を盡して製作せし所なるや明なり、又世の口碑に傳ふる所に依るに、基督の體軀は高からず、卑からず、其の中間に位し、其の容貌は溫和にして剛直なり、其毛髮は淡黑にして栗

基督の風采秀美の證據

門徒の基督に就ける動機

色を帶び、且長くして頭の中央より左右に分れ、垂れて肩に達し、其端捲縮せり、額は廣濶にして、面の半を占め、即ち頤の端より目に至ると、目より額の一端生ひ際に至ると同距離なり、斯の如き顏面は美なる者にして、且此の如き顏面を有する人は、多く知能ある者なり、無量の英智歷然として額上に現はる、目は人心の極底をも洞見するほど鋭利にして、而も愛憐の情を含み、口は溫和の容を帶び、髭は毛髮と同色にして、長からず、頤端の中央より二つに分かる、然して其動作の有樣は如何にと云に、使徒パウルスが哥林多人に與る書に曰く、我れパウルス救世主の溫柔寬裕謹愼なるを學びて、汝等に勤む云々とあるを見て知るべし、又オグスチヌス宣はく、我れ見る事を希ふ所の者三つあり、一に救世主の行步する有樣、二にパウルスの傳道せる有樣、三に羅馬人の凱旋する有樣是なり、是を以て基督の風貌の秀美なる事を知るに足れり、偖も基督は沙漠よりヨルダンの邊りに來れる時、ヨアンネスは衆人に其救世主なる事を示して、是れ即ち神の羔なりと云けるに、アンドレアスは其言を聆き、信仰の心を起しけるが、基督は此の二人を顧て曰く、汝等は何を求むる哉と、彼等曰く、先生は何處に在すや、基督曰く、來り見よと、彼等悅びて、基督の許に到り一晝夜續て其敎を聆き、家に歸りて其弟シモンに云ひける樣、福なる哉、豫て望みし救世主は最早此世に來り玉へり、我身は旣に見奉ることを得たりと、シモン之を聆き己も救世主に逢ひ奉らんと欲し、兄アンドレアスの紹介によりて基督に謁見したり、然るに基督の之を見るや、異日敎會の頭領たるべきことを洞知し、之に語て曰く、汝はベトサイダ鄕のバルヨナの子シモンなり、汝等は漁獵なり、宜しく我に隨從せよ、汝等をして人を漁らす者となさん、汝今より稱して其名をセファスと呼ぶべしと命せられたり、此のセファスとは羅甸語のペートルスと同じ、即譯言すれば、巖石と云ふ意義なり、之に依りてアンドレアス、シモンは門徒となりたり、其翌日ガリレアの方に進みける途中に、ヒリップスと云ふ者を見る、此のヒリップスも同じくベトサイダの人なり、即ち之を召して曰く、汝宜しく我に隨從せよと、其里にナタナエルと呼ばるゝ者有りしが、ヒリップス　其家に走り行きけるに、此時彼は人なき處の無花果の樹の下に默禱して曰く蚤く此世に救世主の光臨あれかしと深く待望し居たるを見て、ヒリップス大に悅び、之に語て曰く、我等は古昔の聖人モイゼス及び先知者の嘗て預言なしつる世の救

主を最早眼前に見奉れり、夫はイエズスと呼ばるゝナザレットの人にこそ、汝も疾く來り見參らせよと、ナタナエル之を聆き、ナザレットの郡より何ぞ美しき者の出づべきと打ち消したるを、ヒリップス曰く、汝斯迄疑はば、我と同じく行きて謁しなば、即ち之を知るべしと誘ひ來る折しも、基督は忽ち之を見て、是ぞ眞のイスラエルの人にして、僞り巧みなき者なりと宣ふ言葉を聞きて、ナタナエル大に驚き、先生は何に依て我を知り玉ふやと曰ふ、此時基督再び宣はく、ヒリップスよ、我れ汝を未だ招かざる時、彼の無花果の樹下にありつるを我は疾に見たるなりとの仰の下に、ナタナエルは平日救世主を深く希望し、嘗て無花果の樹の下に救世主に引合せのあらんことを祈願したりしを、今之を一見し玉ふや否や、天日よりも明かに知し召し玉ふは、疑もなく是ぞ正しく常人に非らずして、救世主ならんと深く信じ敬ひ、愼みて曰く、先生は實に天の聖子に在して、又我國の大なる御主なりと、益々信心をぞ起しける、其時基督重ねて宣ふ樣、我れ汝を無花果の樹の下に見たりと語れるを聞て汝は信ずれども、後年に至りなば、此事よりも遙に勝れる事を見るならん、夫は何ぞ哉、汝等後年の至公至義なる審判を免かるゝこそ願はしけれ、

其光臨は嚴然たる哉、日月星辰序を失して、日は晦暗、月は紅色を帶び、轉倒錯亂して、上天下地、四海萬國雜動す、其時に當りて世界の人々其の光景を目擊し、驚駭甚しくして、卒に皆死せん、時しも天使六合に渡り、喇叭を吹き、既に死したる人々を指顧の間に聚中すべし、開闢以來の人々海底地中に腐壞したるを元の靈魂に結合して、復活せしめ、ヨザファットの溪に集合せしむべし、其時人子電光の如く閃き、霹靂の如く出現すべし、又人の子の右と左に無數の天使の陟降するをも見るべしと宣へり、救世主は其の審判の日に至り如何にして審判するかは、後條に於て記す可し、聖書に曰く、人の子の來るや權勢を以てし、衆天使其左右に扈從し、尊榮の高位に坐せん、而して萬民を其前に招致し、恰も牧者の綿羊山羊を區分するが如く、一々之を區分し、義者を右に列し、惡者を左に退け、後其王右の者に向て曰はん、我が父の讚する所の者よ、來て造世の初めより備ふる所の國を受けよ、汝等は飢へし時我に食を與ひ、渴きし時我に飲を差め、旅せし時我を館し、裸體なりし時我を蔽ひ、病に罹りし時及び囚となりし時我を顧み、我を訪問せりと、義者乃ち曰はん、主よ、我等何時此等の事を行へしやと、主答て曰く、我兄弟の至微なる者に

なすは是れ我になすなりと、次に左者に向て曰く、汝等我が飢時食を與へず、渴時飲を羞めず、旅時我を館せず裸體時我を蔽はず、病時囚時我を顧みず、又我を訪問せず、去て水火に入れと、惡者乃ち曰く、我等何時汝の飢時渴時旅時裸時病時囚時之を知りて食を與へず、飲を羞めず、或は館せず、或は顧みず、或は訪問せざりしぞ、王又應て曰はん、凡そ汝等の飢者、渴者、旅者、裸者、病者、囚者に爲さゞりしは、是れ我に爲さゞりしなりと、是に於て賞罰全く分れ、義者は永賞を樂み、惡者は永罰に苦むと、施與の缺く可からざるや斯の如し、故に哀矜の誠衷あつて、主の爲に貧困を救濟する者は、後來の報賞必ず大ならん。

基督の傳道振

(12)基督の傳道

(1)基督の傳道振　古より聖人賢士の其道を得て天下を兼濟せんとするや、孜々矻々として、死して而して後已みぬ、故に禹は家門を過ぐれども、入らず、孔席は暖なるに暇あらざりしとかや、此二聖は自ら安佚するの樂たるを知らざりしにあらず、誠に天命を畏れて、人窮を悲めばなり、基督の世に降生したる、亦此心を以て天下に道を布けり、蓋し傳道は基督の生命にして、基督が天の使命を受けて、此世に生れ出でたる所以は、全く此に在ればなり、されば其の初めて、公生涯に入るやユデアの大都小邑を巡遊し、十二人の門徒を選ぶと同時に、到る處に道を說き、仁を施しぬ、福音記者は之を稱して『惠みを蒔きつゝ天下に周遊せり』と云ふ、蓋し此の如くにして初めて救世主の實を擧ぐるを得たるものなり。

萬人に對して萬人となるべし

是を以て基督は會堂に入りて道を講せるは勿論、人の家にも、山の上にも、湖水の邊(ほとり)にも、天下到る處に敎を說けり、時には惡人の群に交りて道を說けるが爲、物議を惹起し、ファリゼイの徒より彼は惡人と交はるとて擯斥せられたることもありしが、基督は之に答ふるに、健全なる人は醫師を要せず、病める人こそ醫師の必要あれとて、惡人なればこそ敎誨の必要あれと語りぬ、時には又當時の學者と堂々論議したることもあれども、多くは平民の友を以て自ら任じ、常に群衆を圍繞せしめて、諄々として道を說けり、婦人は勿論、子供を見ても之を愛撫しつゝ『嬰兒の如くならざれば、天國に入る能はず』とて、門弟等の之を遮るを制止したることあり、基督の高弟パウルスは傳道者の理想として『萬人に對して萬人とならざるべからず』と云へり、學者に對しては學者の樣に、無學者に對しては無學者の樣に、婦

女子に對しては、婦女子の樣に道を說くと云ふが如く、誰に對しても其人に適するまゝに敎を垂るゝと云ふことが傳道者の理想なりとて、パウルスは自ら之を實行したれども、其實基督先づ第一着に之を實踐躬行して傳道者の範を垂れたる者なり、其傳道に巧なる、人を見、物を見て直に敎化の端緒を開けり、又其傳道に熱心なる、徹宵敎を說きて倦まざることあり、而も其敎ふる所は高尙深遠の眞理にして、世の聖賢の多く未だ說かざる所に說き及ぼせり、請ふ著者をして基督は如何なる人に、如何なる事を、又如何なる風に說きたるかを逐一記さしめよ。

門弟に傳道法を說く

(2)基督門弟に傳道法を授く　基督は遍く鄕邑を廻り、到る處の會堂にて敎を說き、天國の福音を宣へ傳へ、凡ての煩悶せる者を慰め、凡ての病み疾ふ者を癒せり、民衆の流離散亂せるを見たるときには、宛も牧者を失へる羊の如しとて、太く之を憫みて、一掬同情の涙を注げり、其時門弟に語りて曰く、收穫は多けれども、工人は少し、故にその稼主に工人を收穫場に送らんことを願ふべしと。

斯くて十二人の門弟を召し、惡鬼を驅り、諸病を治せしむるの權を授け、之を遣はさんとするに當り、誡命を垂れて曰く、汝等は異邦人の途に往く勿れ、又サマリア人の邑にも入る勿れ、唯イスラエルの家の迷へる羊に往きて、天國の近きに在るを宣べ傳へよ、病める者を醫し、死せる者を活かし、癩病者を潔くし、魔鬼を驅逐すべし、汝等は無代價にて受け得たれば、無代價にて之を施すべし、汝等金銀及び其他の錢を携帶することなかれ、行囊を携ふることなく、二枚の裏衣をも、數足の履物をも、又杖をも携ふることなかれ、工人がその食物を得るや至當なり、凡そ鄕邑に至らば、其中の適當なる人を訪ねて、出るまで其處に留まるべし、人の家に入らば、その安否を問へ、その家若し平安を得べきものならば、汝等の願ふ平安は其家に至るべし、若し平安を受くべからざるものならば、汝等の願ふ平安は汝等に歸るべし、若し汝等を接ず、又汝等の道をも聽かざる者あらば、足の塵を拂ひて其家または其邑を立去るべし、我誠に汝等に告ぐ、審判の日到らば、ソドマとゴモラの地(天罰を受けたる地)は此邑よりも却て易からん。

蛇の如く智く、鴿の如く馴れかれ

われ汝等を遣すは、羊を狼の中に入るゝが如し、故に蛇の如く智く、鴿の如く馴良かれ、愼で人に戒心せよ、蓋人なんぢらを集議所に解し、又その會堂にて鞭つべければなり、又わが緣故に因て候伯および王の前に曳かるべし、是れかれらと異邦

人の證をなさんが爲なり、人なんぢらを解さば、何を言はんかと思ひ煩ふ勿れ、其時言ふべき事は汝等に賜るべし、是れなんぢら自ら言ふに非ず、汝等の父の靈その裏に在りて言ふなり、兄弟は兄弟を死に付し、父は子を付し、子は兩親を訴へ、且これを殺さしむべし、又なんぢら我名の爲に、凡の人に憎れん、然れど終まで忍ぶ者は救はるべし、この邑にて人なんぢらを責めなば、他の邑に逃よ、我まことに汝等に告ぐ、汝等イスラエルの諸邑を廻盡さゞる間に、人の子は來るべし、弟子は師より優らず、僕は主より優らざるなり、弟子は其師の如く、僕は其主の如くならば足りぬべし、若し人、主を呼でベルゼブブと云はゞ、況して其家の者をや、是故に彼等を懼るゝこと勿れ、そは掩れて露れざる者なく、隱れて知れざる者なければなり、我幽暗に於て汝等に告しことを光明に述べよ、耳をつけて聽きしことを屋上に宣播めよ、身を殺しても魂を殺すこと能はざる者を懼るゝ勿れ、唯なんぢらの魂と身とを地獄に滅し得る者を懼れよ、二羽の雀は一錢にて售に非ずや、然るに汝等の父の許なくば、其の一羽も地に隕ること有らじ、汝等の頭の髮また皆かぞへらる、故に懼るゝ勿れ、汝等は多くの雀よりも優れり、然れば凡そ人の前に我を

又を出さん爲に降生せり

奇しき傳道法

識ると言はん者を、我も亦天に在す我父の前に、之を識ると言はん、人の前に我を識らずと言はん者を、我も亦天に在す我父の前に、之を識ずと言ふべし。

地に泰平を出さん爲に、我來れりと意なかれ、泰平を出さんとには非ず、刀を出さん爲に來れり、夫わが來るは、人を其父に背かせ、女を其母に背かせ、嫁を其姑に背かせんが爲なり、人の敵は其家の者なるべし、我よりも父母を愛む者は、我に協ざる者なり、我よりも子女を愛む者は、我に協ざる者なり、その十字架を任て我に從はざる者も、我に協ざる者なり、その生命を得る者は、之を失ひ、我ために生命を失ふ者は、之を得べし、汝等を接る者は我を接るなり、また我を接る者は、我を遣しゝ者を接るなり、預言者なるをもつて、その預言者を接る者は、預言者の報賞をうけ義をもて、その義人を接る者は、義人の報賞を受く、わが弟子なるをもて、小き一人の者に冷なる水一杯にても飲ますする者は、誠に汝等に告ぐ、必ず其報賞を失はじ。

是れ實に基督がその門弟に授けたる傳道の命令なりとす、門弟は十二人ありしが、孰れも貧窮にして且信用もなかりし者のみ、多數は漁夫にして、其中に一人の收稅吏と謀反人なるユダスありぬ、然るに基督は此の如き門弟を全世界に派遣

はして之を敎化せんと欲せり、初は先づユデアに傳道せしめたるが、彼等門弟は眼中一丁字なき無學文盲の徒なれば、如何にして道を說くべきかをも知らざりしに、基督は尙且危急の秋に際して何を言ふべきかをも憂ふるなかれと禁じつつ、プラトーン、シセロの辯を以てすら企つること能はざる事を企てしめんと欲せり、即ち天國の道を全世界に宣傳し、神の御國を萬民の上に格らしめ、眞理を以て異端邪說を破し、道義を以て罪惡を矯正せしめんと欲したるものにして、此等を行ふが爲には、人民にも帝王にも、學者にも無學者にも、十字架に釘られたる自身を宣傳せしめ、其道十字架を檐ふに在りと說かしめぬ、彼等に平安を齎さんことを命じたれども、その所謂平安は眞理と正義なれば、世の異端邪道と衝突して到る處に戰爭を生み、彼等は世に憎まれ、迫害られ、鞭撻れ、死地に陷れられ、啻に王侯より此の如く遇せられたる而已ならず、親戚朋友よりも此の如く取扱はれたり、彼等は實に基督の名の爲に萬民に嫌はれたり、而も之に對して如何に防禦したるかと云ふに、羊の如く溫順に、鳩の如く質朴に、一邑より他邑に逃れ去るを以て之を防げり、此の新將軍の命ずる所も、此の新軍隊の行ふ所も、共に奇にして、信ずべからざる事なれども、而も此の十二人の門弟は此の如き傳道法を以て天下を征服し、宇內を敎化して以て、全世界に十字架を樹立せしむるに、至りたるは、尙更に奇と謂はざるべからず。

税吏の行動

(3)基督罪人に交りて道を說く　基督の時代に於てユデアに税吏と稱する者ありしが、當時ユデア人は大に之をいやしめて人非人の如くに看做したり、其故は税吏は羅馬政府の爲に税金を取立つる所の官吏にして、人民より多くの貢税を强奪したるが爲なり、羅馬政府はユデア人の常に厭惡する所なるに、税吏は同政府に屬する者なれば、ユデアの愛國の志士は大に之を指彈せり、ユデア人中愛國の氣慨なき者、多く此業を執り、中には税吏の職權を濫用して、不正の取立をなし、私腹を肥さんとしたる者もあれば、尙更に嫌はれ、殆ど罪人同樣に思はれたり、然るに基督のみは之と異なりて税吏にも道を說き、之を侮蔑せざるのみかは、却て之を憫み愛しぬ、そはマテウスなるものを招きて、己の門弟となしたるに徵しても知る可し、マテウスは元と税吏にして、衆人の卑賤める職務をなしたるものなりし、偖基督は此等の税吏と交はりて、如何に慈愛心を以て之を敎化したるかを

マテウスを稅關に見る

說かむ。

或日基督カファルナオムの市外、チベリアデスの海邊にて衆人に道を傳へ、夫より進みて羅馬政府の爲に貢稅を收むる官衙即ち稅關に近きしに、マテウスと名く る人其の稅關に坐せるを見て、突然我に從へと曰ひければ、マテウスは豫て基督の敎を聞きて心傾き居たるものと見え、直に其命に從ひ、稅關の事は一切下吏に托し、自らは家產を拋棄し、起て基督に從へり、マテウスは生國ガリレアにして、宗敎はユデア敎を信じたるが、職業が稅吏なりしをもて、人にいやしめられたり、後に基督の門弟となりて、基督の傳記(福音書)を書きたるとき、自己の職業を隱さずして稅吏と書したるは、基督に感化せられて、如何に改まりたるかを知らしめんが爲なり、その住家は常にカファルナオム市に在り、官衙は市外のチベリアデスの海濱に在り、基督が我に從へとて門弟となしたるは即ち此處なりとす。

マテウスの去就に關する議論

ボルヒルルスとユリアヌス皇帝は、マテウスが基督の『我に從へ』の一言の下に直に起て從ひたるを見て、甚だ輕卒なり、況や基督の何人なるかをも知らずして、己の職責家產をも拋擲ちて、進退を決するをやと論じたれど、マテウスの基督に從ひたるは、基督の何人なるかを知らずして從ひたるにあらず、豫て其の道を聽き、又基督の行ひたる奇蹟などをも耳にしたれば、今眼前に基督の風丰に接したるに、その威貌に感じ、神靈の光其心に通じて、直に改心したるものなり。

偖マテウスは斯く改心して其の家產及び其の將來の希望をも打棄てゝ、基督の門弟となるに決してより、己の家に於て盛大なる祝宴を開き、稅吏及び其他社會より罪人として共に齒せられざる知己朋友を多く招待して、大に饗應しけるに、基督は其の門弟を伴ひて此の祝宴に臨み彼等と共に食卓に就き、宛も醫師の病人に接するが如き親切を以て、彼等と交はり、只管之を救靈の道に導かんことを心掛け居たるに、例のファリゼイ人と學者等之を見て異樣の感をなし、基督の弟子に詰問して曰く、『汝等の師は何故稅吏や罪ある人と偕に食するか』と、基督は之を聞きて彼等に曰ひけるは、『康强なる者は醫者の助を需ず、唯病ある者之を需む、われ矜恤を欲て、祭祀を欲まず、此は如何なる意味なるか、往て學ぶべし、夫れわが來るは義人を招くが爲にあらず、罪ある人を招きて悔改させんが爲なり』と。

健强なる者醫師の必要なし唯病める者之が必要あり

基督は心靈の醫者

基督の道を天下に傳ふるや、常に愛憐を以て人と交はり、自らは心靈の醫師を以

て任じ、天下の生民が心靈の病に罹れるを見て、自ら進みて之に近づき、親愛と矜恤とを以て之を癒さんことを務めたり、故に『われ矜恤を欲て、祭祀を欲まず』と云ふ、彼のファリゼイの徒は徒らに虛禮を重んじ、ユデア敎の儀式と祭祀とを嚴守せるを誇りて、人を輕んじ、人を賤むを何とも思はざりしかば、基督は祭祀を重んずるはよろしけれども、矜恤を以て人を救靈の道に導くは、尙神の聖旨に合ふことなるが故に、我は寧ろ此を取らんと曰ひ、彼等は多年舊約聖書を研究して、自ら學識に誇れども、未だその眞意を解せず、徒らに我が行爲をとがめたてするよりは『往て深く研究するがよろしかるべしと宣へり、小氣味よき答なり、特に『我が天の使命を帶びて、此世に降來せるは、正義の士を招くが爲にあらず、罪人を招きて悔悟遷善せしめむが爲なり』と曰ひたるが如き、世の傳導者の萬古味ふべき言ならずや。

今日の宗敎家の傳道法

蠕て之を今日の宗敎家に見るに、基督の傳道法と大に異なる者あり、靈父とか、牧師とか、傳道士とかと稱するものは、己の行爲の正しきに誇りて、人をいやしめ、世をのゝしり、罪ある人を見れば、蛇蝎の如く之を嫌ひ、自ら之に近かざるのみならず、信徒をも之に近づかざらしめんと欲し、口を極めて其人を惡罵す、苟も心靈上の醫師を以て任ずべき靈父、牧師、傳道士なるものは、此の如くして基督の道を宣傳すと言ひ得べきや、此の如きは寧ろファリゼイの徒の自ら高く標置して人を卑しむるに類せずや、宗敎家にして罪ある人を惡まば、何を以てかその任務を盡し得んや、夫れ宗敎家の任務は潔白淸廉の士と交はるにあらず、潔白淸廉の士ならば宗敎家を要せざるなり、宗敎家の働く可き方面は、寧ろ不潔なる方面にあり、罪ある社會にあり、想ふて茲に到れば、今日の宗敎家なる者は、彼の『病人なればこそ醫者を要するなれ』とて、罪人を招きて悔悟遷善せしむるを以て傳道の目的となせる基督の言動と遠く相懸絕するを見るなり。

(4)基督譬喩を設けて道を說く　基督の傳道法は種々あれども、譬喩を設けて道を說きたる事も亦屢々あり、是れユデア人が常に多くの譬喩を用ゐる風ありしが爲なるかは知らざれども、譬喩は何人にも解り易く、且記憶し易き者なれば、基督は此の解り易く、記憶し易き方便を以て道を說きたるものならん、基督は何回此の譬喩的傳道法を取りたるかは知らざれども、兎に角福音書中に記せる譬喩

の數のみにても、三十三個あり、是れ亦一種の傳道法なれば、左にその著しきものを示さんとす。

播種と傳道

或日基督家を出てガリレアの海邊に坐せしに、基督の名聲を傳聞せる者四方より集り來りて忽ち雲霞の如く押寄せたれば、基督は止むを得ず舟に登りて坐せしに、許多の人々は岸に立てり、斯くて基督は譬喩を設けて多端の言を人々に語りぬ、茲に種を蒔く者あり、播種の爲に出でしが、播種の際或種は路傍に遺ちしかば、空の鳥飛來りて啄み盡せり、或種は土うすき磽地に遺ちしに、直に萠生したれども、日の出でしとき灼れしかば、根なきが故に槁たり、また棘の中に遺ちし種ありしが、棘そたちて之を蔽げり、されどまた沃壤に遺ちし種ありしかば、實を結べること或は百倍、或は六十倍、或は又三十倍に及べり、耳ありて聽ゆる者は聽くべし。

基督は今迄屢々道を說きしが、譬喩を設けて道を說きしは、今回を以て初とす、さればこそ門弟等も異樣の感をなし、密に基督の許に來りてその理由を尋ねて曰く、何故に譬喩をもつて彼等に語り給ふやと、基督答て曰ひけるは、爾曹には天國の奧義を知ることを許されたれど、彼等には許されざればなり、それ有る者は予られてなほ餘あり、無有者はその有る物をも奪る、彼等は視れども見えず、聽けども聞えず、悟り得ざるが故に我は譬喩を以て彼等に語るなり、イザヤの預言に爾曹は聽けども悟らず、視れども見えず、蓋この民目にて見耳にて聽き、心にて悟り、改めて我に醫されんことを恐れ、その心を頑し、耳を蔽ひ目を閉ぢたりと云ひしに應へり、然ど爾曹の目は見、爾曹の耳は聞くが故に、福なり、われ誠に爾曹に告ぐ、多の預言者と義人は爾曹が見るところを見んとしたりしが、見ることを得ず、爾曹が聞く所を聞んとしたりしが、聞ことを得ざりき、故に爾曹播種の譬を聽、天國の敎を聞て悟らざれば、惡鬼きたりて、其心に播れたる種を奪ふ、是れ路の旁に播きたる種なり、磽地に播れたる種は、是れ敎を聽て、速に喜び受くれども、已に根なければ、暫時のみ、敎の爲に患難あるひは迫らるゝ事の起る時は、忽ち道に礙ぐ者なり、また棘の中に播れたる種は、是れ敎を聽けども、此世の思慮と貨財の惑に敎を蔽れて、實らざる者なり、沃壤に播れたる種は、是れ敎を聽て悟り、實を結ぶこと、或は百倍、或は六十倍、あるひは三十倍する者なり。

美種と天國

また譬を彼等に示して曰けるは、天國は人、畑に美種を播くに似たり、人々の寢たる間に、其敵きたり、麥の中に稗子を播て、去り、苗は出て、實りたるとき、稗子も現れたり、主人の僕きたりて曰けるは、主よ、畑には美種を播ざりしか、如何にして稗子ある乎、僕に曰けるは、敵人これを行り、主人に曰けるは、然らば我等ゆきて之を拔あつむるは宜か、否、おそらくは爾曹稗子を拔あつめんとて、麥をも共に拔べし、收穫まで二ながら長おけ、我かりいれの時まで稗子を拔集て、焚ん爲に之を束ね、麥をば我が倉に收よと獲者に言はん。

芥種と天國

また譬を彼等に示し曰けるは、天國は芥種の如し、人これを取て畑に播ば、萬の種よりは小けれども、長ては他の草より大にして、天空の鳥きたり、其枝に宿ほどの樹となるなり。

麪酵と天國

また譬を彼等に語けるは、天國は麪酵の如し、婦これをとり三斗の粉の中に藏せば、悉く脹發すなり、基督は譬をもて凡て此等の事を衆人に語りたまへり、譬にあらざれば語り給はず、これ預言者に託て、我譬を設けて口を啓き、世の始より隱れたる事を言出さん、と云れたるに應せん爲なり。

譬喩の解說

基督は遂に衆人を歸して室に入りぬ、其弟子きたりて曰けるは、畑の稗子の譬を我等に解たまへ、之に答て曰けるは、美種を播く者は人の子なり、畑はこの世界なり、美種は是れ天國の諸子なり、稗子は惡魔の子類なり、之をまく敵は惡魔なり、收獲は世の末なり、刈者は天の使等なり、稗子の歛て火に焚る如く、此世の末に於ても、此の如くなるべし、人の子その使者たちを遣して、其國の中より凡て躓礙となる者、また惡をなす人を歛て、之を爐の火に投入べし、其處にて哀哭切齒することあらん、此時義人は、其父の國に於て日の如く輝かん、耳ありて聽ゆる者は聽べし。

藏畑の寶と天國

また天國は畑に藏たる寶の如し、人みいださば、之を秘し、喜び歸り、其所有を盡く賣て、その畑を買なり。

眞珠買人と天國

また天國は好眞珠を求んとする商人の如し、一の値たかき眞珠を見出さば、その所有を盡く賣て、之を買なり。

魚網と天國

また天國は海に投て各樣の魚をとる網の如し、既に盈れば、岸に曳あげ、坐てその嘉ものを器にいれ、惡きものを棄つるなり、世の末に於ても此の如くならん、天の使等いでゝ義者の中より、惡者を取わけ、之を爐の火に投入べし、其處にて哀哭切

齒することあらん。

基督彼等に曰けるは、此事をみな悟しや、彼等曰けるは、主よ、然り、基督彼等に曰けるは、然らば、天國について敎へられたる學者は新しき物と舊き物とを其庫より出す家の主の如し。

故郷に譽者なし

基督この譬を言畢て、此を去ぬ、その故土にいたり、會堂にて敎へしに、人々奇み曰けるは、此人の智慧と異なる能は何處より來るや、これ木匠の子にあらずや、其母はマリア、その兄弟はヤコブス、ヨセフ、シモン、ユダスに非ずや、その妹等はみな我等と偕に在るに非ずや、然るに此人の凡て此等の事は、何處より來しや、遂に厭て之を棄つ、基督彼等に曰けるは、預言者は其の故土、その家の外に於て、尊まれざるなり、彼等が信ずることなきに由て、多くの異なる能を此に行給ざりき。

基督の道天下に傳播す

此等の譬喩は後年何れも皆成就せられたり、基督の道は果して其の當初芥種の如く微少なりしが、漸次進歩發展して、鬱然たる大樹の如くなり、五大洲に傳播し、世界の王民をして諸鳥の如く棲しむるに至れり、基督の敎は果して麪酵の如く、人心に侵入して異なる感化を及ぼし、漸々脹發して、歐洲全土に彌漫するに至れり果して世界萬國の人々、老幼男女、貴賤尊卑の別なく、此の貴重なる眞珠を認むるや、萬事を賣り、萬事を擲ち、萬事を賭して、之を所有せんと欲せり、願くは吾等も歳月の大網に引かれて、永遠の彼岸に到達すべき時、天の使者等に天國の選民として認められんことを。

基督義憤を發して聖殿の神聖を示す

(5)基督義憤を發して聖殿の神聖を示す　逾越節ちかづきければ、基督はイエルサレムに上り、預言者の語れる所に應ぜんとす、『視よ、我將に我が使者を遣はさんとす、彼將に途を我前に備へんとす』、此預言は基督の先驅ヨアンネス洗者により明に實現せられたる事は、ユデア人の皆實地目擊したる所なるが、此預言の後半に『爾の求むる所の嚴主、爾の翹望する所の約束の天使、將に忽ち其殿に至らんとす』とあり、此の言は基督によりて實現せられたり、何となれば基督は宛ら嚴主の如く權柄を以てイエルサレムの聖殿に入りしに、殿には牛、羊、鴿などを賣る商人と兩替をなす人々の坐せるを見て、殿の神聖を汚すと思召し、繩をもて鞭をつくり、彼等を牛羊諸共殿より逐出し、兌銀者の金を散らし、其案を倒し、鴿を賣者に曰けるは、『此物を取て往け、我父の室を貿易の家とする勿れ』と。

商人を逐て聖殿より出す

其父の室とは聖殿を指すなり、聖殿は實に神の室なれば、基督は之を天父の室と稱したり、而して自身は神の子の如く權能を發揮せり、商人等は無論司祭等の許可若くは默許を得て商賣し居たるならんに、敢て一人も基督に抵抗する者なく、又一言も反對の語を發するものなきは、不思議なり、恐くは末日の審判に罪人を震慴せしむべしと云ふ至上主の嚴怒其の顏色に顯はれたるにあらずやとは、解者の推想する所なり、兎に角此の如き嚴怒の事象によりて、古來より翹望せられたる嚴主なることを知られたり、基督が聖殿の神聖なるを保たんとせる熱誠を見て、門徒はダウィドの詩篇『なんぢの室の爲に熱心われを蝕ん』と錄されたる言を憶起せりと云ふ。

實は聖殿の神聖を保たんとするは、ユデアの司祭の爲すべき所なるに、彼等は之を爲さゞるのみかは、寧ろ却て此の如き、いやしき商賣を殿内に行はしめたり、當初は犧牲に必要となる牛羊などは市中に賣りたるに、司祭の默許につけこみて、殿に入り來りて之を賣るに至りたるものならん、恐くは司祭は幾分かの微行を取りたるべし、何れにしても聖殿内には商賣呼りは甚だ騷々敷きことにて、神聖なる所に適はぬ話なり、異邦人の參詣に來りたるときは、之を見て訝しとしたるに相違なし、基督の此の叱責はユデア人に對する面當となりたれば、聊か腹立たしく思ひ、『爾は何の休徵によりてこれらの事を爲すや』と一本突込みたれば、基督は之に答ふるやう、『汝等此殿を毀て、我三日目に之を建て直さん』とて、暗に自身の

基督の預言

體を亡ぼすも、三日目に復活することを寓したれども、彼等の愚なる、之をさとらず、矢張り聖殿のことならんと思ひ、『此殿を建つるには四十六年を經しに、爾は三日にて之を建て得るか』と曰へり、是れ其身の殿を指せるをさとらざりしを證明して餘りあり、彼等のさとらざりしも無理もなし、門徒すらも基督が死より甦りて後、初めて此語を想起して其の意味を解せりと云へばなり。

ユデア人は基督が如何なる權利によりて聖殿に於ける商賣を禁ずるかを問はんが爲に、その權利のある兆朕として奇蹟を示さんことを要求したるものにて、その意地惡き心、憎みても餘りあり、故に基督は之に答ふるに、聖殿より意を假りて、身の聖殿に想到せしめ、後者の聖殿に關する大奇蹟を示さんと欲したるが故に、『この殿即ち汝等の汚さしめつゝあるこの殿を毀て、我は三日目に之を建て直

さん』と曰へるなり、蓋し木石の殿は神の宿れる基督の聖心の殿、即ちその身體の表徴にして、實際神性と人性の合體せる最も聖き殿堂なりき、故に基督の意は此の聖き殿堂を指して、『この殿を毀て』即ち『この體を殺せ』『我は三日目に之を建て直さん』即ち『三日目に復活して見すべし』とて、基督の奇蹟中最も大なる奇蹟を示したるものなることは、基督が他の場合に於て尚一層明に此の奇蹟に就て預言したるに徴して知る可し、即ち基督は好奇心に驅られたるユデア人に向ひ、『此の姦惡なる人民は休徴をのみ示せと云ふ、此の如き人民にはヨナス預言者の休徴より他のものは示されざるべし、ヨナスは三日三夜鯨の腹の中に在りたりと云ふが如く、人の子も三日三夜地の中に葬らるべし』と曰へり、然れどもユデア人は到頭基督の復活の奇蹟をさとらずして立ち去れり、今日の自稱學者輩すら之を信せざれば、ユデア人の之を信せざりしは、無理もなし、世には先入の爲にくらまされ、傲慢の爲にくらまさるゝ人々、古より斗量掃箒あり。

基督ニコデムスに道を説く

(6)基督ニコデムスに道を授く　爰にユデア人の宰にて、ニコデムスと名くる學者あり、基督の奇蹟を見て、心に其の常人ならざることを信じ、之に師事せんことを望みたれども、籍をファリゼイ人の中に置きたるところより、白晝基督に就て道を聽くことを憚りて、夜竊に基督の下に來りて曰く、『先生、吾等は先生の天より來りし師なるを知る、神若し偕ならずば、誰か先生の行ふが如きの奇蹟を行ふことを得んや』と。

天來の師

ニコデムスは基督を天來の良師なりと看做せり、然れども吾は知ると云はずして、吾等は知ると云ひたるを見れば、基督を天來の學者の如く思ひたる者は、獨りニコデムスのみならず、他にも之と意見を同うせるものありしを知る可し、但だ此等の學者もニコデムスの如く人前を憚りて、自己の信仰を公言することを遠慮したるものらし、義を見て之を公言すること能はざるは、勇なき學者の譏を免れざれども、兎に角その義を認めたる點に於て、一段の進境ありたるを示したるが故に、基督はその薄弱なる信仰を咎めずして、諄々として之を敎へんと欲せり、斯くてニコデムスは基督を師と仰ぎて其の道を聽けり、基督之に語て曰ひけるは、誠に實に爾に告ぐ、『人もし新に生れずんば、神の國を見る能はず』と、ニコデムスはユデアの知名の學者なりしにも拘らず、此の言葉を精神的意味に解すること

洗禮と再生

を知らずして、尚に子供らしき言を吐きて曰く、『人老ひたるに、如何にして復生(またうま)ることを得んや、再び母の腹に入りて生るべきか』と、基督之に答ふるやう、『誠に實に爾に告ぐ、人は水と靈とに由て生れざれば、神の國に入ること能はざるなり、肉に由りて生るゝ者は肉なり、靈に由りて生るゝ者は靈なり、我なんぢに新に生るべき事を言ひしを奇(あやし)と爲(する)なかれ、風は己が任に吹く、なんぢ其聲を聞けども何處より來り、何處へ往くを知らず、凡て靈に由て生るゝ者も此の如し。』

水と靈との洗禮

基督は洗禮によりて精神的に再生することを語りしに、イスラエルの學者と云はるゝニコデムス之を解せずして肉身の再生なりと思へり、今日基督の言を聞て、その眞意を解せざる學者のある、豈怪むを須ゐんや、人類の始祖は、土と水とを以て造られたれども、新しき人は水と聖靈とに由りて造らる、二者孰れも奇蹟と稱して可なり、神の手の下に、水にひたされたる土、所謂泥土が、骨となり、肉となり、血となり、皮となり、頭となり、手となり、足となりたりと聞かば、此の如きは創世記の神話にして固より信を置くに足らずと云ふべけれども、今日同じ土が水分をふくみて、葡萄樹に在りては酒となり、甘蔗にありては砂糖となり、花に於ては蜜となり、麥に於ては粉となる等を見て、之を怪まざるこそ奇怪なれ、考ふれば何事か奇怪ならざるはなけん、元始の時神は天地を創造し、地は乃ち虛曠にして、淵面は晦冥なりき、神の靈水面に覆育して、其の當時より地水に有生の諸物を產して、各々其類に從はしむる珍らしき力を與へたるものにて、その同じ神の靈が洗禮の水に感應して、人を再生せしむるとて、何の信じ難きことならんや、肉が肉を生むならば、靈が靈を生むは、自然(あたりまへ)の事ならずや、之を預言者に徵するに、『靈はその好む所に吹き、その好む所の者を啓示して之に語らしめ、人その聲を聞き、その効果を見れども、靈其物は之を見る能はず、何處より來りて、何處に往くかを知る能はず』と云ふ、空氣界に於て風の現象は略ぼ之に類す、風の音は之を聽くことを得べく、風の有無は之を感知するを得れども、風其物は肉眼を以て之を見る能はず、此等の現象より推測して、精神的再生の幾分を知ることを得べきか。

ニコデムスは依然已の想像せる所のみを考へて、『如何(いかで)此事あらんや』と曰ふ、基督答て曰けるは、『爾はイスラエルの師なるに、獨この事を知らざるか』とは、ニコデムスがイスラエルの學者にして、モイゼスの律法によりて穢れたりとするもの

未だ地の事を信ぜず事を信ずるは天の事を信ぜん

は、水を以て之を洗ひ清むることをなしつゝ、而も精神的に再生して清まることを解せずやとの意味なり、ナアマンが癩病をやみて、ヨルダン川に入りたるとき、不思議にも新生の子供の如く清くなりて出でたりと云ふことを知りつゝ、尙此事を解すること能はずとせば、請ふ我が言を聽けよとて、語を繼げて曰ひけるやう、『誠に實に爾に告ぐ、我儕知りし事をいひ、見し事を證するに、爾等は我儕の證を受けず、若われ地の事を言ふに、爾等信ぜずば、況して天の事を言はんには、何ぞ信ずることを爲んや、天より降り、天にをる人の子の外に、天に昇し者なし、モイゼス野に蛇を擧し如く、人の子も擧らるべし、凡て之を信ずる者は、亡ぶることなくして、永生を受しめんが爲なり、それ神はその生みたまへる獨子を賜ふほどに世の人を愛し給へり、此は凡て彼を信ずる者は、亡ぶる事なくして、永生を受けしめんが爲なり、神其子を世に遣し給へるは、世の罪を定めんとにはあらず、彼に由りて世を救はんが爲なり、彼を信ずる者は定められず、信ぜざる者は、既に其罪さだまれり、そは神の生みたまへる獨子の名を信ぜざるに因る、罪の定まる所以は、光世に臨りしに、人その行の惡しきに因りて光を愛せず、反て暗きを愛すればなり、凡て惡をなす者は光を惡み、其行を責られざらんが爲に光に就らず、眞理を行ふ者は其行の顯れんが爲に光に就るそは神に遵て行へばなり。』

基督は天地神人の奥義を敎ふる師

ニコデムスは基督を師と仰ぎて其の門を叩けり、基督も實際師となりて之に敎へたり、神の子及び人の子として、天地神人の奥義を敎ふるに當り、基督の如き良師はなかりき、モイゼスの時代に銅の蛇を野に樹立し、毒蛇にかまれたる者を癒さんが爲に之を見せしめたりと云ふ如く、基督も十字架の上にあがりて、凡て之を信ずる者を永久の亡びより救ふて、永生に到らしめんとすと云ふ事を說き、『今や我が世に降來したるは、世を審かん爲にあらずして、世を救はん爲なり、我を遣したる天父の慈愛の大なる、亦以て見る可し、然れども最も信を置くべき我を信せずして、左程信ずるに足らざる世の人々又は己のみを信ず、最早其の審判行はれて其罰定まれり、此の如き不信の原因は心術の頽敗に在りて、心術の頽敗は眞理の敵なり』と云ふ意義を闡明したり、ニコデムスは此の高尙なる敎訓を等閑に附せざれども、公然基督の弟子なりと言明せず、心竊にその弟子を以て任じ、ユデア人の會議に臨みては、間接に基督を辯護したり、基督が愈よ十字架の上に絕息

基督サマリア婦人に道を説く

するに至り、初めて之を葬むるが爲に勇ましく世に顯はれ出でたり。

(7)基督サマリア婦人に道を説く　基督ユデアを歴遊して道を説き、それよりガレリアに歸らんとし、途中サマリアを通りたることあり、抑も此のサマリアと云ふ國はサルマナザール王の御宇に十族のバビロニアに徙されてより、バビロニアの移民來りて住めり、その住民の多くはクテエン人と稱せらる、彼等は眞神を崇拜して、モイゼスの五經を尊重したるものなれども、異邦人の迷信をも多く存したり、ユデアの民のバビロニアに徙されしとき、或る一部の民此國に居遺り、其後バビロニアより歸り來る者もありて、漸次に異種の民混同するに至り、サマリア人と稱せられたり、此民都合好きときは自らユデア人と稱し、都合惡しきときは、ユデア人にあらずと稱したるが故に、ユデア人は太く之を嫌惡して、吳越の感をなせり。

偖基督の此國を通過せんとせしとき、シャールと云ふ一邑に至れり、此地は昔はシケンと名け、イスラエルの祖先ヤコブスが其子ヨセフに與へたる地の近くに在りて、ヤコブの井と稱せらるもの其處にありたり、基督の此處に來れる時は、正に晝の十二時頃にして、その門徒等は、食物を買求めんとて村に行き、基督は行旅の疲勞を醫せんとて、獨り此の井の邊に憩へり。

水の話を以て教化の端緒を啓く

偶々一人のサマリア婦人水を汲まんとて其處に來りければ、基督はその婦人に向ひ、我に水を飲ましめよと曰ふ、婦人訝りて曰ひけるは、『御身はユデア人なるに、何故サマリアの婦人たる我に水を乞ひ給ふか』と、これはユデア人とサマリア人とは交際せざりしが故なり。

基督『爾若し神の賜と爾に水を乞ふ者の如何なる人なるかを知らば、爾却て我に水を求むるに至らん、さらば我は汝に活ける水を與ふべし。』

婦人『汲器もなく、井も亦深し、御身は何處より活ける水を持ち來り給ふか、抑も此の井は吾等の先祖ヤコブスの與へし所にして、此水はヤコブスを始め其の子及び其の畜まで飲みたるものなり、然るに御身は活ける水を與ふと云ふ、御身はヤコブスよりも優れる人なるか。』

基督『凡て此の水を飲む者は渴くことあるべしと雖、我が與ふる所の水を飲む者は永久渴くことなし、且わが與ふる水は、泉となりて、永久湧き出て、人をして永生

不死に至らしむべし。』

基督の活ける水といへるは、聖靈を指すものにして、之を心に受くるときは、恩寵の泉滾々として盡きず、人の心をして充分滿足せしむる至善の鄕に至らしむるまで、坐然湧き出でゝ止むことなきを言ひたるなり。

基督の烱眼婦人の行跡を看破す

然るに此の奥義を解せざる婦人は、愈よ基督の言を奇なりとして曰く、御身果して此の如き水を有し給はゞ、わが復び渴くことなく、又われに水を汲みに來る必要なからしむる爲に、その水を我に予へよ。』

基督は諾ひて曰ひけるやう、『往きて爾の夫を呼び來れ。』

婦人『われに夫なし。』

基督『夫なしと云へるも當然なり、爾前に五人の夫ありしが、今ある者は爾の夫にあらず、爾の言へる所實に然り。』

婦人『今われ御身の預言者なるを知る、(又シカルの邊に在るガリジン山を指して曰く)吾等の先祖彼山に於て神を拜せしに、御身等ユデア人は神を拜すべき所はイエルサレムなりと云ふは何故ぞや。』

婦人の精神一變す

基督『婦人よ、我を信ずれば、神を拜するは、啻に此山のみに限らず、又イエルサレムのみにも限らず、いづこにても之を拜し得る時來らん、汝等は神の何たるを知らずして拜すれども、我等は之を知りて拜するものなり、そは救拯はユデア人より出るものぞかし、眞正の禮拜者は靈と眞を以て拜するものなり、而して今やその時となれり、神は此の如く拜する者を要む、神は靈なれば、拜する者もまた靈と眞とをもつて之を拜せざるべからず。』

婦人『吾等は基督と稱する救世主の來らんことを聞き知れるが、若し來らば凡てのの事を吾等に敎ふるならん。』

基督『今爾と語る所の我は即ち基督なり。』

折しも門徒等歸り來り、基督の婦人と語れるを見て、之を怪みたれども、その如何なる事を語りたるかを、又何故語りたるかを問ふ者なかりき。

一方婦人は基督なることを聞きて、その水瓶を遺して、直に邑に往き、衆人に告げて曰く、『われ今不思議なる人に遇へり、その人はわが行跡を悉く語れり、往きて觀たまへ、彼は基督にはあらざるか。』

人々之を聞きて、邑を出でゝ基督の許に集り來れり、その間に門徒食物を基督にすゝめ、『師、食し給へ』と云ふ、基督宣はく、『我に爾等の知らざる食物あり』門徒等互に曰ひけるは、『誰か食物を饋りし者あるならん』と、然るに基督は彼等をさとして曰く、『我を遣はしゝ者の旨に隨ひて、其の業を成し遂ぐることは、是れ我が糧なり云々』と。

斯くて此の婦人の言を聞きて、其邑サマリアの人多く基督を信じ、尙留まりて敎を說かんことを請ひたれば、基督は此に二日留まりて道を傳へしに、其の言に因りて信ぜし者多々益々多くなり、いづれも婦人に向つて、吾等は今汝の言ひし事によりて信ずるにあらず、吾等みづから聞きて、此の人は誠に世の救主なりと知りたるによるなりと言へり。

學、位、富、門閥等に誇る者

(8)基督嬰兒によりて敎を垂る　世には學に誇り、富に誇り、門閥に誇る者甚だ多し、傲然高く自ら標置して以て我は天下の大學者なりと云はんばかりの顏をなし、爾餘の人を目するに、愚俗となし、共に與に談ずるに足らずと公言して憚らざる者あり、これ學に誇る徒なり、臣民を視ること奴隷の如く、敢て頭を擡ぐること

すら得させず、部下を使役すること牛馬の如く、人の名前は呼棄にし、己が話振は横柄極まりて、何事も命令的に行ふ者あり、これ位に誇るの徒なり、出るに車馬自働車あり、入るに大廈高樓あり、食飲方丈侍妾數百人、豪奢を一世に極むる者あり、これ富に誇るの徒なり、我は權門名族の出なり、我が祖先は天下に大功勞ありたる者なり、一國の大勢力家として仰がれたる者なりなどゝ、先祖の功勞勢力を鼻に懸けて、天下の人々を卑下する愚なる子孫あり、これ門閥に誇るの徒なり、世には古より此の如き傲慢の徒甚だ多し、基督の時代には彼のユデアの法學士、ファリセイの徒、祭司の長等は皆學に誇り、位に誇りたるの徒なりき、故に基督は屢々之を攻擊せり、當時富に誇れるの徒に對しては、『富者の天國に入るは、駱駝の針孔を穿つより難し』とて、太く之を咀呪せり、蓋し基督は謙遜を以て天下の人心を矯正し、風敎を改良せんと志したる者なれば、自らは厩の中に生れ、三十年間大工の職を執りて、故さら隱晦の生を送りたるものにして、其の初めて世に出でゝ傳道するに當りても、先づ第一に謙遜の敎を布き、『我に就て謙遜の心を學べ』と云ひ、山上の垂訓に眞福八端を掲ぐるとき、第一に『心貧しき者は福なり、天國は彼等の所有

なればなり』と言へり、蓋し神は虐傲者を斥けて、謙遜なる者を眷顧み給ふものなり、基督は此の如く謙遜の至德を說きたるに、門弟等始め未だ之を解せずして、相變らず世の風潮に從ひ、動もすれば權勢を夢み、高位を空想して爭論を起したることあり、或日基督門弟を携へてカファルナオムに歸る途中、又々一場の爭論を起せり、これは彼等再三基督よりその死の預言を聞きながら、尙未だ其の意を解せず、吾主は早晩イスラエルを回復して王國を興し、王位に登るべし、されば其時誰が高位に坐し、天下の政權を握るべきやなどゝ語り合ひて爭へり、その結果基督に決裁を仰ぐことゝなり、基督の許に來り問ふて曰く、天國に於て大なる者は誰ぞやと、是れ基督の新王國に於て各自大臣宰相たらんことを期して、斯くは問ひたるものなり、此時基督は嬰兒を召び、彼等の中に立たしめて曰ひけるは、『我まことに汝等に告げん、もし改まりて嬰兒の如くならずば、天國に入ることを得ず、されば凡そこの嬰兒の如く自ら謙る者は、これ天國に於て大なる者なり、わが名の爲に此の如き一人の嬰兒を接る者は、我を接るなり、されど我を信ずる此の小子の一人を躓かす者は磨石をその頸に懸られて、海の深に沈められん方なほ益なるべし。』

門弟等の爭

基督は門弟を携へて天下に傳道しつゝ、尙その門弟に對しても傳道の必要ありたること此の如し、此時アルフェーの子ヤコブスと其弟ユダは基督の近親なるの故を以て、當然高位を占めらるべしと夢想せしが、ヨアンネスは基督より最も鐘愛せられたるを以て、ペートルスは他の門弟に先だち第一着に選ばれて弟子となりたるを以て、アンドレアスは己れ特に基督より約束せられたる所ありしを以て、各自中原の鹿必ず我が手中に落つるならんと言ひつゝ爭へるも可笑し、然るに基督は彼等が名譽驕慢の心を改めて謙遜溫和の者となられざれば、迚も天國に入ると能はざるを適切に敎へんが爲に、故さら無我無心一點誇る所もなき天眞爛漫の嬰兒を召し、彼等に實物敎育を垂れ、汝等その心を改めて、此の嬰兒の如くならざれば、天國に入ることを得じ、此の嬰兒の如く自ら謙遜なる者は、これ即ち天國に於て大なる者なりとて、人の首たらん者は、人の後に立ち、人に使役せらるゝ覺悟あらんことを要すと云ふ敎訓をも授くると同時に、弱者を助くる者を惑はす者の禍福を說き、弱者を惑はす者に對しては、往時罪人の首に磨石を懸

實物敎育

けて海中に投ずることありし古事を引きて太く之を咀呪せり。

嬰兒と天國

基督は嬰兒を指して門弟等に謙遜を敎へたること他にも例あり、他日人々嬰兒を携へ來りて、基督にその祝福を祈らんことを請ひたることありしに、門弟等は無情にも之を遮りたるを見て、基督は彼等に告げて曰く、『嬰兒の我に來るを禁する勿れ、天國に在るものは斯の如きものなり、我誠に汝等に告げん、凡そ嬰兒の如き心を以て我が敎を受けざる者は、天國に入ることを得じ』とて、乃ち嬰兒を抱き上げ、手を按じて、その幸福を祈れり。

謙遜の實物敎育を垂るゝには、嬰兒に及ぶものなし、心中一點の誇る所なく、父母の敎ふるが儘に行ひ、長者の命ずるが儘に從ひ、毫も私心を狹まず、我意を通さず、清淨無垢、天眞爛熳の心、眞に愛すべし、宣なる哉基督の嬰兒を以て謙遜の模範となしたるや。

吾人は之を見るにつけても、今日の基督敎牧師又は傳道者中に學に誇り、位に誇り、又は門閥などにまで誇りて、天下の貧民をいやしめ、婦女子を見ては取るに足らざるが如き言動を示す者あるを見る毎に、此徒人に敎を授くる前に、己れ先づ人より敎を受くべき者なりと思はざるなし、此の如きの徒こそ眞に唾棄すべき者なれ、基督の道を傳へながら、己れ先づ第一に其道に戻れる者なり。

基督傳道の反對者を論駁す

(9)基督傳道の反對者を論駁す　基督は傳道の爲に東奔西走し、到る處に福音を宣べ、敎訓を垂れ、奇蹟を行ひ只管仁惠を蒔きにければ、基督に隨從して、其道に歸依する者日に月に多きを加へしが、月に村雲、花に嵐の諺に洩れず、基督の說ける眞理の光輝きて、傳道の花正に開かんとするに當りて、黑雲漠々として、嫉風妒雨、意外の方面より起れり、即ち本書に屢々記するファリゼイ人、サドセイ人、及び法學者と稱するもの即ち是なり、今此等反對者につき少しく詳記せむ。

ファリゼイ人

抑々ファリゼイ人とはユデアの三大宗の一派に屬する人々なり、而も三大宗中最も古く又最も有力なるものなり、ファリゼイ人の始源は詳かならざれども、ヒエロニムスの說に據れば、彼の有名なるヒルレル及びサムマイの門弟なりと云ふ、サムマイは大ヘロデス王の時代の人なりと云へば、基督の降生を去ること程遠からずと云ふべし、ユデアの學者の說く所によれば、ヒルレルの道を以て大に其の宗旨を修飾せりと云ふ、一說にファリゼイ人の始源は紀元前百八十年ヒルカン大

司祭の時代に遡るが如く云ふ者ありと雖、信を措き難し、ファリゼイ人の名はヘブレア語の『分離』と云ふ意味より出づるものにて、自らかゝる名字をつけて、他の人と異を立て、傲然高く自ら標置して、他の人よりも嚴正なり、他の人よりも道德者なりといへり、其の宗義は宿命說を多く含み、ストイシエン派の哲學說に頗る類する所あり、同宗は其隨信者の學問と嚴正なる道德とによりて大に名をなし、ユデアの政權にまでたづさはるに至れり、基督の世に出るに當りファリゼイは大に民の信用を博し、學殖深く、品行方正の君子と思はれたるも宣なり、彼等は務めて精進潔齋をなし、長き祈禱を讀誦し、盛んに施を行へばなり、然れども其實は傲慢に囚はれ、僞善を裝ひ、裏面の醜行見るに堪へざりしかば、宛然白骨擾亂せる白壁の墳墓に似たり、基督の烱眼能くその醜行を看破したるが故に、痛く基督を惡み、常にその傳道を妨げんとせり。

サドセイ人

サドセイ人は先師サドクと云ふ人より出でたるものにして、是れもユデアの三大宗の一に屬するものなり、その唱道する所は來世の賞罰を否定し、天使の存在、未來の復活の如きは、空想に過ぎずと云ふに在り、運命の如きも無意味の語なりといへり、舊約聖書の如きもモイゼスの五書を採用するに過ぎざりき、一時は彼の高等法院の職權をも帶ぶるに至り、現に基督を死刑に宣告したるカイファスの如きも、サドセイ旨の一人なりき。

法學者

法學者とは原語『スクリバ』と稱し、ヘブレア語にては『ソフェール』と云ひ、記者、筆者等の意味なりしも、茲にいふ『スクリバ』は單に學士の稱にして、特に法學者即ちモイゼスの法に精通せる者を指すものなり、常に立法書及び聖書を讀みて、之を解說せるを職掌とせり、法學者の始源も詳かならず、一說にダヴィト王が司祭族を制定したるとき、之を定めたりと云ふと雖、エピファネスの說に據れば、サドセイ人と同時に出でたりと云ふ、別に一宗を立てたるにはあらずして、唯だその法律に精通せるの故を以て特に稱せられたるものなるが、多くはファリゼイ宗に屬せり、是を以てファリゼイ人と法學者とは常に並稱せらる、聖書に『民の法學者』と云ふ稱あるは、其の勤務とする所人民に法律、世理、聖書とを解釋して敎ふるに在りたればなり。

蝮蛇の子孫

偖是等の人々は基督の先驅ヨアンネス洗者より蝮蛇（まむし）の子孫とまで呼ばれたる

如く、實際惡魔の餘孽にて、表面嚴正の容を裝ひども、實際は不道德極まる僞善者にして、基督より嚴しく譴責せられたるを含みて、何かにつけ基督を陷ゐれんと欲し、基督の傳道に出づるを附覘ふて、僅少にても瑕瑾あれば、之を摘發せんと、鷂の目鷹の目して待ち居たれども、基督には何等の乘すべき所なかりしかば、安息日について攻擊の機會を作らんとせること、一再にして止まざりき。

安息日

そも此の安息日と云ふは創世に於て神が之を守るべきことを定め、降りて十誡中第三の誡を以て更に是日の守るべきを定め、モイゼスの律法によりて是日には一切職業を休み、行爲を謹み、神聖にせんことを命じたれば、彼等は形式にのみ拘泥して、色々の細則を設け、此日には火を燃すも不可なり、蚤蚊を殺すも許されずなどゝ、馬鹿らしき說をなすに至れり、斯れば基督及びその門弟の爲す所を咎立せるも、更に怪むに足らざるなり。

門弟麥の穗を摘む

或日基督は傳道の歸途、麥の畑を過ぎしに、その門弟等飢餓に堪へずして、麥の穗を摘み、之を食ひ始めぬ、是れ基督と共に傳道の爲に東西に奔走して食する暇なかりしに因るなり、然るに此日は正しく安息日なりしかば、例のファリゼイの徒之を見て基督に向ひ、汝の弟子は安息日に爲すまじきことを行ひたりと詰りけり、ユデアの風俗習慣に通ぜぬ人は之を讀みて、基督の門弟とも云はるべき人が、他人の田にある麥の穗を恣に摘みて、之を食したるを、野荒しの所行のやうに思ふならんが、此は何にも仔細なき事にして、ユデア人の法に、その田園に於て穀を苅收むるに際し、故さらその幾分を殘して、恣に旅人の取るに任せたり、是故に今基督の許す所にして、勝手なりき、ファリゼイの徒の咎めて惡事となしたるは、只安息日に穗を摘みたる行動に在りて、彼等は門弟が麥の穗を摘むを見て、之を苅取ると同じ業のやうに思ひたるなり、基督は斯る取るに足らぬことを意にも介せざれども、彼等が聖書を楯に詰じたる惑を解かんが爲に、ダヴィド王の古事及び聖書を引て曰く、『汝等は昔ダヴィド及びその從者の飢たる時行ひたる事を未だ讀まざるか、即ち當時戰爭中にて彼等は飢たるが爲に、神殿に入りて司祭の外食ふべからざる供物のパンを食せしにあらずや、又安息日に司祭は神殿內に於て安息日を犯すと雖、罪なきことあるを律法に記せるにあらずや、汝等未だ之を讀まざるか』

安息日に人を癒すの可否

と、尙彼等を反駁する爲に神の言を引證して『神は矜恤を欲みて、祭祀を欲まず』とは、汝等之を如何に解するか、若し此意を解し得ば、安息日に飢ゑて麥の穗を摘めばとて、何の罪することやあるべき、安息日は人の爲に設けられたるものにして人は安息日の爲に設けられたるものにあらず』と曰へり。

基督は虛禮に囚はれたるファリゼイの徒を此の如く喝破せり、固より彼等は基督の門弟等が飢て麥の穗を摘みたるを咎めたるにあらずして、唯だ之を安息日に行ひたるが爲に咎めたれば、その主とする所、徒らに虛禮を重んずるに過ぎざりき、然るに基督は聖經を引き、ダヴィド王の古事を引き、徒らに虛禮に流れて人を罪するの決して神意にあらざるを證したれば、彼等は一言の答もなし得ざりき。

或日基督は又彼等の會堂に入りて敎を說きしに、是も亦安息日の事なりしが、彼のファリゼイの徒及び法學者等は之を罪に陷れんとて附覘ひたるに、あだかも其中に右手の枯たる人のありければ、基督は必ず此者を癒すならんと思ひ、之に問ふて曰く、『安息日にても癒すにや』と、基督はその害心あるを覺りたれば、之に答て曰く、『汝等の中に一疋の羊を有たる人のあらんに、若し安息日に其羊の坑に陷らば、之を挈上ざるか』と、彼等は之を聞きて如何の感をかなせる、基督は尙その語を繼て曰く、『人は羊より優ること幾許ぞや、されば安息日とても患者を癒すに於て何の不可なることかあらん』とて、一手なへたる人に向ひ、『汝の手を伸べよ』といひければ、彼れ伸たるに即ち他の手の如く癒たり、ファリゼイ人及び法學者等は之を見て茫然たり。

ファリゼイ人、サドセイ人及び法學者等は此の如く到る處に基督の傳道を妨げんとて、種々の難題を持ちかけたれども、基督はその都度之を闢て廓如たりしかば、彼等は議論にては迚もかなわずとや思ひけん、是より基督を殺さんとて密謀をぞこらしける。

基督淫婦の改行を敎す

(10)基督淫婦の改行を敎す　或日ファリゼイ人にして、シモンと名くるものあり、基督の道に心少しく傾きたるより、基督を我家に招き共に食せんことを請へり、此人中心より基督の道を聽かむと欲したるか、又は基督の言を試みんとの底意なりしかは、定かに知るを得ざれども、基督は請はるゝ儘其人の家に往きて食卓に就けり、偶々其邑に淫行を以て世間に知られたる一人の婦人ありけるが、基督の

講演を聽くに伴れて深く感悟し、心の裡にて痛く前非を後悔したるものと見え、基督がファリゼイ人の家に在るを聞き、蠟石の盆に高價なる香膏を携へ來り、基督の背後に平伏して哭きつゝ、涙をもて其の足を濡し、首の髮もて之を拭ひ、其足に接吻し、携へ來れる香膏を基督の足にぞ抹にける、香膏を以て人の足に抹るは、當時の風俗にして、其人に最頂の敬愛を表する禮式なり、此體を見て取る此家の主人、は心の中にて以爲らく、此人若し預言者ならば、其足に捫りしものは誰なるか、又如何なる婦人なるかを知らむ、此の婦人は醜行をもて世間に知られ、皆の人々に爪彈きさるゝものなるにと思へり、基督は早くも主人の意中をも見て取り、主人のシモンに向ひ、

『シモン、我汝に語りたき事あり。』

シモシ答て曰く、『師よ、語り給へ。』

基督『或債主に二人の負債者ありて、一人は五百金、一人は五十金を負しに、二人ともに辨償するに道なかりければ、債主は之を憫み、二人の負債を免除したりとせば、二人のうち其の債主を愛することゝ孰れが多き、我に聞かせよ。』

シモン『我おもふに免さるゝ事の多き者ならん。』

基督『然り、汝の意ふところ違はず。』

斯くて婦人を顧みつ、シモンに語て曰く、

『此の婦人を見給へ、我なんぢの家に入りしに、汝は我足に水を給はざるに、此の婦人は涙にて我足を濡し、首の髮をもて拭へり、なんぢは我に接吻せざるに、此の婦人は、我の此に入りし時より、我足に接吻して已まず、なんぢは我首に膏を抹らざるに、此の婦人は我足に香膏を抹れり、是故に我なんぢに言はん、此の婦人の多くの罪は赦されたり、蓋し愛したること多ければなり、赦さるゝこと少き者は其愛も亦少し。』

是に於て其の婦人に曰ひけるは、

『汝の罪赦さる。』

席に列れる人々心の中に以爲らく、此人はそも誰なるぞ、人の罪をも赦すかと、然るに基督は婦人に向ひ、

『汝の信汝を救へり、安心して往け。』

基督と今日の傳道者

基督の罪人に對する溫情眞に掬す可し、之を今日の傳道に從事する者に見るに、天地の相違あり、今日の所謂宣敎師若くは傳道士なる者は、少しく罪狀の世間に知らるゝ人を見れば、之を近けざるのみかは、其家に足を入るゝすらけがらはしとなし、甚しきは信徒にも此の如き人とは交際する勿れと禁ずる者すらあり、此の如くんば如何にして基督の道を布くことを得んや、罪人なればこそ、之を敎誨するの心要もあるなれ、善人ならば、何ぞ敎誨を要せんや、借問す、今日の所謂宣敎師若くは傳道士なるものは、誰の爲に基督の道を宣傳しつゝありや。

此の婦人は後に有名なる高德の聖女となりたりと云へば、人の一生はわからぬものなり、設令今日大惡人なりと雖、曷ぞ知らん、異日悔悟遷善して如何なる高德の人となるかを、又設令今日善人と稱せらるゝも、異日思も寄らぬ罪惡を企て、如何なる惡人となるやも知れず、之を考へなば、今日の所謂宣敎師又は傳道士なるものゝ態度愈々益々奇怪に堪へず。

愛と幸福

さるにても人の至情こそ感ずべきの極みなれ、こゝにいふ淫婦は全く至誠の情によりて其罪赦されたり、夫れ世には神を愛するほど、至誠の情はなし、神は無限に愛すべき者なれば、之を愛するには無上の愛を以てせざるべからず、されど眞の幸福は個中に在り、神を愛するは、聖人の幸福なり、天上の幸福なり、神が地上に於て罪人に要求する所の後悔も亦此の如き愛に在り、人は如何なる罪惡を積みかさぬるも、神に對して至誠の情をあらはし、中心より深く罪惡を悔ひて、神を萬事に越えて愛すれば、必ず其の罪惡赦さるゝものなり、人は此の如く愛すれば、直に罪人變じて義人となり、惡人變じて善人となり、地獄變じて天國となるものなり、世に愛なき者ほど濟度しがたき者はなし。

基督法敎師に仁を說く

(11)基督法敎師に仁を說く　或日基督十二使徒と共にイエルサレムに向けて旅行し、イエリコの里を過ぎて、その市中に逗留せしに、或法敎師あり、基督を試みヒけるは、師よ我何を行はゞ、永生を受くることを得べきや。』

基督曰く、『律法に錄されたる趣旨は何とあるや。』

法敎師『律法の敎ふる所は、爾心を盡し、精神を盡し、意を盡して主なる爾の神を愛すべし、亦己の如く隣人を愛すべし』と。

基督『然り、言の如し、此の如く行へば、永生を受くることを得べし。』

是れ基督は法敎師が唯だ口に言ふのみにして、實際には毫も之を行はざるを知りて、此の如く曰ひたるなり。

然るに法敎師は己の弱點を掩はんが爲に、

『隣人とは誰なるか。』

と曰へり、蓋し彼はユデア人をのみ隣人となし、外國人をば禽獸の如くに看做し、たるものなり、基督はその謬見を正うし、隣人とは世界萬民を指すことを示し、人は全心全力を盡して、神を愛し、又人を愛すべきことを敎へんが爲に、左の譬喩を設けて語りぬ。

サマリア人の慈悲

『或人イエルサレムよりイエリコに下るとき、途中盜賊に出會て、その衣服を剝取られし上に、痛く毆打されて、半死半生の有樣となれり、斯るところへ或司祭この路より下りしが、之を見過にして行けり、又レヴィの人も此に至り、進み見て同じく過ぎ行けり、然るに或サマリアの人旅して此に來り、之を見て憫み、近よりて油と酒を其傷に沃し、これを裹みて、己が驢馬にのせ、旅邸に携往きて介抱せり、翌日出發するとき銀二枚を出し、館主に與へて此人を介抱せよ、費用若し增さば、我かへりの時之を辨償すべしと曰へり、偖此の三人のうち誰か隣人たるの情誼を盡せしと意ふや。』

法敎師『無論其人を矜恤みたるサマリア人なり。』

基督『然らば汝も亦往きて此の如く行へ。』

元來ユデア人はサマリア人を啻に外國人と看做したるのみならず、敵の如くに看做したるものなり、然るに基督は此話のうちにユデアの法敎師をして、サマリア人も亦隣人なりと言はしむるに至りたるは、傳道の妙、見る可きなり。

此話の中に注意すべきは、司祭とも云はれて人民に敎訓を施すべき者が、常人よりも人を憫みて厚意を盡すべきに、頻死の人を見過して行ける事、又レヴィの人として聖祭に從事する者が、進み見たるまゝ、同じく過ぎ行ける事、然るにユデア人の忌嫌ふサマリア人が、負傷者を見て、惻隱の心禁じ得ずして、最も親切に之を介抱したる事即ち是なり。

世には往々此の如き例あり、平居口に仁義を唱へながら、さてその仁義を行ふべき場合にのぞみて知らぬ振をなすもの尠からず、却て人より道義も何も知らぬ

ものとさげすまるゝ人々の中に、珍らしき仁者を見ることあり、人はみかけによらぬものぞかし。

基督ラザルスの家に泊し天の道を説く

基督は此話の中に明に世界一祖、四海同胞の眞理を示すと同時に、己の道は世界の人類を皆兄弟となし、隣人となして、一視同仁主義なるをさとしたるものなり。

(12)基督ラザルスの家に泊し天の道を説く　或日基督イエルサレムに往く途中、凡そ一里ばかりてまへのベタニアの里に親友ラザルスといふ人の住めるにぞ、其家に宿泊して教を説けり、そも此のラザルスといふ人は財産家にして二人の姉妹をもてり、姉をマルタと云ひ、妹をマリアと云ふ、共に基督を崇敬せること一方ならず、されば基督の此家に入りて道を説ける間に、姉のマルタは貴客を欵待せんとて調理に忙はしく、心千々にみだれけるに、妹のマリアは基督の側に近づき、耳を傾けて餘念なく其道を聽聞しけるにぞ、聊か快からず思ひ、基督に近きて、『主よ、吾妹のわれを一人遺して勞働かしむるを何とも思召さゞるか、少しは心付けてよ』と曰ひければ、『マルタよ、マルタよ、汝は心多端にいらたつれども、されど人に無くて叶はぬ事は唯だ一つなり、マリアは善業を撰り、之を奪ふべからず』と答へぬ。

勤勞と冥想の標本

マルタは勤勞の標本にして、マリアは冥想の標本なり、二人はいと睦ましく暮せる姉妹にて、孰れも基督の意を迎へんことを務めたれば、其の目的は同じかりけれど、一人は外部の勞働を以て只管貴客を欵待せんことをのみ思ひわづらひ、一人は基督の道を樂み、御側に侍するをうれしとせり、然るに基督の道の極致は永へに神を觀望するに在れば、現つせ世より心を此の方面に寄せるは、善き方なり、此の觀望生活は死によりても奪はれずして、永遠無窮に繼續するものなり、外部の仕業を以て神に奉仕せんとする性行も善なるには相違なけれども、こは心をいろ〳〵に勞せしむるものにて、天に至るときには休止するものなり、此點に於てマリアはマルタよりも寧ろ善き方面を選びたるものなり。

基督遺産を爭ふ兄弟の貪心を戒む

(13)基督遺産を爭ふ兄弟の貪心を戒む　基督はガリレアに歸り、傳道の爲に益々勵みて國内に巡教し、衆民をさとして悔悟遷善の道に就かしめたるに、或日衆民の中より兄と遺産爭をなせる者出でゝ基督に請ふて曰く、『師よ、希くは我兄に父の遺産を我にも分配することを命じ給へ』と、基督答て曰ふ『誰か我をして汝等の

遺産を爭ふ裁判人となすや』とて、之を機會として衆人に貪心を戒めて曰く、

『汝等戒心して貪心を愼めよ、夫れ人の生命は所蓄の饒なるには因らざるなり』と、

尙譬喩を設けて懇にさとして曰く、

『或處に一人の富める人ありその田畑よく豐りければ、心中自ら喜びて以爲らく、我が作物を藏むる所なきを如何せん、之を入るべき我が倉小なれば、之を毀ち、更に大なるものを建て、豐饒なる作物と財貨とを其處に藏めて、我と吾心に語らん、汝は多年安樂に暮し得る財産を蓄へたれば、安心して口腹の樂を極めよと、然るに圖らずも神は彼に曰けるやう、無知なる者よ、今夜汝の生命奪はるゝやも知れず、さらば汝の備へしものは、誰が所有に歸すべきか。』

基督は此の如き譬喩を語り、さて戒めて曰く、

『凡そ己の爲に財を蓄へ、神に就て富まざる者は皆此の如し』と、實に地上の貨財をのみ蓄へて、天上に財寶を積まざる者は、凡て皆此の如し、人生は朝露の如し、いつ何時消え果つるやも知れず、古人は人生は風前の燈の如しと云へり、無常の風一たび吹き來らば、忽焉として滅す、此時に當りて百萬の富寶を蓄ふるも何かあら

基督富める青年に施を說く

む、死して持ち行かるゝ寶こそ大切なれ、基督の敎訓は眞に味ふ可し。

(14)基督富める青年に施を說く　或日一人の青年あり、基督の傳道の途中、其の下に跪き問ふて曰く、『善き師よ、我れ天國永遠の生命を得んと欲す、如何なる善業を行ふべきや』、基督曰く、『何ぞ我を善と稱するや、善き者は獨り神のみ、汝永遠の生命を得んと欲せば、誡を守るべし。』

少年『如何なる誡を守るべきや。』

基督『誡は汝の知れる所なり、姦淫する勿れ、人を殺す勿れ、偸盜する勿れ、僞證を立つる勿れ、拐騙る勿れ、汝の父母に孝行を盡せ云々。』

少年『師よ、此等は皆我が幼時より守れる所なり、尙虧る所あらば、請ふ示敎を給へ。』

基督『汝若し完全なる道に入らんと欲せば、尙一つを虧く。』

少年『師よ、そは如何なる事なるや。』

基督『汝の所有を賣りて、貧民に施せ、然らば天に於て財あらん、尙來りて十字架を操りて我に從へ。』

金が禍の因

少年此の言を聞きて太く憂へ哀みて、悄然として去りぬ、蓋し彼は多くの財産を有

したるに因る、兎角金ある者は、金に司配され易く、他の點に於て善良なる人と稱せらるゝも、金に對しては心きたなく、慾念益々つのり、『我は最早是にて足れり』と云ふ語を吐き得ざるが常なり、されば茲に謂ふ青年の如きも、十誡の道は幼き時より守り、尙進みて完全なる德を行ひ、天國のかぎりなき生命に入らんことを志し、自ら進みて其道を基督に問ふまでに至りしかば、基督も殊勝なりとて、汝の所有を悉く售りて、貧民に施し、無一物となりて我に從へと曰ひたるとき、餘りの意外の言葉に打驚きて、悄然として立ち去れり、永遠の生命を得んと欲して、自ら進みて其道の指敎を請ひながらも、所有の寶はすて難きものと見ゆ。

されば基督も之を見て喟然として歎じて曰く、

『富める者の神の國に入るは、それ難い哉』とて、尙ほ『富める者の神の國に入るは、駱駝の針の孔を穿るより難し』と曰へり、此言を聞ける基督の高弟ペートルスは、我等こそは一切の所有を打ちすて、師に從へる者なれとて、直に基督に向ひ『我等は一切萬事を捨てゝ主に從へり、その報償として何を得べきや』と問ひしに、基督は之に答て曰く。

基督姦婦に同情を寄す

『我まことに汝等に告げん、我に從へる汝等は世あらたまり、人の子の榮光の位に坐する時、汝等も十二の位に坐して、イスラエルの十二族を鞫くべし、凡て我名の爲に家宅、或は兄弟、或は姉妹、或は父、或は母、或は妻、或は子、或は田畑を棄つる者は、今世にては、幾倍を受け、來世にては窮なき生命を嗣ん、多くの先なる者は後になり、後なる者は先になるべし。』

基督敎の完全德として世に稱せらるゝものは、實に茲に在りて、彼の赤貧、貞潔及び服從の三德を神前に誓ふて、一生修道者的生活を送る者あるは、基督の此の敎訓を實行しつゝある者なり。

(15)基督姦婦に同情を寄す　或日基督早朝より聖殿に入りて道を說けるに、民の熱心に之を聽聞せるに反し、例のファリゼイの徒は法學者と共に姦淫を犯しつゝある現場に執へたる婦人を曳來りて群衆の中に据へ、基督に難題をかけたり、蓋しモイゼスの律法によれば此の如き婦人は石にて擊殺すべき規定なりしかば、基督が之を赦せといへば、モイゼスの律法に背くを訴へ、之を殺せといへば、基督の不慈悲を訴へ、且人民は人を死に處するを得ずといふ羅馬の現行法に違背す

るを訴ふるの意にてありぬ、偖て彼等の曰ふやう、

『師よ、此の婦人は姦淫を爲し居る時そのまゝ執へられし者なり、モイゼスの律法には此の如き者を石にて擊殺すべしと命ず、師の高見は如何？』

斯く言ひて基督を試みて、訴訟の因を引起さんと謀りたるが、折しも基督は身を僂めて指にて地に字を書きてありぬ、これ問者と更に取合はざる狀を示したるものなり、(因に曰ふ、基督の字を書きたるは、生ける一生に唯此の一回のみと云ふ)、然るに彼等の切に詰問して已ざれば、基督は彼等の反對に出で、彼等が自身の不品行をおし隱して反省する所なく、徒らに人の非行をのみ摘發せんとするは、豺狼にもまさる殘忍の根性にして、況して纖弱なる一婦人の罪を斯くまで苛責するは、酷薄の至りなれば、之を戒めんとて身を起して答て曰ひけるは、

『汝等のうちにて罪なき者まづ彼を石にて擊つべし。』

言ひ畢りてまた再び身を屈めて地に字を書けり、こは基督に於て固より此の婦人の行爲を好としたるにはあらざれども、反對者の苛酷なるを戒めんとて斯くは答へたるなり、然るに彼等の中に罪なき者は一人もなかりければ、此言を聞くや、其の良心に責められ老者を始め少者まで一人往き、二人出で、遂には悉く出で往き、のこるものはたゞ基督と婦人のみとなりぬ、此時基督は徐に身を起し、其處に引据られてある婦人に向ひ、

『婦人よ汝を誣へし者は何處へ往きしや、汝の罪を定むるものなきや。』

『主よ、誰もなし。』

『我も亦汝の罪を定めず、とく往け、再び罪を犯す勿れ。』

基督貧者に慰藉の福音を告ぐ

(16)基督貧者に慰藉の福音を告ぐ　基督は富者に天國に入るの難きを說き、尙其の不正の道によりて得たる財寶を貧者に施すの難きを說き示すと同時に、此世にて貧困なる者は眞の道を守りて、其の貧苦艱難を忍ぶことを知れば、來世に於て富者の反對に幸福なる生命を送ることを得べきことを說きつゝ、常に貧者の心を慰め居たるが、其中にも左の如き慰藉となる話をなせり。

『茲に一人の富者あり、身に金衣を纏ひ、日美食に飽き、日に傲奢の生活を送りけるに、その同所に一人の貧者あり、ラザルスと云ふ、身に腫物を生じ、全身爛て、見るも淺間敷き姿なりしも、常に彼の富者の門前に起伏なし、食卓より落つるパン屑

を得て、其の飢を凌がんと思へども、誰も之を與ふる者なく、唯犬來りてその腫物を舐るのみ、かゝる間に憐れ其の貧者は死したりけるに、天の使たちに依りて天上の樂境に導かれ、アブラハムの懷に入れり、然るに其後彼の富者も亦死して葬られしが、這は陰府に陷りて苦患を受くること甚だし、仰いで天上界を望み、遙にアブラハムと其懷に在るラザルスを見て叫び曰ひけるは、父アブラハムよ、我を憐み、ラザルスを遣はして、其の指の先を水にひたして、吾舌を涼しめ給へ、我此の火焰の中に苦めばなり、アブラハムは聞いて曰く、汝の世にありし時は榮曜榮華の生活を送り、ラザルスは其の苦を受しと憶へ、今彼は慰められ、汝は苦めらるゝなり、加之ならず、我等と汝等の間に深淵ありて互に相通ずるを得ずといひければ、彼の富者は尙も歎き願ふには、されば父よ、希くは我父の家にラザルスを送り給へ、そは吾に五人の兄弟あり、責ては是等に吾の苦患を受くる狀を知らしめ、此の苦みの所に來らざるやう申遣し給へといひけれど、アブラハムは答て曰く、彼等にはモイゼスと云ふ預言者あれば、就て聽く可し、富者は尙押返へし、さは去ながら死より往きて彼等に告ぐる者あらば、悔改むべしと云ふ、アブラハム答へて若しモイゼスと預言者に聽かずば、設令死より甦へる者ありとも、其の勸を受けざるべしといひしとなん。』

基督時人に婚姻の重きを敎ふ

(17)基督時人に婚姻の重きを敎ふ　婚姻は人倫の大道にして、一結不離はその必要條件なるに、ユデアの學者中には之に就き色々の說をなせる者あり、例へば姦淫の故ならでは離緣すべからずと敎へたる學者もあれども、何の理由に拘らず、夫の希望に任せて妻を離緣するも可なりと敎へたる學者すらありて、ユデア人は多く此說に傾き、離緣の風貴賤の間に行はれたり、或時ファリゼイ人は基督を試みて、『人は何の故に拘らず、其妻を出すも宜ろしきか』と問ひけるにぞ、基督は之を好き機會となし、婚姻につきて正しき道を敎へて曰く、『夫れ神は元始に一男一女を造りて、一夫一婦の制を立てたり、是故に人父母を離れて、其妻と合體し、二人相合して一體となるなり、既に一體なり、故に二つにはあらず、神の合せ結べる者は、人之を離すべからず』と、これ即ち一男一女が相合して偕老同穴の契りを結ぶは神の聖慮に基くものにして、其妻を離緣するが如きは神の聖旨に反するものなりとの意を示したるに、彼等はモイゼスの律法を引きて之に反對を試みんと欲

離婚は神意に反背す

し、『されば モイゼスが離縁狀を與へて妻を出せと命せしは何の爲ぞや』と曰へり、基督之に答て曰く、『モイゼスは妻を離縁することを命せしにあらず、但だ自ら情慾を制すること能はざる頑固無情なるに因りて、妻を出すことを忍容したれども、此は元始は斯くあらざりき、我なんぢらに告げん、若し姦淫の故ならで其妻を出し、他の婦を娶る者は、姦淫を行ふなり、又出だされたる婦を娶る者も姦淫を行ふなり。』

基督の門弟は之を聞きて以爲らく、人が一旦妻を娶ると雖、其の氣質未だ悉く知れざれば、他日或は厭ふ心の生ずるも測られず、その時離縁すること叶はずとありては、不幸之より大なるはなし、果して此の如くば寧ろ始より娶らざるがましなりと思ひたれば、基督に語て曰く、『若し人妻に對して此の如くば、娶らざるに若(しか)ず』と、基督は情慾を制すること能はざる者は、迚も妻を娶らずして貞潔を守ること能はざるを知らしめん爲に、『此言(ことば)(所謂娶らざるに若かずと云ふ言)は人みな承服すること能はず、唯賦(さづ)けられたる者のみ之を爲し得べし云々。』

基督傲慢なる者を戒む

(18)基督傲慢なる者を戒む　基督イエルサレムに近づけるに、自ら己を義として、他を賤む人ありければ、之に好箇の訓戒を垂れて曰く、『此に二人のものありて祈らんとて聖殿に登りしが、一人はファリゼイ人にして、一人は收稅吏なりけり、さてファリゼイ人の祈るには、神よ、吾こそは偸盜もせず、不義もせず姦淫もせず、又此の收稅吏の如き者にあらざるを謝す、吾は一週二回の斷食をなし、又總て獲るものの十分の一を献げたりとて、神前に起ち、横柄に己が善事をのみ列擧して祈りたり、然るに收稅吏は遙か遠くに立ち、敢て天をも仰ぎ見ず、その胸を打(うち)て、神よ、罪人なる我を憐み給へといふて祈りたり。』

基督衣食住の道を教ふ

基督は斯く語りたる上、結言して曰く、『我汝等に告げん、此人は彼人よりは義とせられて家に歸りたり、夫れすべて自ら高ぶる者は卑(さげ)られ、自ら卑(へりくだ)だる者は高(あげ)らるべし。』

(19)基督衣食住の道を教ふ　生存競爭の今日、衣食住問題は益々困難となれども、昔より食はずして死したる者の例もなければ、左程までに心配するにも及ばず、要は正しき目的を定めて、勤勞怠らざるに在り、稼ぐに追付く貧乏はなきものぞかし、尙茲に注意すべきことは、利慾と虛榮とを避くること是なり、一たび利慾と

虛榮とに囚はれては、身金殿玉樓に住みて、金衣玉食に飽くと雖、一生足らざる念に苦めらるゝものなり、苟も衣食住は以て生命を繼續せしむるにて足れりとせば、何ぞ爾く思ひ煩ふを要せんや、基督は之に就き訓戒を垂れて曰く、

『我爾曹に告げん、爾曹生命の爲に何を食ひ、身體の爲に何を着んとて思ひ煩ふ勿れ、生命は糧より優り、身體は衣よりも優れり、鴉を思見よ、稼ず、穡ず、倉をも納屋をも有たず、然ども神はなほ此等を養ふ、況て爾曹は鳥よりも貴きこと幾何ぞや、爾曹のうち誰かよく思ひ煩ひて、其生命を寸陰も延得んや、然れば最小事すら能ざるに、何ぞ其他を思ひ煩ふや、百合花は如何にして生長かを思へ、勞ず、紡がざるなり、我爾曹に告げん、ソロモンの榮華の極の時だにも、其裝この花の一に及ざりき、神は今日野に在て、明日爐に投入らるゝ草をも如此よそはせ給へば、況して爾曹をや、吁信仰うすき者よ、爾曹何を飲んと求むる勿れ、また思ひ惑ふこと勿れ、凡て是等の物は世界の邦人の求るものなり、なんぢらの父は、是等の物の爾曹に無て叶ぬ事を知る、たゞ神の國を求めよ、然らば是等の物は爾曹に加へらるべし。』

基督人を恕すべき道を教ふ

(20)基督人を恕する道を教ふ　人として罪なき者はなし、若し罪ある度毎に、怒りて之を處分せんには、恐くは世に一人もなきに至らん、世には情けと云ふもの無くてはならぬものなり、然るに人は此の道理をわきまへずして、我に對して些少なる罪を犯す者をも恕せずして、苛酷なる取扱をなすものあり、豈啻に高利貸のみならんや、罪の借財に對しても高利貸の如き苛酷なる請求をなす者あり、此の如き者は己が人に對して罪の借財を負へることを知らざるの徒なり、人をせむること酷なる者は、己も亦人より酷遇せられ、特に天の容恕を蒙むること難き者なり、基督は人を恕するの點に於ては、殆ど無制限ならんことを敎へたるものなり。

或時高弟ペートルス基督に來りて曰ひけるは、『主よ幾次まで我兄弟の我に罪を犯すを赦すべきか、七次まで乎』、基督彼に曰けるは、『爾に七次とは言はじ、七次を七十倍せよ、是故に天國は王その臣と會計を調んとするが如し、調べ始めしとき、千萬金の負債したる者を王に曳來りしに、償ひ方なかりければ、之に命じて其身、その妻孥と、あらゆる所有を皆賣て償へと曰へり、その臣俯伏し拜し曰ひけるは、請ふ我を寛し給はば、皆償ふべし、是に於てその臣の主憐みて之を釋、その負債を免

したり、其臣出て己より銀一百の負債したる友に遇ひければ、之を執へ喉をとり、負債を返せと曰ふ、その友足下に俯伏して、希いひけるは、我を寛し給はゞ、皆償ふべし、然るに之を肯はずして往き、其負債を償ふまで、彼を獄に入れぬ、外の友その爲る事を見て、太く哀み、往て此事を皆其主に告げしかば、主かれを召して曰ひけるは、惡き臣よ、爾も亦われに求しに因りて、我その負債を悉く免したり、我なんぢを憐みし如く、爾も亦友を憐むべきに非ずや、その主いかりて、負債を償ふまで、彼を獄吏に付せり、其心より兄弟を救はずば、我が天の父も亦なんぢらに此の如く行給ふべし。』

基督宗教道德の根本義を説く

(21)基督宗教道德の根本義を説く　毎度基督の傳道の妨をなせる彼のファリゼイ人等及びサトセイ人等は、基督の爲に説破せられて、口を塞がしめられたるを口惜く思ひ、或日一處に相集りて協議しけるが、協議の結果一人の法教師を基督の許に遣はし、基督の智識を試さんとて、其精通せる律法に就て問はしめて曰く、

『師よ、律法のうち何れの誡を以て最も大なるものとなすべきか？』

基督はこれぞ宗教道德の根本義を説く好箇の機會なれと思ひ、昔より宗教道德を規定したる十誡を二誡に約して、その根本義を示して曰く、

二大誡律

『汝の心を盡し、精神を盡し、意を盡して、主なる汝の神を愛すべし、これ第一にして大なる誡なり、第二も亦これに同じ、己の如く隣を愛すべし、(他人を我身の如くに愛すべし、)律法と預言者等の教へし所は、皆此の二大誡律に基けるものなり。』

法教師は基督の智能の深遠なるに一驚を喫したりと見え、二の矢をつがずして去れり、實に基督の説ける如く宗教道德は之を約すれば、神を愛し、人を愛するの二誡に歸するものなり、前者は人の神に對する道を規定するものにして、神に對する道種々ありと雖、要は『心、精神、意を盡して神を愛する』に在り、後者は人と人との間に於て守るべき道を規定するものにして、その法則多々なりと雖、究極は『己を愛するが如く人を愛する』に在り。

但し十誡の條目を擧ぐれば左の如し。

第一　我は主なる汝の神なり、我の外汝に神あるべからず。

第二　汝主なる汝の神の名を濫りに呼ぶ勿れ。

第三　汝安息日を聖日とすべきことを記憶ゆるべし。

第四　汝父母を尊敬ふべし。
第五　汝殺す勿れ。
第六　汝姦淫する勿れ。
第七　汝盗む勿れ。
第八　汝僞證する勿れ。
第九　汝人の妻を戀る勿れ。
第十　汝人の所有物を貪る勿れ。

今之を約すれば、第三誡までは『神を愛すべし』と云ふに歸し、第四誡より第十誡までは『人を愛すべし』と云ふに歸すること、必ずしも瑣々の言を費さずして知るべし。

愛神の理由

愛神の理由は、神は萬善萬美の本源なるが故なり、天に在す吾等の父なるが故なり、人間はその生命をも存立をも神に歸すべきが故なり、而して愛神の方法は基督自ら說けるが如く、心を盡し、精神を盡し、意を盡して、神を讃美し、神に感謝し祈念し、奉仕するに在り。

基督教の極意

愛人の理由は、人皆神の子なるが故なり、人皆基督の寶血を流して贖ひたる者なるが故なり、世界一祖、四海兄弟にして、如何なる人も同じ人生の歸趣を有するが故なり、故に基督は『他人』と云はず、『隣』と云へり、『倫人』の義なり、愛神の方法は、基督自ら說ける如く、己を愛するが如く之を愛するに在り、孔子は之を消極的に說きて、己の欲せざる所、之を人に施す勿れと云へり、基督の說く所は積極的なり。

基督自ら門弟の足を洗ふて實訓を授く

尙愛神愛人の二大道義を一言を以て約すれば、『愛』の一字に歸す、故に基督の說く所の道は則ち『愛』なり、世に基督の極意は『博愛』なりと云ふは之が爲なり。

(22)基督自ら門弟の足を洗ふて實訓を授く　基督は門弟を携へて時人に道を說きたれども、門弟自らも基督の敎訓を要すること多かりき、特に彼等は基督の國王たらんことを夢みて、相互に大臣宰相の位を爭ふなど、謙遜の德に缺くること甚しかりしかば、先きにも、嬰兒により、謙遜の德を敎へたれども、今又死期の近きに臨み、自ら手本を示して適切に此德の必要なるを敎へたり。

或日基督晩飯の席を起て上衣をぬぎ、手巾を取て腰に束、而して盥に水をいれ、弟子の足を濯ひ、その束たる手巾にて拭はしめ、遂にペートルスに及ぶ、ペートルス

彼に曰けるは、主よ、爾わが足を濯ふか、基督答て曰ひけるは、我爲ことを爾今知ず、後これを知べし、ペートルス彼に曰ひけるは、斷えて我足を濯ふべからず、基督答ひけるは、若我爾を濯ずば、爾は我と干渉なし、ペートルス彼に曰く、主よ、止に我足のみならず、手と首をも濯ひたまへ、基督曰ひけるは、濯ひたる者は足のほか濯ふに及ばず、然して全く潔し、爾曹は潔し、されど盡くは潔者に非ず、此は基督己を賣んとする者の誰なるを知るゆゑに、盡くは潔者に非ずと曰ひたるなり、彼等の足を洗ひし後、その上衣を取り、また坐して彼等に曰ひけるは、我なんぢらに行ひし事を知るか、爾曹われを師と呼び、また主と呼ぶ、なんぢらの言ふところはよし、われは誠に是なり、我は爾曹の師また主なるに、尙なんぢらの足を濯ふ、爾曹も亦たがひに足を濯ふべし、我なんぢらに例を示せり、此は我なんぢらに行し如く、爾曹にも行しめんが爲なり、われ誠に實に爾曹に告げん、僕は其主より大ならず、又使者は之を遣はす者より大ならず、爾曹もし之を知りて、此の如く行ば福なり。

基督の前に謙遜を說きたる者なし

基督の敎ふるや實に懇切を極む、自ら實行して例を示しつゝ、謙遜の德を說けり、抑々謙遜の德は基督以前には餘り之を說きたる者を聞かず、況や之を行ひたる者をや、論語に『夫子は溫良恭儉讓』の語あり、朱子は讓の字を註して謙遜なりと云へども、其所謂謙遜なるものは禮節上人にゆづりへりくだると云ふまでにて、他に深き意味あるにあらざるが如し、孔夫子は孝を說けども、謙遜を說かず、泰西にてはソクラテス、プラトーン、アリストテレス等の學者は、謙遜の德に就ては一言も言及せず、多くは義を說き、勇を說き、人耳に快なる德を說けり、彼のヂオゲネスとプラトーンの對談の如きは、當時の學者の眞相を示して餘あり、一日ヂ氏の室に泥靴のまゝあがりこみ、華美を盡せる敷物の上を踏みながら、『我はプラトーンのほこりを踏む』と曰ふや、流石はプラトーンなり、『君の動作も亦一種のほこりなり』と答へたりとぞ、亦以て傲慢は當時學者の常なりしを見るべし、豈啻當時とのみ云はんや、今日と雖基督の道德を奉ぜざる學者は、多くは皆傲慢なり、傲然高く自ら標置して、『哲學は學者の仙食』『宗敎は愚民を濟度する方便など丶公言する學者世に尠からず、門人の足までも洗ひて、謙遜を敎ふる者は、蓋し基督一人のみ。

基督世の末期を說きて時人を警醒す

(23)基督世の末期を說きて時人を警醒す　基督は傳道の爲日夜奔走して、席暖まるの遑もなかりしが、時人は其の割合に信ずる者少なく、特にファリゼイ人、サトセ

ユデア人の頑冥

イ人、及び法學者、司祭長等は基督の傳道を妨害したるのみに止まらずして、遂には基督を殺さんことを企つるに至りしかば、神の選民とも云はれたるユデアの民が、昔より天の特別の恩寵に沿しながら、忘恩の沙汰に出づること屢次にして、嘗ては埃及に於て奴隷の如く使役せられたることあり、近くはバビロンに俘虜となりて移されたることありたるが、後に基督天の使命を受け、同じく其國に生れて、自ら人に手本を示し、その公生涯に入りて傳道に從事するや、東奔西走して、到る處に仁恩を蒔き、奇蹟を行ひ、海に、山に敎を布き、殿に、家に道を傳へ、諄々として倦まざりしに、尙神の選民等はファリゼイ人等に與して、悔悟遷善の志なかりければ、基督も今は是までなりとて、遂に國都イエルサレムが天譴を蒙りて滅亡に歸するを預言しつゝ、尙想を遠く世の末期に及ぼし、其時には自ら再び世に天降りて、公けに世界萬民を審判すべしと云ふ所謂公審判と稱する光景を說きて、時人の迷夢を醒したるは、基督の傳道生活の終に當りて特に注目すべき事なれば、茲に詳しく之を記すべし、先づ初めに基督の自ら語れる所を述べ、次に著者の解說を加へんと欲す。

基督聖都の滅亡と世の末期とを想望す

聖都滅亡當時と世の末期の光景

基督殿より出でければ、其の弟子すゝみて、殿の構造を彼に觀せんとしたりしに、基督彼等に曰ひけるは、爾曹すべて此等を見ざるか、我まことに爾曹に告げん、此處に一の石も石の上に圮れずしては遺らじ、夫より橄欖山に座し給へるとき、弟子來りて曰ひけるには、何の時このこと有るや、又爾の來る兆と世の末の兆は如何なるぞや、我儕に告げたまへ、基督答て彼等に曰ひけるは、爾曹人に欺かれざるやう愼よ、蓋おほくの人わが名を冒しきたり、我はキリストなりと云ひて、多くの人を欺くべし、又爾曹戰と戰の風聲をきかん、されど愼て懼るゝ勿れ、此等の事はある可きなり、然ども末期は未だ至らず、民おこりて民をせめ、國は國をせめ、饑饉、疫病、地震ところ〴〵に有るならん、是みな禍の始なり、其とき人なんぢらを患難に付し、爾曹を殺すべし、又なんぢら我名の爲に萬民に憎れん、此時許多のもの礙かつ互に付し、互に憾むべし、また僞預言者多く起て、多くの人々を欺かん、又不法みつるに因て、多くの人愛情ひやゝかに爲べし、然ど終まで忍ぶ者は救るゝことを得ん、また天國の此福音を萬民に證せん爲に、普く天下に宣傳られん、然るのち末期いたるべし、是故に預言者ダニエルに託て言はれたる所の殘暴にくむべき

もの聖處に立つを見ば、(讀者よく思ふべし)厥時ユデアにをる者は山に遁れよ、屋上に在ものは、其家の物を取らんとて下る勿れ、田にをる者は、其衣を取らんとて歸る勿れ、其日には孕める者と乳を飲する婦は禍なる哉、爾曹冬または安息日に逃るゝことを免れん爲に祈れ、其とき大なる患難あり、此の如く患難は世の始より今に至るまで有らざりき、又後にも有らじ、若その日を少くせられずは、一人だに救るゝ者なからん、然ど選ばれし者の爲に其日は少くせらるべし、其時もしキリスト此處にあり、彼處にありと爾曹にいふ者あるとも、信ずる勿れ、そは僞キリスト僞預言者たち起て、大なる休徴と異能を行ひ、選ばれたる者をも欺くことを得ば、之を欺く可ければなり、われ預じめ爾曹に之を告ぐ、若キリスト野に在といふ者あるとも、出づる勿れ、室に在りと云ふもの有るとも、信ずる勿れ、そは電の東より出て、西にまで閃くが如く、人の子も來るべければなり、そは屍のある處には、鷲集まらん、此等の患難の後、たゝちに日は晦く、月は光を失ひ、星は空よりおち、天の勢ひ震ふべし、其とき人の子の兆天に現はる、また地上にある諸族は哭哀み、且人の子の權威と大なる榮光をもて、天の雲に乘來るを見ん、又その使等を遣し、笛の

無花果樹に由りて譬を學べ

大なる聲を出さしめて、天の極より極まで、四方より其選ばれし者を集むべし。

夫なんぢ無花果樹に由て譬を學べ、其枝すでに柔かにして、葉萠めば、夏の近きを知る、此の如く爾曹も凡て此等の事を見ば、時ちかく門口に至ると知れ、われ誠に爾曹に告げん、此等の事こと〴〵成まで、此民は廢ざるべし、天地は廢ん、然ど我言は廢じ、その日その時を知るものは、唯わが父のみ、天の使者も誰もしる者なし、ノエの時の如く、人の子の來るも亦然らん、それ洪水の前のノエ方舟にいる日までは、人々飲食嫁娶などして、洪水の來り悉く之を滅すまで知らざりき、此の如く人の子も亦きたらん、其時二人田に在らんに、一人は取られ、一人は遺さるべし、二人の婦磨ひき居らんに、一人はとられ、一人は遺さるべし、是故に爾曹の主いづれの時きたるかを知ざれば、怠らずして守れ、爾曹これを知れ、もし家の主人ぬすびと何の時きたるかを知らば、其家を守りて破らすまじ、然らば爾曹もまた預備せよ、意ざるときに、人の子きたるべければなり、時に及で糧を彼等に予さする爲に、主人がその僕等の上に立たる忠義にして智僕は誰なるか、その主人の來らん時、かゝの如く勤るを見るゝ僕は福なり、我まことに爾曹に告げん、其所有をみな彼に

天國は新郎を迎ふ十人の童女に似たり

督らすべし、若その惡僕おのが心に、我が主人の來るは遲らんと意ひ、その朋輩を打撻きて、酒に醉ひたる者どもと共に、飲食を始なば、その僕の主人おもはざるの日、しらざるの時に來りて、之を斬殺し、其報を僞善者と同うすべし、其處てて哀哭切齒すること有らん。

其とき天國は燈を執て新郎を迎へに出づる十人の童女に比ふべし、その中の五人は智く、五人は愚なり、愚なる者は其燈をとるに油を携へざりしが、智き者は其燈と兼に油を器に携へたり、新郎きたりぬ、出で迎よと呼聲ありければ、この童女ども皆おきて其燈を整へたるに、愚なる者智き者に曰ひけるは、我儕と爾とに恐くは足るまじ、爾曹賣者に往て、己が爲に買へ、かれら買はんとて往きしとき、新郎きたりければ、既に備ひたる者は之と偕に婚筵に入りしかば、門は閉ぢられたり、斯て後その餘の童女きたりて曰ひけるは、主よ、主よ、我儕の爲に開きたまへ、答て我まことに爾曹に告げん、我は爾曹を知ずと曰へり、然ば怠らずして守れ、爾曹その日、その時を知らざればなり。

天國は所有を僕に託して旅行する者に似たり

また天國は或人の旅行せんとして、其僕をよび、所有を彼等に預るが如し、各々の智惠に從ひて、或者には銀五千、或者には二千或者には一千を與へおき、直に旅行せり、五千の銀を受けし者は往きて之を貿易し、他に五千を得たり、二千を受けし者もまた二千を得たり、然るに一千を受けし者は往て地を掘り、其主の金を藏せり、歷久て後その僕等の主かへりて、彼等と會計せしに、五千の銀を受けし者、その他に五千の銀を携來りて、主よ、我に五千の銀を預けしが、他に五千の銀を儲けたりと曰ひければ、主かれに曰ひけるは、あゝ善かつ忠なる僕ぞ、爾寡なる事に忠なり、我なんぢに多ものを督らせん、爾の主人の歡樂に入れよ、二千の銀を受けし者來りて、主よ、二千の銀を預けしが、他に二千の銀を儲たりと曰ひければ、主かれに曰ひけるは、あゝ善且忠なる僕ぞ、なんぢ寡な事に忠なり、我なんぢに多ものを督らせん、爾の主人の歡樂に入れよ、また一千の銀を受けし者きたりて曰ひけるは、主よ、爾は嚴人にて播ざる處より獲ちらさゞる處より歛ることを我は知る、故に我懼てゆき、主の一千の銀を地に藏し置けり、今なんぢ爾の物を得たり、その主こたへて曰ひけるは、惡かつ惰れる僕ぞ、爾わが播かざる處よりかり、散さゞる處より歛むることを知るか、然らば我が金を兌換舖に預置くべきなり、されば我が歸

公審判の光景

りたるとき、本と利とを受くべし、是故に彼の一千の銀を取りて十千の銀ある者に與へよ、それ有る者は與へられて、尙あまりあり、無有者はその有る物をも奪るるなり、無益なる僕を外の幽暗に逐やれ、其處にて哀哭切齒すること有らん。

人の子おのれの榮光をもて、諸の聖使を率來る時は、その榮光の位に坐し、萬國の民を其前に集め、羊を牧者が綿羊と山羊とを別つが如く、彼等を別ち、綿羊を其右に、山羊をその左に置くべし、斯て王その右にをる者に云はん、吾父に惠るゝ者よ、來りて創世より以來なんぢらの爲に備へられたる國を嗣げ、蓋なんぢら我が飢し時われに食せ、渴きしとき我に飲ませ、旅せし時われを宿らせ、裸なりし時われに衣せ、病みしとき我をみまへ、獄に在りしとき我に就ればなり、是に於て義者かれに答て云はん、主よ、何時なんぢの飢たるを見て食せ、また渴きたるに飲しゝ乎、何時主の旅したるを見て宿らせ、又裸なるに衣せしや、何時主の病みまた獄に在るを見て、爾に至りし乎、王こたへて彼等に曰はん、我まことに爾曹に告げん、既に爾曹わが此兄弟の最微者の一人に行へるは、即ち我に行しなり、遂にまた左にをる者に曰はん、罪せらるべき者よ、我を離れて惡魔と其使者の爲に備へたる熄ざる火に入よ、蓋なんぢら我が飢し時われに食せず、渴きしとき我に飲ませず、旅せし時われを宿らせず、裸なりし時われに衣せず、病みまた獄に在りし時われを顧ざればなり、是に於て彼等また答て曰はん、主よ、何時なんぢの飢、また渴き、また旅し、又裸、また病み、また獄に在るを見て、主に事ざりし乎、其とき王こたへて彼等にいはん、我まことに爾曹に告げん、此最微者の一人に行はざるは、即ち我に行はざりしなり、此等の者は窮なき刑罰に入り、義者は窮なき生命に入べし。』

基督の説ける世の末期に關する解説

(24)基督の説ける世の末期に關する解説　基督は右に述ぶるが如く、聖都イエルサレムの滅亡と世の末期とに關して詳に之を預言したるが、イエルサレムの滅亡に關しては、實際基督の預言の如く行はれ、神の選民と云はれたるユデア人は今や亡國の民となりて、世界に散亂し、其後有志幾回か國を興さんと企てたれども、天譴は之を許さず、實に一石の遺跡すら認むること能はざるに至れり、今日にては其民はジウとて世界到る處に呪はる、天譴も亦恐ろしい哉、著者は之に就きて詳說するの意なし、但だ世の末期即ち基督敎者の今日公審判と稱する事に關して詳しく解說せんと欲す、因に言ふ、基督がイエルサルムの滅亡と共に世の末

期を預言したるは、前者の預言の一字一句までも成就せられたるを示して、後者の預言の必ず應驗あるべきを證明せんが爲なりき、過ぎたる事を見て、來るべき事を知れ。

夫れ世の推移する、宛然影の忽ち顯はれて又忽ち隱るゝが如し、人生の泡滅する、又夢の如く、一醒忽ち長夜の惰眠を攪破するの時や來ぬらん、今日の人々も亦基督時代の人々の如く往々神を忘れ、己を忘れ、營々役々として一生を世事紛擾の中に送れり、其の此世に在る狀態を見るに、毫も希望する所もなく、恐懼する所もなきが如く、日夜天の愛憐を濫用して、更に悔悟遷善の道に就くを知らざるなり、然りと雖、世は斯の如くにして終るべきものにあらず、人の善惡も又斯の如く沒了し去るものにあらず、必ずや恐るべき日來りて、信賞必罰、公明正大の審判行はるゝならん、世の末期に行はるゝ公審判とは即ち是なり。

基督の降來に三種あり

聖者ペルナルドス曰く、神の降來に三ッの別あり、人骸を受けて降來せる事、人心の中に降來する事、審判の爲に降來する事是なりと、距今既に一千九百有餘年前の昔、一切人間の罪を償はんが爲に、基督が天父の旨を奉じて、寒夜厩の裡に誕生したる事、則ち是れ第一の降來なり、次に山高く、海深き恩寵を以て、朝々暮々地上の善魂に降臨する事、則ち是れ第二の降來なり、最後に天地開闢以來の人民を、南北東西より一場に聚めて、公明正大なる審判を行はんが爲め、權勢隆々、威嚴赫々の身を以て、雲に乘じて光臨すべき事、則ち是れ第三の降來なり。

公審判の時期

是に由りて之を觀れば、第一の降來は愛憐を示すありがたき降來、第二の降來は恩寵を垂るゝ辱けなき降來、第三の降來は權能を彰はす恐ろしき降來と謂はざる可からず、あゝ此恐ろしき降來は、即ち是れ著者の今茲に記さんとする公審判なり、請ふ公審判の時期、土地、光景、裁斷、宣告等に就きて逐一詳說せん。

公審判の何時行はるゝかは、說く迄もなし、世の末期にあればなり、されど一歩を進めて問はん、世の末期は何時來るやと、基督の言に據れば、基督敎が普ねく世界萬國に弘布せられて、普天の下、率土の濱、一人たりとも之を聽かざるものなき時に至りて來ると云ふ、基督敎學者は尙一つの說を立てゝ曰く、善人聖人の員數が、彼の神に背反して地獄に墮落したりと云ふ昔の天使、今の魔鬼の員數に達したる時に來るべしと、(蓋し神の天使を造出したるは、之を天國に上げて、己の圓滿な

る幸福を頒たん思召にて在りたれど、三分の一までも既に墮落して、天國の椅子に空缺を告げしめたるが故に、神は之に充つるに善人聖人の靈魂を以てすべしとは、是れ幾多教父學者の說く所なり)、されど尙一歩を進めて、普天の下、率土の濱、一人も基督の敎を聽かざるものなき時と、善人聖人の靈魂が反逆の天使の數に達するの時とは、何時の何日なるかと推究することを得べけれど、個は地上の人の知る能はざる所なりと云ふ、豈唯だ地上の人のみならんや、在天の天使も知る能はず、否、天使の上に位せる基督の母と雖、恐くは之を知ること能はざるべしとのことなり、基督の言に曰く、其日(公審判の日)其時に至りては人得て之を知る者なし、天の使等も之を知らず、知る者は唯だ我父のみと、あゝ其の之を知らざる所以は、即ち是れ天の攝理の在る所にして、吾人を警戒せしめん爲とこそ知らる、若し不幸にして其時日を知るを得ば……著者は公審判の期日を知るを不幸と云ふ……罪惡忽ち地上に貫盈せんさなきだに驕奢淫逸は跡を絕たざるに、若し之を知るを得ば、其期日に達する一日前までは、世界は眞個に罪惡の競爭場たらんのみ、善い哉天の之を知らしめざるや、基督は弟子を戒めて曰く、人の子の來

公審判の方所

るはノエの時に於けるが如けんと、蓋しノエが一族を率ひて方舟に入るまでは、時の人民飲めよ、食へよ、嫁げよ、娶れとて、一人も洪水を夢みるものなかりしかば、竟に汎濫たる洪水の爲に一舉に呑み盡されたるなり、天の公審判の期日を知らしめざる所以、實に玆に在るなり。

公審判の方所につきては聖書の中に此處と云ふて名指したる明文なけれども、舊約書中に、「我れ萬民を集めて、之をヨザファットの谷に引ひ……坐して其の周邊に萬民を裁判せん」といへる語あるによりて、敎父學者は往々此語より推理して、公審判の地はヨザファットならんと言ふ、ヨザファットとはユデアのカルワリオ山とオリベト山との間に在る谷を謂ふなり、公審判の地此處に在りといふものの强ち理なきにもあらず、彼の世光と仰がるゝ大哲トマスは、之に三個の理由を揭げて曰く、昇天せる所に降來するは理なり(第一)、辛苦艱難を嘗めたる所に、光榮を顯表するは義なり(第二)、公義の裁判と云ふ意味の地に、公審判の行はるゝは適當なり(第三)と、著者は第二の理由を以て、最も力ありと信ず、如何となれば基督在世の砌、屢々玉歩をあげて往來せる處に於て……又天下に周遊して天父の敎を

說ける時、時人より大工の子と稱せられて嘲笑せられたる處に於て……又完全無缺一點の過失なき身ながら、奴隷の刑具なる磔柱に釘られて、爾神の子ならば磔柱より下りて見よ、などゝ罵倒せられたる處に於て、然り、其處に於て天地も爲に震ふほどの勢を以て降來し、爾等が昔者大工の子と稱して嘲り、神の子ならば下りて見よと罵りたる者は、餘人ならず、即ち今斯く審判する我なるぞとて、神の萬能の威光を顯はしつゝ、渾圓球上の人民を公判することは、理の當然と思はるればなり、されば基督が大なる威嚴を以て天降り、世界中の萬民を東西南北より呼び集め、開闢以來の死者を墳墓の內より起して、公明なる一大審判を行ふべき地は、審判に因みありと云ふヨザファットの谷なりと信ずるも不可なきが如し、公審判の光景は基督備さに之を說ける如くなれど、尙之を反覆して解說すれば、其時に當りては、民起りて民を攻め、國起りて國を攻め、世亂れて戰爭止む時なく、餓孚は道途に滿ち、疫病は天下に流行し、震災は到る處に起るべしと云ふ、多くの人々基督の名を冒して、我はキリストなりと稱しつゝ、幾萬の生靈を欺くべく、窘逐迫害四方に行はれて、天下の人々皆基督敎者を苦め、彼等を殺すべし、彼等は基督の名の爲に萬民の憎惡を受くべし、實に此の如き患難は、開闢以來有りたる例なかるべしとぞ、若しその日數ながびかば、天下の人一人も救濟せられざるべけれども、幸ひ神は選拔せられたる善人聖人の爲に其の日數をちゞむべしと云ふ、

アンテキリストの出現

其時人ありて基督敎者に語り、基督彼處に在り、此處に在りと云ふも、輕々之を信ずべきにあらずとて、基督は豫め斯く戒めたり、『我誠に爾等に告ぐ、基督野に在りと云ふも、出づる勿れ、室に居ると云ふも信ずる勿れ、蓋し僞基督、僞預言者四方に起りて、天下の人々を欺かんが爲め、或は黃金を以てし、或は脅迫を以てし、或は奇蹟を以てし、能ふべくんば選拔せられたる者をも誘はんと謀るべければなり』と、傳に曰ふ、右等の僞預言者の中にアンテ、キリストなる者バビロンより起りて、基督に反抗せんが爲めに、種々の奇異を行ひ、自ら神なりと稱して、殿堂に坐し、天下萬民の尊拜を得んが爲めに、基督の信徒をも欺き、不思議なる業もて迷はす能はざる者には、封土爵位の恩を以て之を誘ひ、封土爵位の誘ふ能はざる者は、刀鋸斧鉞の威を以て之を嚇し、生殺與奪の權を天下に逞うすべし、されど其時エリヤスとエノクと云ふ二人の預言者天降り、言行（ことはしわざ）を以て、基督に對する信仰を堅むべ

ければ、基督の弟子も是に由りて大に慰安と生氣とを復すべしと云ふ、嗚呼是れ實に公審判の世に近づきたる當時の凶兆なり、偖其の愈々眼前に迫まるに當りては、基督の備さに說けるが如く、日は晦み、月は光を失ひ、星は天より墜ち、山崩れ、海鳴り、地震ひ、所謂天地も爲に震動し、萬物も爲に號泣するの慘狀を呈し、同時に、人の子基督は、電の東より出でゝ西に閃めくが如く顯はれ、大なる光榮と恐ろしき權威を以て、無數の天使を引率し、雲霧に乘じて天降り、極天極地に徹する喇叭の響と共に、開闢以來の死者を墳墓の內より呼び起し、過去現在の蒸民を一場に聚め、赫々たる十字架の空間に炳射せる處、無上至尊の法官の資格を以て、威嚴隆々たる坐に就きて之を詰問し、之を審判し、裁斷嚴明、細大遺漏する所なかるべしと云ふ。

善人惡人の判別

裁判の事を記す前に、吾人の注意すべき事一つあり、善人と惡人とを判別する事即ち是なり。

基督が光榮に乘じて、諸(もろ)の天使と偕に降り、その光榮の位に坐して、萬民を其前に集め、善人と惡人とを區別することは、基督嘗て語りたるが如く、宛も牧者の綿羊と山羊とを別くるが如く、農夫の麥と燕麥とを別くるが如く、漁夫の佳魚と雜魚とを別くるが如しと云ふ、偖今眼を放つて世の狀態を視るに、實に怪訝に堪へざるものあり、何となれば此世に在りては善も惡も、義も不義も、無理も道理も、相共に混同錯雜しつゝあるの觀あり、否、甚しきは義却つて不義とせられ、道理却つて無理と思はるゝなど、宛然善惡顚倒の觀なきにあらず、試に視よ、惡人は時を得顏に、往々榮曜榮華の夢を結び居るに引き換へて、善人は却て轗軻落魄して、貧苦艱難の裡に一生を送り、罪人が往々無病息災にして、椿年の長壽を保ち居るに引換へて、義人は却て病魔に冒されて、身の弱きをかこち、時に芝蘭の才空しく夭折の歎あり、苦むべき者樂みて、樂むべき者却て苦み、敬はるべき者輕んせられて、輕んせらるべき者寧ろ敬はれ、賞せらるべき者罰せられて、罰せらるべき者却て賞せらる等、何れか是、何れか非なるやを知る能はず、彼の有名なる史家司馬遷が、天道是か非かと嘆じたるは蓋し之が爲なり、其言に曰く、伯夷叔齊は善人と謂ふべし、德を積み行を潔ふすること此の如し、然れども其の終は首陽山に饑死せり、孔子の弟子七十人の中、夫子は獨り顏回を薦めて學を好む者とす、然れども回や屢々

玉石混同の現狀

空しく、糟糠だも厭く能はざりき、加之ならず竟には不幸短命にして死せり、之に引き替へて、彼の盜路の如きは、日に不幸のものを殺し、人の肉を肝にし、暴逆無道至らざる所なく、黨を聚むること數千人、天下に横行濶歩す、然れども彼は遂に天然の壽を保ちて終れり、近世に至りても行不法にして屢々法を犯す者が、身を終ふるまで逸樂富貴を極め、却て行を慎み、言を謹みて正直一途の人が忽然禍災に罹ることありとて、司馬遷は古今の善人惡人を一場に引き來りて、之を對照しつつ、叫んで曰く、嗚呼天道果して是なる耶非なる耶と、實に是は世上今日の狀態なりとす、然れども今は暫く天道の是非を論ずるを休めよ、是非は棺を覆ふて後に定まり、善惡は公審判の曉に決するものなり、尙眼を轉じて、聖と銘をうてる基督教會を視るも、往々亦此の如し、善人あり、惡人あり、傲慢なる者もあれば、謙遜なる者もあり、短慮なるものもあれば、柔和なる者もあり、潔白なる人と不潔なる人と居を同ふし、貪慾なる者と慈善なる者と席を共にする等、此處にも玉石同架、善惡混同の觀あり、諸をノエの方舟に譬ふれば、鳳鳥と猛獸と室を同ふすとや謂ふ可く、諸を田野に譬ふれば、麥と燕麥と生育を共にすとや謂ふべく、諸を魚取る網に

天道是か非かの嘆

基督教會の現狀

譬ふれば、佳魚と雜魚と網を同ふすとや謂ふべく、又諸を牧場に譬ふれば、綿羊と山羊と群を一にすとや謂ふ可き、あゝ是れ實に地上今日の現況なりとす。

然れども一たび公審判の曉となるや、世の現況の何故此の如くなるやは、明に知るを得べし、即ち公平無私なる法官は、公明正大なる裁判を以て、善人と惡人とを左右に區別して、義は義、不義は不義、理は理、不理は不理と、劃然たる區別を立つべければ、此時初めて天道是か非かの疑團は、釋然氷解して、榮曜榮華の夢を結びたる惡人が幸福なるか、或は貧苦艱難の生を送りたる善人が幸福なるか、或は又無病息災にして長生したる罪人が仕合なるか、當眼の事實によりて明に證明せらるゝに至るべし、神は乃ち此の事實によりて、惡人の寸善(蓋し如何なる惡人と雖、善なる所あるべければ)に酬ゆるに、此世の榮曜歡樂を以てし、善人の寸惡(同じく善人と雖、惡なる所なくんばあらず)に報ゆるに、此世の貧苦艱難を以てしたる公義なる攝理の在る所を知らるゝが故に、茲に初めて神の一善酬ゐざる所なく、一惡罰せざる所なきの道理は、一目の下に瞭然となりて、神が此世の貧苦艱難を以て罰したるは、唯だの一惡なりとも天國に入るの妨となるが爲なる事、又此世の

至公至義なる裁判

寸善酬ゐられざるなく寸惡罰せられざるなし

榮曜歡樂を以て賞したるは、唯だの一善と雖も地獄に墜つるを容さゞるが爲なる事が、皆明に理會せらるべし、果して然りとせば、天は飽迄も公義なるものなり畢竟天道是か非かの嘆は、天の公義を知らざる學者の嘆のみ。

世上の狀態既に斯の如く決定せられたらば、基督敎會の現況は如何、曰く牧者の綿羊と山羊とを左右に別くるが如く、善人を右に、惡人を左に別つべし、漁夫の佳魚と惡魚とを取捨するが如く、聖人を上に迎へ、罪人を下に投ずべし、農夫の麥を倉に藏め、燕麥を火に投ずるが如く、善き信者を天國の倉に藏め、惡しき信者を地獄の火に投ずべし、即ち此時右の方に立ち顯はるべき者を擧ぐれば、聖母マリアは他の夥多の童貞聖女と共に、信者の祖先アブラハムは、他の舊約時代の諸聖人と共に、ダヴィド王は他の聖王と共に、イザイヤスは他の預言者と共に、ペートルスは他の使徒と共に、ステファヌス、及びマルチヌスは他の殉敎聖者と共に、アントニウス、パウルスは他の修道者と共に、蓋し是等は皆昔日神の爲に身を献げて、天國の爲に世を忘れ、基督の爲に命を擲ち、福音の爲に血を流して、千難萬艱の中に、偉德を積み大功を樹てたる聖人聖女なれば、今やその德行の報賞を享受せんが爲

古來の聖者一場に立顯はる

め、右の方に立ちて順次相列するものにして、洵に義の當然と謂ふ可し、加旃ならず、聖者グレゴリウスの言によるときは、其時、身使徒となり、宣敎師となりて、海外に基督敎を布かん爲、父母兄弟親族に別れて、萬里の波濤を越え、異鄕の土に歸したる者は、各其の己れの歸順せしめたる國土の信徒と共に、右の方に立ち顯はるるとの事なれば、ペートルスはユデアの敎民と共に、アンドレヤスはアカイヤの敎民と共に、ヨアンネスは小亞細亞の敎民と共に、トマスは印度の敎民と共に、又今より三百有餘年前、身第二の使徒となりて、基督敎を我日本國に傳播したる聖者フランシスクス、ザベリウスは、長崎に於て神の爲に一身を鴻毛の輕きに比したる殉敎聖者と共に、右の方に立ち顯はるべし、之に反して、左の方に置かるゝ者如何と云ふに、あゝ是れ實に言ふも悲しく、聞くも怖ろしき事なり、其時彼の酷くも骨肉の兄弟を殺したるカインは、他の殺人者と共に、主基督を敵手に渡したるユダスは、他の忘恩反逆の徒と共に、ピラトは不義不正なる裁判官と共に、ヘロデスは殘逆無道の惡王と共に、シモンは他の異端邪說を唱へたる輩と共に、ゼザベルは他の驕奢淫逸に耽りたる徒と共に、みな相並んで左の方に置かるべし、而し

古來の惡人十把一束一場に置かる

惡人當時の悔恨果して如何ぞや

て是等の一味の徒輩は、聖者オグスチヌスの言に據るときは、永苦の猛火の薪として、同類のもの十把一束にせらるべしと云へば、傲慢なる者は傲慢なる者と、貪慾なる者は貪慾なる者と、淫亂なる者は淫亂なる者と皆一緒にたばねらるべし、嗚呼若し是等の徒輩にして、省て我身其時の現狀を視、仰て右方に列せる善人聖人の光榮を瞻るならば、其殘念其無念果して如何ぞや、況んや己れ嘗て世上に於て嘲笑罵詈したる者を其等の聖人善人の中に見るに於てをや、想ひ起す、善惡正邪の斯の如く區劃せらるゝときに當りて、恩愛の情深き父子、琴瑟相和したる夫婦、血肉を頒ちたる兄弟姉妹等が、永く左右に相分れて、一別再會を期すべからざることを思ふ時の心情、果して如何なるべき、若し夫れ、嘗て此世に在るや、人々より貴顯と崇められ、富豪と稱せられて、出づるに肥馬輕車あり、入るに金殿玉樓あり、口には珍膳佳肴に飽き、身には綺羅錦繡を穿ちて、食飲方丈、侍妾數百人、貴富を一身に極めたる者が、今や左方の惡人と伍せられて、其嘗つて己れの使役したる臣僕奴婢が、却つて右方の聖人善人の列に加はりて、無上の光榮慶福を享けつゝあらんとする現狀を見る時の失望落膽に至りてや、蓋言ふべからざるものあらん。

公審判の裁判

嗚呼夫れ、善人惡人の斯の如く區分せらるゝことを見るも、既に悚然たらざるを得ず、況んや吾人の心情行爲悉く摘發せられて、逐一嚴明なる裁斷に懸けらるゝを見るに於てをや、其時基督は何をか裁判する、曰く、

罪惡の裁判

(一)吾人の罪惡を裁判す　罪に三種あり、思念の罪、言語の罪、行爲の罪、是なり公審判の曉には是等の罪一々裁判せらる、淫猥邪僻の心、不淨不潔の念、不義不正の計畫等、是皆思念の罪なり、是等は公審判の曉に悉く摘發暴露せられて、吾人に一大羞辱を與るものなり、今や人々相共に思念を見るを得ざるが故に、心中密かに犯しつゝある罪には餘り重きを置かざれども、若しも人々がその心腸の汚念を洞見せらるを得るとせば、その羞辱果して如何ぞや、必ずや人間と云ふは不淨の動物なりと言ふなるべし、然るに公審判の曉に至りては、心中の密念悉く赤裸々となりて、世界萬民の面前に白晝瞭然たるべし、人間腐敗の弱點、此に於て乎隱さんと欲するも能はざるなり、次に言語の罪、淫言、慢語、異論、邪說より、虛言、誣言、讒言、罵言、誹謗等に至るまで、其の大小輕重一々衡量せられんとす、蓋是等の罪は神の尊

嚴を冒瀆し、世道人心を誤らしめて、他人の名聲評判等を毀損すると鮮からざるが故に、其度に應じて一々公審判の資料となるべし、思ふて茲に到れば、誰か口を緘し、舌を卷いて沈默を守らざらんや、口は實に禍の門なればなり、次に又行爲の罪審判せらるべし、罪は思念に始まりて行爲に終るものなれば、行爲の罪は最も重大なるものなり、蓋し思念の罪は其害往々己れ一身に止まるものなれども、行爲の上に發する罪に至りては、己れ一身のみに止まらず、延て他人をも禍するものなり、若し此罪を犯す者が上に位するときは、其禍は尙ほ一層影響を及ぼすものなり、公審判の曉には是等の罪も亦皆裁判せらるべし、是を以て如何程他人を惡に誘導する手本となりたるか、又如何程他人を失墜せしむる機會となりたるかやの事までも、皆裁判の種となるべし、嗚呼神と天使との面前に、世界萬民の齊しく視線を集めて具瞻する處に於て、餘事を打忘れて一念罪惡のみに懸れる罪人が『爾禍なるかな』てう良心の痛き刺激の下に、思、言、行の罪惡が逐一嚴明なる審判を受くる當時の狀果して如何ぞや、平身低頭、毛髮悚然、敢て仰ぎ視ることすらも得ざるべし、此時內外四邊、皆己れを責罰するの具とならざるものなけん、惡人の心眞に慘絕悲絕。

吾人の善德の裁判

(二)吾人の善德を裁判す　善德を裁判するの語は一見奇怪なるが如くなれども、仔細に熟考すれよ、吾人の善行も亦名聲利慾等の爲に、往々腐蝕し居るものなり、名聲と利慾とを除き去らば、吾人の善德或は皆無に歸せんも測り難し、良し正義を目的として行ひたるものとするも、名利の蟲は知らず識らずの裡に吾人の善行を腐蝕しつゝあるが故に、その腐蝕の缺點を排除して、純然たる善の部分のみを掬ふに至る時は、僅々一撮に過ぎざるべし、若しそれ善德を行ふに當りて誠實を缺き、熱愛を缺きて、冷淡、怠慢、無心、等閑等の爲に善德の價値を減少したるものを指摘せらるゝに至りては、善德によつて却つて忸怩たるが如きことあるならん、而して公審判の曉には、唯だ善德にのみ報賞するの時なるを以て、是等の事も亦皆裁判に上るや明なり、嗚呼善德までも斯の如く審判せらるゝとは、豈に恐れても怖れざるべけんや。

叨にしたる恩寵の裁判

(三)吾人の叨にしたる恩寵に就て裁判す　神の恩寵に種々あり、神が吾人を造出せざるべからずと云ふ必要もなく、又吾人を造出して己に利益ありと云ふこと

もなきに、唯々吾人を造り出さんと云ふ大御心を以て、無何有の鄕より、然り、彼の微々たる『アトーム』すらなき處より、斯く『有なる』我々を造り出し、剩へ自己の肖像を印して、知惠分別自由なる尊き人間となし、之を萬物の靈長として、輪奐たる此天地の家に住はしめたる事は、是れ實に造出の恩寵として深く感銘せざるべからざるものなり、去れど神は一たび造出しても、もしも手を離して、吾人を天涯寄邊なき身となすときには、恐くば一時一分も此世に生存することを得ざるべし、

造出の恩

是に於て乎、主宰の恩寵あり、即ち吾人を成長せしめんが爲には、父母恩愛の情を以て撫育せしむるのみならず、吾人の爲には殆ど萬事を賦與すと云ふべし、先づ御側に侍べる天使を與へて、吾人の一生を守護せしむるを初めとし、凡そ此天地間に有ると有らゆるものは皆是れ吾人の生命を保存せしめんが爲に與へたるものなり、天に輝く日星、空飛ぶ禽鳥、河に泳ぐ魚鼈、地に奔る獸畜、田野に生ずる草菜、庭園に咲く花木、何れか是れ主宰の恩寵たらざらん、若も父母生育の恩を以て大なりとせば、神の斯恩果して如何ぞや、然るに忘恩の人間は、斯恩を忘却して、而かもその恩主の誡命を破りつゝあり、若も古よりこの度毎に神が義に由つて裁

主宰の恩

判したらんには、『無』より造出せられたる吾人は、亦皆元の『無』に歸すべかりしならん、然れども神の仁愛は廣大無邊なり、誡命を破りたる吾人に對して、益々恩寵を加ふるに至りたり、即ち造出の恩寵を垂れ、主宰の恩寵を與へつゝある神は、己の獨子を人間界に降誕せしめて以て、救世の大恩寵を下さしむるに至れり、是に至りて恩寵も亦極まれりと謂ふ可し、萬能の神は吾人の爲、而も忘恩なる吾人の爲、基督を厩の內に降誕せしめたる事、嗚呼是れ實に吾人の想像することだも得ざる所なり、今玆に威權隆々たる大王ありとせん、偶々其の臣下の者共反逆を企て王の尊嚴を冒瀆したるに當り、王自ら臣下の己れに對して犯したる罪を償はんが爲に、袞衣を脫して臣下の社會に下りたりとせば、その仁愛果して如何ぞや、然るに神の吾人に對する仁愛は、此の如き比にあらざるなり、請ふ仔細に考へよ神は萬能なりと云へば、御子を降誕せしむるに至らざるも唯だの一言を以て、吾人の罪を償ふことを得たるは、言を待たず、此は彼の天地を創造したる時一言を以て之を現出せしめたりと云ふに徵して知る可し、然るに今や吾人を救ふに當り、唯だの一言を以てせずして、故さら御子に人骸を受けて降誕せしめたるなり、

救世の恩

良し降誕せしめたるも、一滴の涙、若くは一滴の血能く世界中の萬民を救ふを得たるに、故さら極刑に就てあらゆる艱難を嘗め盡さしめぬ、その苦難の如何程大なりしかは、基督が彼のセヅマニヤの森に唯だ豫想したるのみにて、既に血の汗を絞るに至りたりと云ふを見ても知るべし、而して是れ忘恩なる吾人の罪の爲なるを想ふに至れば、我ながら我に對して怒らざるを得ざるものあるなり、救世の恩は實に吾人の意料外に出づ、拙筆焉ぞ之を記することを得んや、救主の恩は斯の如く大なりと雖、若も之を人々個々に分ち與ふる者なきときは、大恩も遂に無に歸する憂あるが故に、尚茲に教會なるものを創立して、吾人を眞誠の道に引き、教訓、誡命、秘蹟等の方法を設けて、吾人の救靈に殆んと遺漏なからしめたり、若し此道に從ふあらば、天堂に至ることを得るは必定なり、されば此恩亦是れ前記の恩に讓らざるなり、尚進んで恩寵の細目に至るときは、吾人の靈魂、肉身、知識、健康よりして、各人の位階及び職業に應じて降るところの恩惠は、一々枚擧に遑あらず、實に頭上一本の髮と雖、皆是れ神の恩寵ならざるはなし、基督曰く、『吾人は受けざる所のもの一をも有せず』と、然り、皆神より受けたるもの而已、嗚呼神の鴻恩、

教會の恩及び其他

山嶽も以て高しとするに足らず、河海も以て深しとするに足らず、然れども能く此の鴻恩を思ふて感謝するもの、天下幾人かある、誰か造出の恩を考ふる者ぞ、誰か主宰の恩を覺ゆる者ぞ、基督は吾人の爲に身命を犧牲に供したり然れども、吾人は曾てその苦難の一端をも思ひ出すことなし、況や正道に導きたる恩寵をや況や吾人の心身に日々受くる所の恩惠をや、然れども記せよ忘恩はいつまでも此の如く續くものにあらず、春去り夏過ぎて秋到り冬來る、仁愛至れり盡せる後に必ずや義怒之に次くべし、然り、公審判の時には、忘恩の汰沙は一々嚴明なる應報を受くべし、嗚呼其時神は基督を以て吾人を眼前に招致せしめて、『我れ爾を無きより造れり、然れども爾曾て之を考へたることなし、我れ爾の生命を保持せんが爲に萬事を與へたり、然れども爾我に一たびも恩謝の意を表したることなし、我れ爾の爲に基督を降して、苦み且死せしむ、請ふ來りて其手を視よ、其胸を視よ、彼の疵は皆爾の爲に受けたるものならずや、爾之を念ひたるや』と指し示しつゝ詰問するに至りては、山海の鴻恩に狎れたる吾人、曷ぞ愧死せざるを得んや、故に曰ふ、恩寵の裁判も亦是れ吾人の一大苦痛たるべし。

公審判の宣告

嗚呼公審判の曉に當り、吾人心中の罪惡、他人の見聞を憚りたる罪惡、我心を欺て強て曲けんことを欲したる罪惡、我之を思ふだも忸怩に堪へざる罪惡等、悉く世界萬民の面前に顯はれ、瞭として日を睹るが如くなると同時に、善德の缺點に付き、恩寵の忘却に付きて、一々嚴明なる裁判を受くるに至るあらば、吾人の慙愧昏迷果して如何ぞや、必ずや驚愕、震慄、狂亂に堪へずして、空しく責罰の身に加はるを待ち、希望に由なく、改遷に道なきを見て、大聲號泣して將に叫ばんとす、『山嶽速に崩れて頭上に落ちよ、岩石疾く轉びて我が身骨を碎けよ』と。

善惡正邪の裁判既に了り、是より將に善人惡人の運命を裁決せんとするに當りて、愈々最終永遠の宣告下らんとす、そも此の宣告たるや、一たび無上至尊の法官の口より出れば、二度と再び控訴回復の道なきものなり、善人に取りては無上の光榮たるべけれど、惡人に取りては無限の羞辱たるべし、借問す、其最終永遠の宣告は如何？基督の備に語りたるが如く、無上至尊の法官は此時和氣藹然として、右に列せる善人に向つて曰はん、『爾等吾父の愛子よ、前んで創世以來爾等の爲に設けられたる天國に入れ、何となれば、我れ嘗て饑たる時、爾等我に食物を與へたり、我れ嘗て渴きたる時、爾等我に飲物を與へたり、旅せる時、我を宿し、裸なる時、我に衣せ、病めるとき、我を慰め、獄に在るとき、我を見舞ひたり』と、言未だ畢らざるに、右方の列聖は最早憂苦き現せ世より、幸福なる天に上げられ、涙の谷より此上なきシオン山に導かるゝを喜びつゝも、至尊の今仰せらる御言葉に合點晴れ遣らず、世に於ては聖主基督の饑渴貧苦を見て、飲食衣服を差進めたる覺えなきに、斯く仰せらるゝは何故なるかと、異口同音に至尊に奏上して曰く、『聖主よ、我等何時主の饑ゆるを見て食せしめ奉り、渴するを見て飲ましめ奉りしや、何時主の旅するを見て宿しまゐらせ、裸なるを見て衣せまゐらせしや、何時御身の病に罹り、獄に在るを見て、慰安し奉りしや』と問へば、聖主基督は、聖人が此世に於て貧苦艱難せる人々に對して成したる事は、皆自身に對して成したると同じと、そを打明して仰せらるゝやう、『否とよ、爾等が我兄弟の至微の一に行ひたることは、則ち我に行ひたるものなり』と、嗚呼此の言を聞く列聖の喜悅果して如何ぞや、之に反して左方の惡人は、今聖人に仰せらるゝ言を聞き居るさへ心苦しきに、基督が嚴然たる顏色を以て、『嗚呼爾等禍なる者よ、我を離れて、魔鬼及び其使の爲に備へられた

る永苦の猛火に入れ、蓋我れ飢ゆるも、爾等食せしめず、渴するも、飲ましめず、旅するも、宿せず、裸なるも、衣せず、病に臥するも、獄に在るも顧みざりき』と言へば、彼等は應へて曰はんとす『主よ、我等何時主の飢ゑ、渴き、旅し、裸體となり、病み且獄に在いますを見て、主に奉仕せざることありしや』と問ふや、基督は『我れ誠に爾等に告ぐ、既に之を此の至微の一に行はざるは、即ち是れ我に行はざるなり』と云ふ語を耳にするときには、行く〳〵我身の前途を豫想して、如何に失望落膽するや實に測り知る可からざるべし、實際右の數言の裡には地獄の苦罰は充分含蓄せらるゝものなり、先づ『禍なる者よ』と云ふ、それ設ひ我身の罪業の爲に、神の尊前を離れて、地獄に墜る身となるも、一言基督の愛憐に接するあらば、心に幾分の慰藉を覺ゆるならんに、『禍なる哉』てう咀呪の言葉と共に、神の面前を退けらるゝに至りては、忍んで忍ばれざる所なるべし、次に『我を去れ』と云ふ、個は是れ神學者の所謂損失の苦罰と云ふものにして、地獄の眞の苦みは實に茲に在り、神は萬能なるものなり、故に神を有する者は、他に有せんと欲するの意起るとなし、神は全知なるものなり、故に之を知る者は、他に知らんと欲する物あるなし、神は又善なるものなり、故

地獄の苦罰の性質

に之を樂む者は、他に樂まんと欲する望を生ずるを得ず、然るに今や『我を去れ』の一言によりて、此の如く吾人の意望知識を滿足せしむる全能全知全善なる者を失はざる可からず、是れその苦痛とする所以なり、吾人此世に於て親愛する所の親を失ふときは、悲哀極りなし、珍重する所の寶貨を失ふときは、失望此上なし、而るを況んや眞善美の源なる神を失ふに於てをや、又次に『永苦の猛火に入れ』と云ふ、神學者は之を稱して感觸の苦罰と云ふ、吾人の五感に受くる苦みなればなり、五感に受くる苦みの中最も激烈なるものは、蓋し火を以て第一とす、故に地獄には宜しく此火なかるべからず、然るに今や『永苦の猛火に入れ』の語によりて、此の猛烈なる火中に投せらるゝものなり、夫れ吾人此世に在りて、熱病に罹ると雖、煩悶に堪へず、指一本烈火の上に置くも、苦痛忍ぶべからず、然らば則ち猛烈なる永遠の火の中に全身を投せらるゝときは、果して如何ぞや、嗚呼此は是れ今日之を豫想するだも、尙且毛髮悚然たらざるを得ず、況んや實際之を身に受くるに於てをや、此火も消する期ありとせば、尙ほ忍ぶべし、永久消ゆる期なしと云ふに至りては、是れ實に忍びても忍ばれざる所なり、今日之を耳にするだも、不覺冷汗腋下

感觸の苦罰

天堂の門と地獄の口

に下るに、『永苦の猛火に入れ』と云ふときには、即ち此の永久消ゆる期のなき火中に入らざるべからざるものなり、惡人當時の苦痛想ひ遣るだにあはれなり。

それ斯の如く善人惡人に對して宣告をなし畢るや、一方に於ては天國の門開け、他の一方には地獄深き口を開きつゝあるを以て、無上至尊の法官は直に善人を伴ひ、凱歌を奏して天門に入るに引換へて、惡人をば永苦の猛火の中に投じて、信賞必罰の義を永遠無窮に彰表せんとす、事茲に至りては、『永く、決して』の二事永久惡人の觀念に上るべし、即ち永く魔鬼と共に、永く地獄の内に、永く涕泣し、永く切齒し、永く苦吟し、永く狂亂し、永く失望し……決して希望の光を見ることなく、決して慰安を受くることなけん、然れども此の『永く、決して』の二事は善人に取りては其が永遠の樂みとなるべし、永く神の御側に、永く天上の榮域に、永く歡喜し、永く談笑し、永く滿足し、永く行樂し……決して恐るゝ所なく、決して悲む所なく、決して號泣することなけん、嗚呼世上の苦樂は一時、來世の賞罰は永遠なり、請ふ深く之を心肝に銘じて忘るゝ勿れ。

公審判の吾人に與ふる感化

以上記し來りたる所を見れば、公審判の吾人の心に與ふる感化は、喋々の辯を要せずして瞭かなり、吾人が今日蜉蝣の生を此の天地に寄せつゝ、日夜一時の事をのみ是れ念ひ、一時の事にのみ是れ屈托す、勞するも一時、生くるも亦一時なるに、柳巷花街に高歌放吟して、管絃日夜遊宴に耽りつゝ、毫も恐懼する所なきが如きは、是れ豈異日公審判の曉に如何なる應報を見るやを思はざるが爲ならずや、若しそれ公審判の狀況を日夜眼前に想望して、日光隱れて晝冥々、月色慘憺として夜蕭條、星晨交々相衝突して穹蒼より墜ち、天地晦冥にして咫尺を辨ぜず、坤輿爲に震ひ、地軸爲に動きて、その震動を普く天下の人心に及ぼし、海洋爲に鳴り、波浪爲に怒りて、千軍萬馬の狂奔するが如く、日ならずして天地萬物混亂し、悲鳴し、震慄して危急滅亡の秋來り、復仇の烈火、神の嚴怒の吹氣に煽られて、大地の中心より噴き出し、曠漠たる此世界と蒸々たる斯民とを灰塵に委すべき事を思はゞ、誰か身を持する今日の如くならんや、誰か生を樂む今日の如くならん、然り必ずや豪華熱鬪の地も忽ち變じて寂漠荒蕪の野となり、管絃も聲を絶ち、劇場も寂として人の入るなきに至らんとす、之に引換へて、聖堂に參拜する者は雲霞の如く、祭壇の周圍は人の山を築き、告白場外の如きは、

ヒロニムスと公審判

立錐の餘地をも遺さゞるに至らんとす、公審判の當時の狀況を觀想するだに、斯の如き影響を世界人心に及ぼすとせば、罪惡、善德、恩寵に就て、逐一嚴明なる裁判ありたる後、一決回復することを得ざる最終永遠の宣告あることを想起するときは、その影響する所果して如何ぞや。

著者は茲に一の史談を掲げて、公審判の記事を結ばんとす。

基督敎會諸聖の中に嚴酷なる懺悔を以て名ある者を擧ぐれば、人は必ず先づ指を聖者ヒロニムスに屈す、聖者塵世の紛擾を惡み、羅馬の華奢を厭ひ、遠く身を引てパレスチナに來り、寂漠人なきの野に潛みて、罪を悔ひ、慾を制し、冷酷以て身を遇し、嚴正以て己を持し、精行苦業到らざる處なく、屢々手に石を採りて、胸を打ち、滿身流血淋漓たるに至りたりと云ふ、然れども猶ほ常に戰々恟々として、造次顚沛にも公審判の事を忘れざりしとぞ、その遠く想ひ深く考ふるに當りては、不覺震慄驚愕して叫んで曰く、『喇叭を吹て萬民を法廷に召致するの響、遙に吾耳朶に聞ゆ、神が赫として怒り、我を裁判するを想起する毎に吾心戰々恟々として須臾も安んずる能はず』と聖者は斯く日夜公審判の事を念ひ、公審判の事を恐れて、悠々たる其一生を正しく送れりと云ふ、吾人たるもの、若し聖者の心を以て心となさば、庶幾くは魔鬼の誘惑も入るに道なく、不淨の念慮も起るに由なけん。

眞福八端

(13)山上の垂訓

(A)眞福八端　或日基督は人民の多くむらがり來れるを見て、山に登り座せしに、その門弟等も之に近きしかば、基督は目をあげて彼等を見、徐に口を開き、萬古味ふべき聖訓を垂れたり、その聖訓に曰く、

心貧しき者は福なり、天國は即ち其の所有なればなり。

溫和なる者は福なり、地を得べければなり。

泣く者は福なり、慰を得べければなり。

正義を渴望する者は福なり、飽くことを得べければなり。

矜恤ある者は福なり、矜恤を得べければなり。

心の清き者は福なり、神の子と稱せらるべければなり。

義の爲に迫害せらるゝ者は福なり、天國は即ち其の所有なればなり。

人若し我の爲に爾等を詛ひ、爾等を迫害し、又爾等に對して各種の惡言を吐かば、

爾等は福なり欣喜雀躍せよ、爾等の報賞天にゆたかなればなり、爾等より以前の預言者も亦此の如く苦められたり。

門弟の職責

(B)門弟の職責　爾等は地の鹽なり、鹽若し其味を失はゞ何を以て元の味に復せんや、己に無用となれば、外に棄てられて人に踏まるゝより外なし。

爾等は世の光なり、山巔に建てられたる城は隱るゝことを得ず、燈火を點じて桝の下に置く者なし、家に在る一切の物を照すが爲に之を燭臺に置くべし、爾等の光も此の如く人々の前に輝かさゞるべからず、されば人々爾等の善行を見て、天に在す爾等の父に光榮を歸すべし。

信徒の德義

(C)信徒の德義　我れ律法と預言者を廢するが爲に來れり、意ふ勿れ、我は之を廢せんが爲に來れるにあらず、成就せんが爲なり、我れ誠に爾等に告ぐ、天地盡きざる中に律法の一點一畫も遂げられずして廢ることなけん、是故に人若し、誡の至微き一を壞り又は之を人に敎ふる者あらば、天國に於て至微き者と謂はれん、然れども之を行ひ且之を人に敎ふる者は、天國に於て大なる者と謂はるべし、我爾等に告ぐ、爾等の正義は學者及びファリゼイ人のそれよりも優れざれば、天國に入ること能はず。

昔は『殺す勿れ、殺す者は審判に處せらるべし』と言へることありしは、爾等の聞きし所なり、されど我は爾等に告ぐ、凡て故なくして兄弟に憤る者は、審判に處せらるべし、又兄弟を愚者よと言ふ者あらば、集議に附せられん、又之を狂人呼はりする者は火刑に處せらるべし、故に爾等若し禮物を祭壇に献ぐるとき、兄弟より怨まるゝことあるを想出さば、その禮物を祭壇の前に置き、先づ往きて爾の兄弟と和睦し、而る後來りて爾の禮物を献ぐべし、爾等敵と偕に途上にある時はやく之と和睦せよ、恐くは敵爾等を審官に付し、審官また爾等を下吏に付し、遂に爾等を獄に鎖さんことを、我まことに爾等に告ぐ、分釐までも償はざれば、必ず其處を出ること能はざるなり。

古の人に告て、姦淫すること勿と言へることあるは、爾等が聞へし所なり、然ど我爾曹に告げん、凡そ婦を見て色情を起す者は、中心すでに姦淫したるなり、もし右の眼なんぢを罪に陷さば、抉出して之を棄てよ、五體の一を失ふは、全身を地獄に投入らるゝより勝れり、もし右の手なんぢを罪に陷さば、之を斷て棄てよ、五體の一を

失ふは、全身を地獄に投入らるゝよりは勝れり。

又曰へることあり、凡そ人その妻を出さんとせば、之に離縁狀を與ふべしと、然ど我爾等に告げん、姦淫の故ならで、其妻を出す者は、之に姦淫なさしむるなり、又出されたる婦を娶る者も、姦淫を行ふなり。

又古の人に告げて、僞の誓を立ること勿れ、爾誓ふ所は、必ず主に遂べしと言へること有は、爾等が聞きし所なり、然ど我なんぢらに告ぐ、更に誓ふこと勿れ、天を指て誓ふ勿れ、是神の座位なればなり、地を指て誓ふと勿れ、これ神の足臺なればなり、イエルサレムを指て誓ふ勿れ、これ大王の京城なればなり、爾の首を指て誓ふ勿れ、そは一すぢの髪だに白し黑すること能はざればなり、爾等たゞ是々否々といへ、此より過るは、惡より出づるなり。

目にて目を償ひ、齒にて齒を償へと言へると有は、爾等の聞きし所なり、されど我爾曹に告ぐ、惡に敵すること勿れ、人なんぢの右の頰を批ば、亦ほかの頰をも轉じて之に向よ、爾を訟て裏衣を取んとする者には、外服をも亦とらせよ、人なんぢに一里の公役を強なば、之と偕に二里ゆけ、爾に求むる者には與へ、借らんとする者を卻る勿れ。

爾の隣を愛みて、其敵を憾べしと言へると有るは、爾等が聞きし所なり、されど我爾曹に告ぐ、爾等の敵を愛み、爾等を詛ふ者を祝し、爾等を憎む者を善視し、虐遇迫害ものゝ爲に祈禱せよ、如此するは、天に在す爾等の父の子とならん爲なり、夫れ天の父は其日を善者にも惡者にも照し、雨を義き者にも義からざる者にも降し給へり、爾等おのれを愛する者を愛するは、何の報賞かあらん、稅吏も然せざらんや、安否を兄弟にのみ問ふは、人より何の過たる事あらん、稅吏も然せざらんや、是故に天に在す爾等の父の完全が如く、爾等も完全すべし。

行德の志向

(D)行德の志向附主禱文　なんぢら人に見せん爲に、其義を人の前に行ことを慎め、もし然ずば、天に在す爾等の父より報賞を得じ、是故に施濟を行とき、人の榮を得ん爲に、會堂や街衢にて僞善者の如く、瓠を己が前に吹かしむる勿れ、我誠に爾等に告ぐ、彼等は既にその報賞を得たり、なんぢ施濟をするとき、右の手の爲すことを左の手に知らする勿れ、如此するは、其の施濟の隱れんが爲なり、然れば隱れたるに鑒たまふ爾の父は、明顯に報ゐたまふべし。

主禱文

爾曹祈る時に僞善者の如くする勿れ、彼等は人に見られんが爲に、會堂や街衢の隅に立て祈ることを好む、われ誠に爾等に告ぐ、彼等は既にその報賞を得たり、なんぢら祈る時は嚴密なる室により、戸を閉て隱微たるに在す爾の父に祈れ、然らば隱微たるに鑒たまふ爾の父は、明顯に報たまふべし、爾等祈る時は、異邦人の如く重複語を言ふなかれ、彼等は言おほきを以て聽かれんと意へり、是故に彼等に效ふと勿れ、爾等の父に求ざる先に、其の需用物を知りたまへば也、然らば爾等かく祈るべし。

『天に在ます我等の父よ、願はくは御名の尊崇れんことを、御國の格らんことを、聖旨の天に行はるゝ如く地にも行はれんことを、我等の日用の糧を今日我等に與へ給へ、我等が人に赦す如く我等の罪を赦し給へ、我等を誘試に引き給はざれ、我等を惡より援ひ給へ、國と權と榮は爾の窮りなく有たまふ所なり、アーメン。』

爾等もし人の罪を免さば、天に在ます爾等の父も、亦なんぢらを免し給はん、然ども、若し人の罪を免さずば、爾等の父も爾等の罪を免し給はざるべし。

なんぢら斷食するとき、僞善者の如く憂容をする勿れ、彼等は斷食を人に見せん爲に、顏色を損ふ、我まことに爾等に告ぐ、彼等は既に其の報賞を得たり、なんぢ斷食する時は、首に膏をぬり、面を洗へ、如此するは爾の斷食人に見ずして、隱微たるに在す爾の父に現れんが爲なり、然らば隱微たるに鑒たまふ爾の父は、明顯に報たまふべし。

對財の心得

(E)對財の心得　蠹くひ、銹くさり、盜うがちて竊む所の地に、財を蓄ふること勿れ、蠹くひ、銹くさり、盜穿て竊ざる所の天に財を蓄ふべし、蓋なんぢらの財の在るところに、心も亦ある可ければ也。

身の光は目なり、若なんぢの目瞭かならば、全身も亦明なるべし、若なんぢの目眊らば、全身暗かるべし、是故に爾の中の光もし暗からば、其暗こと如何に大ならずや、人は二人の主に事ふると能はず、蓋これを惡み、かれを愛み、此を親み彼を疎べければ也、なんぢら神と財に兼事ること能はず、是故に我なんぢらに告ぐ、生命の爲に何を食ひ、何を飲み、また身體の爲に何を衣んと憂慮こと勿れ、生命は糧より優り、身體は衣よりも優れる者ならずや、なんぢら天空の鳥を見よ、稼ことなく、穡ことを爲ず、倉に蓄ふることなし、然るに爾等の天の父は之を養ひ給へり、爾之よ

りも大に勝るゝ者ならずや、爾等のうち誰か能おもひ煩ひて、其の生命を寸陰も延得んや、また何故に衣のことを思わづらふや、野の百合花は如何して長かを思へ、勞ず紡がざる也、われ爾來に告ぐ、ソロモンの榮華の極の時だにも、其裝この花の一に及ざりき、神は今日野に在て、明日爐に投入らるゝ草をも如此よそはせ給へば、況て爾等をや、嗚呼信仰うすき者よ、然らば何を食ひ、何を飲みなにを衣んと

對人の言動

て、思わづらふ勿れ、此みな異邦人の求むる者なり、爾等の天の父は、凡て此等の者の必需ことを知たまへり、爾等まづ神の國と其の義とを求めよ、然らば此等のものは皆なんぢらに加へらるべし、是故に明日の事を憂慮なかれ、明日は明日の事を思ひわづらへ、一日の苦勞は一日にて足る。

(F)對人の言動　人の罪を定むること勿れ、恐くは爾等も亦罪に定められん、爾等が人の罪を定むる如く、己が罪をも定められるべし、爾等が人を量ごとく、己も量らるべし、爾兄弟の目にある物屑を視て、己が目にある梁木を知ざるは何ぞや、己の目に梁木のあるに、如何で兄弟に對て、爾が目にある物屑を我に取せよと曰ふことを得んや、僞善者よ、先づ己の目より梁木をとれ、然らば兄弟の目より物屑を取り得るやう明に見べし、犬に聖物を與ふる勿れ、また豚の前に爾等の眞珠を投與る勿れ、恐くは足にて之を踐、ふりかへりて爾等を噬やぶらん、求めよ、然らば與へられ、尋ねよ、然らばあひ、門を叩よ、然らば開かるゝことを得ん、蓋凡て求むる者は得、尋ぬる者はあひ、門を叩く者は、開かる可ればなり、爾等の中誰か其子パンを求めんに、石を與へんや、又魚を求めんに、蛇を與へんや、然らば爾等惡き者ながら、善賜を其子に與ふるを知る、まして天に在す爾等の父は、人にも其如く爲よ、是れ律法と預言者なるなり。

窄き門より入れよ、沈淪に至る路は濶く、その門は大なり、此より入もの多し、命に至る路は窄く、その門は少し、其路を得るもの少なり、僞の預言者を謹めよ、彼等は綿羊の姿にて、爾等に來れども、內は殘狠なり、是その果に由て知べし、誰か荊棘より葡萄をとり、蒺藜より無果花を採ることをせん、凡て善樹は善果を結び惡樹は惡果を結べり、善樹は惡果を結はず、惡樹は善果を結ぶこと能ざる也、凡そ善果を結ばざる樹は、斫れて火に投入らる、是故に其果に由て之を知べし。

我を召て、主よ主よと曰ふもの、盡く天國に入るに非ず、唯これに入る者は我が天

に在す父の旨に遵ふ者のみ也、其日われに語て、主よ主よ、主の名に託てをしへ、主の名に託て、鬼をおひ、主の名に託て多く異能を行しに非ずやと云ふもの多からん、其時彼等に告げ、われ嘗て爾等を知ず、惡をなす者よ、我を離去と曰はん、是故に凡て我この言を聽て行ふ者を、磐の上に家を建たる智人に譬へん、雨ふり、犬水いで、風ふきて、其家を撞ども倒るゝことなし、是れ磐を基礎と爲したれば也、凡て我この言を聽て、行はざる者を、沙の上に家を建たる愚なる人に譬へん、雨ふり、大水いで、風ふきて其家を撞ば、終には倒れて、その傾覆おほいなり。

基督の語り畢るや、人々皆その敎訓に感服せり、蓋し、基督は彼の法學者や、ファリゼイ人の如く理窟一片の議論をせず、いづれも皆實踐躬行すべき眞理を諄々として說き、權威を以て之を敎へたればなり。

眞福八端詳解

(G)眞福八端詳解　山上の垂訓は基督敎の要旨を約めたるものなり、それ人生の目的は幸福なり、基督の降來せるは即ち其の方法を授くるが爲なり、夫れ幸福の所在を認むるは、萬善の本源にして、その所在を誤るは、萬惡の源なり、故に人は幸福ならんことを欲すれば、幸福の何處に在るかを究め、而る後之に到達し得る方法を講ぜざるべからず。

基督は眞福として八端を揭げたり、その目的はいづれも永遠無窮の幸福なれども、方法は種々あるが故に、各端毎に別名を以て指示したり、即ち第一端には天國として、第二端には約束の地として、第三端には完全なる眞正の慰安として、第四端には人生一切の志望の充實として、第五端には萬惡を除き、萬善を與へる最終の矜恤として、第六端には見神の榮として、第七端には人が神の養子となるの光榮として、第八端には今一度天國として指示したること、必ずしも詳說を待たずして知るべし、その到る道は異なれど、究極は同じ富士の高根。

山上の垂訓を以て基督敎の要旨なりとせば、眞福八端は實に山上垂訓の要旨にこそ。

昔は神の法をシナイ山に布けりと云へり、頃は即ち彼の天の選民と稱せられたるヘブレア人民がエジプトを出てゞより五十日目なりけり、今や基督は其の公生涯に出でゝ、初にはタボール山とカファルナウムの間に在る山上に於て此の敎訓を垂れつ、而して聽衆は實に其の四邊に圍繞せる門弟とその門弟の後列につ

どへる群衆にてありき。

聖書には『口を開き、敎へて曰く』と云へり、堂々として眞正なる學者の風ありたるを想望すべし。

第一端＝心貧の解說

シナイ山上に授けられたる法は誡命の形式にして、往々威嚇の文字を用ゐたれども、基督の敎訓は靄然たる溫言にして耳に快なり、幸福と云ふ文字は、如何に人民の心を魅するかを知りて語れる者の如し、金言の如く、格語の如く、直に人の肺腑を衝き、銘刻し易く、記憶し易し、いで著者をして少しく之を解釋せしめられよ。

昔は廢敎者ユリアヌスは心貧の語を嘲笑的に解して、知識に乏しきものゝ意なりと云へり、玆に謂ふ心貧は決して此の如き意味の語にあらず、名利を離れたる心を指すものにして、これには四種あり。

天を樂み、道を樂むが爲に、故さら名利の巷を離れ、或は山中の隱君子の如く、或は修道院の行者の如く、清貧を心より希望する者あり、是れ志望上の心貧者なり。

次に家柄、身分若くは不幸なる事變の爲に貧苦の境遇に立つ者あり、こは止むを得ざるの貧乏とや云はん、世には此の如き貧乏人枚擧に遑あらず、此の如き貧者の中天をうらまず、人をうらまず、堪忍を以てそを甘じて、その運命を忍ぶ者のみ、眞の心貧者とや稱すべき。

其次には富貴に生れ、身は金殿玉樓に住むと雖、其心淡然として名利を離れ、ほこらず、たかぶらず、隨て富を失ふと雖、しかも悲まず、常に之を人道の爲に利用する者、是れ亦一種の心貧者たるを失はず。

尙其次に心の謙遜なる者即ち自ら何にも知らずとなし、ソクラテスの所謂『我は何にも知らざることを知る』と云ふが如く、秋毫も己の知識學問に誇らずして、胸中に萬卷の書を收むと雖、有れども無きが如くへりくだりつゝある者、是れ亦一種の心貧者なり。

世の哲學者と心貧者

而して基督は先づ第一着に心貧を揭げたるは、利慾と名慾(傲慢)は萬惡の本源にして、家庭に於ても、國家に於ても、不和、憎怨、訴訟、分裂、軋轢、戰爭等の起る、皆こゝに原因するを示さんが爲なりき。

世の哲學者中にも富貴を浮雲の如く見做したる者なきにしもあらざれども、一種の虛傲より玆に出でたりとせば、未だ以て心貧者と云はるゝを得ず、何となれ

心貧の實例

ば己を空うし、己を無き者にすること能はざればなり、猶富を輕んずるをもて、ことさら人に誇らんとせしヂオゲネス一派の哲學者輩に至りては、到底心貧者の語を呈する能はず、故にヂオゲネスが表面上幸福者を裝ふと雖、我は信ぜず、彼が樽の内に生活して、ひなたぼこせるとき、アレキサンデル大王來り、先生好む所あらばと曰ひたるに、彼は大王の日を遮るを見て、其處を退かせ給ふを希望する外、何等の望みだになしと語りたるが如きは、是れ貧を誇れるなり、是を以てヂオゲネスは大哲プラトーンの華美なる室に泥塗れの靴をはきしまゝ、あがりこみて『我はプラトーンの傲奢を踏まんとす』と曰ひたりける、其の時プラトーンは『虚傲を以て(踏まんとするか)』と答へしことありきとぞ、世の哲學者輩の心事往々此の如し、天國は決して此の如き學者の所有(もの)にはあらざるなり。

さるに基督は然らず、此の教訓を人に教ふる前に、先づ之を實踐躬行したれば、基督の一代は心貧の好模範として見るを得べし、何となれば一生の間貧しき生活を送り、誕生のときにすらベトレエムの厩の内に生れ、長じて大工の職業を執り、公生涯に入りても、『狐に穴あれども、人の子は枕する所だになし』と云へりしよ、その死するに當りても、着てゐる衣さへはぎとられて裸體のまゝ、磔刑に處せられたり、古往今來、誰か此の如く赤貧洗ふが如き生活をなしたる者やある、故に心貧の教訓を垂るゝ者は、基督にあらざれば、教ふる能はざる所なり、世の學者の如きは或は想像にだも此の如き思想起らざらん、ラテンの文豪セネカが財を散じて慈善を行ふを人に教ふる文を草するに當り、夫子自らは黄金の机に向て之を草せりと云ふが如き、好個の例證ならずや。

基督の門弟は能く基督の手本に從て、心貧の教訓を實行したり、基督の高弟ペートルスは『我に金なく、銀なし』とて、唯だ基督の名のみを口にするを知れることを公言し、パウルスの如きも、自ら手業を執りて布教傳道に從事せり、尚降りて此の心貧の教訓を最も完全に行ひ、殆ど基督の心貧に迫りたる聖者はフランシスク、アッシジウスなりとす、腰に繩の帶をしめ、足に草履を穿き、托鉢して生を送るの修道士の開祖となれり、その修道士は今尚『フランシスカニ』と稱して、今の世に心貧の生活を送りつゝあり、此の如きは基督の徒にあらざれば到底解する能はず、今日物質的文明に誇り、驕奢に流れ、華美に陷りつゝある人々をして之を見せし

心貧の報賞＝天國の解說

めなば、豈雷隔世の感をなすのみに止まらんや、必ずや之を評して狂者とや云はん、然れども狂者は果していづれに在るかを知らず。

基督曰ふ、天國は此の如き心貧者の所有なりと、蓋し『世の精神に貧しき者は、神の精神に富める者にして、眞に幸福なる者は即ち此種の聖者なればなり、天國は此世にも在り、蠹蝕の憂もなく、盜賊の恐もなき財寶を天に積まんとする者の心は、直に是れ天國なり、其心常に安らかにして、何等の憂慮もなければなり、昔は希臘の七賢人の一なるビアス、財を海底に投じて、安心を買ひ得たりと曰ひ、運命の弄びとなり、集散常なき寶を持するが如きは、眞の福者にあらず、天下何者も奪ふ能はざる道と德とを胸中に藏する者こそ、眞の福者と稱すべけれと云へり、彼も亦心貧者の心境を解したるの徒か？吹かば飛び、燒かば燃え、失敗によりて失ふ所の財寶の爲に心を奪はれ、一生營々役々として、安心の何物たるかを味ふ能はず、胸の中實に火の車のまわれる者は、生きながらの地獄とや云ふべき、要するに天國は安心の樂境を指すものなり、道を樂む者の心境は取りも直さず天國なり、基督の言、意義深長なり、守錢奴輩の到底解すること能はざるものなり。

次に福音の道は直に是れ天國と解することを得べし、基督の道は貧者の道なり、故に主として貧者に歡迎せられ、富者に嫌はる、所謂金と神には兼ね仕ふることは能はざる者なり、世には金を祭るの徒甚だ多し、一にも金、二にも金、地獄の制度も金次第とて、金を萬事に越えて愛慕し奉る徒比々皆然り、之を拜金宗の徒と云ふ、拜金宗の徒は福音の道に入り難し、故に基督の言にも『金持の天國に入るは、駱駝の針の孔を穿るよりも難し』とあり、之に對して『貧者福音を受く』の言もあり、之等を考ふれば、基督の徒は設令貧者なりと雖、之を輕んずべからず、或は其心世の富者に比して、より以上富めるやも知るべからず、福音の道は取りも直さず天國の道なれば、此世より天國の道を辿りつゝある者は、其心の貧しき中にも自ら樂みあり、孔子の所謂肱を曲て水を飲みつゝも、樂み其中にあるものなり、一簞の食、一瓢の飲、糠糟だも飽かざる顏回の徒は、寧ろ子貢の徒に優れりと云ふ可し、古來道を樂むの徒皆此の如し、基督の敎訓の例は世の聖人君子に就ても、その幾分を見得べし。

若夫れ天國とは天上無窮の樂境を指す語なりと云ふに至りては、必ずしも詳說

第二端＝溫和の解說

するを要せず。

溫和とは如何なるものなるかと云ふに、溫和は愛德の花なりと云ふ、喜怒哀樂の情を抑へ、心海常に平安にして、些の風波だも起らず、己が一生を通じて氣に斑なく、いつ如何なる人に接しても和氣靄然たる者を稱して、溫和なる者と云ふ、天性柔和にして、氣質やさしき者あり、こは德にあらず、德は力を要するものなれば、多年克己の結果初めて溫和の德に達することを得るなり、凡ての人に對して堪忍することを知らざれば、溫和の德は行ひ難し、人と爭はず、人を怨まず、善を以て惡に報ひ、敵をも愛するの雅量を有して、左の頰を批たば右の頰を出す底の心を持する者にあらざれば、眞の溫和なる域に達したる者とは云ふべからず。

溫和の實

世には此の高尙なる德に達したる者なきのみならず、恐くは之を解する者さへ尠かるべし、打たるれば、打つて返し、所謂眼を以て眼に報ひ、齒を以て齒に報ゆるは、世間普通の道德なり、敵を愛するが如きは、不自然なり、人情行ひ難き所なりと云ふ、世に仇討の話の多きは、之が適例として見る可し。

されば眞個完全なる溫和の域に達したる者は基督に於てのみ之る見る、一生を通じて溫和の珍らしき手本を示したり、聖殿に於て商賣せる商人等を追出したるとき、聖殿の神聖を保たんと欲したる熱誠の餘りに義憤をあらはしたる外、嘗て怒れる容を示したることなし、彼の受難の當時の如きは、羊の如く引くに引かれさせ給ひて、ユダスが接吻して敵の手に渡せる時の如きも『ユダよ、爾は接吻を以て人の子を敵の手に渡さんとするか』とやさしく咎めたるのみ、高弟ペートルスが師を思ふ心より劍を拔いて捕手の耳をきりおとしたるときすら、劍を鞘におさめよと言ひて、きりおとしたる耳を復せしめたりと云ふ、其他有るゆる罵詈讒謗を浴せかけられたれども、默して一言も答へず、始終敵の爲に祈り、彼の十字架の上に於てすら、現在己を殺さんとする者の爲に天父に祈りて、『彼等は何のわきまへもなきものなれば赦し給へ』と言へり、之を彼の『夫子莞爾として笑ふ』と云はるゝ孔子に比して、果して孰れが溫和なりとすべき、聖書には基督笑へりの語なきを以て其の性格嚴酷なりきと云ふが如き議論をなす者は、未だ基督の何者たるかを知らざる皮想論者の事なり。

溫和の德を行ふ眞法

溫和の域に達する最良の法二ッありと云ふ、基督敎徒なれば、人より侮辱を受く

温和の報賞＝地の解説

る度毎に、之を基督の受難當時に受けたる侮辱に比して考へて忍ぶ事にして、世間一般の人なれば、人より氣にさはることを聞きたるとき、我も亦人の氣にさはることを言ひ又は行ひたる事ありと思ひて、成る可く人を怨せんことを努むる事なり、此の二ッの良法により立腹の原因を輕く受け、怒りの心を抑へることを得るが故に、自然温和となるものなり。

温和の報賞としては地を得べければなりと稱せらるゝが、さて茲に謂ふ地とは如何なる意味なるかと云ふに、いづれ結極は眞に幸福の地に達することを得べしとの意ならんも、尚現世に於て大なる意味あり、地を得るとは地上の人々の心を收攬すると云ふ意なり、温和なる人は、自然人の心を感化し、その感化全地に及ぶべし、之を小にして言へば、個人と個人との間に於て、隨分と交際ひ難き人もあれども、始終温和にて親切をつくせば、如何ほど氣むづかしき人にても、その親切にほだされぬ者はなし、角ばりて人に接するは、交際の道にあらず、婦人の如く優にやさしく出づれば、如何なる武夫もやさしくなるものなり、著者は常に『親切にまけぬ人はなし』と云ふ語を味ひ、之を己に心よからぬ人に應用せしに、大抵は皆之を化して親友とならむるに至れるを見て、基督の温和能く地を得るの知言に感佩せざるはなし、之を大にして言へば、仁君上にありて仁政を施し、恩澤を布かば、天下翕然として之に心服するに至らん、此の如き仁君こそ全地を得て之を司配すべき者なれ、世の攻略家の如く百萬の兵を率ゐて、四海を併呑せんと欲するも、心服する者あらざれば、決して全地を得るに至らず、一時威武を以て、世界を屈服することあるも、其天下は忽ちにして亡ぶるものなり、之をアレキサンデル大王の天下、ナポレオン一世の帝國に徴して明なり、アレキサンデルの天下はアレキサンデルの歿するや否や四分五裂し、ナポレオンの帝國はナポレオンの死せざるうち既に亡びたり、之に反して基督教が今全世界に弘まりて、全世界の人々胸をうち罪を悔みて之に歸依するは何ぞや、他にあらず、基督は温和能く全世界を感化せるが爲なり、基督はアレキサンデル、ナポレオンの成す能はざる所を成せり、故に曰ふ、温和は世界を取る最良の道なりと、『温和なる者は福なり、地を得べければなり』何ぞ其の意義の深長なるや。

第三端＝涕泣の解説

涕泣に色々の別あり、先づ第一は自然の涕泣あり、人は生れながらにして泣く、天

下泣かずして生るゝ者一人もなし、基督すら泣て生れたり、人の長ずるときには、涕泣の原因となるもの世に甚だ多し、財産を失ふては泣き、健康を損ふては泣き、所謂貧に泣き、病に泣き、自ら心配を作りて泣き、己の不仕合に泣き、人より苦められて泣き、親を失ふて泣き、子に別れて泣き、朋友の死を見て泣き、親類の不幸を見て泣き、人の不義に泣き、くやしがりて泣き、人生萬事何事か涕泣の原因たらざらん、人は實に一生泣て暮しつゝありと言ふも過言ならじ、而して死するときまた泣く、己れ泣くのみならず、人をも泣かしむ、故に古人は曰へり『人間一生の歴史は三言以て之を約むることを得、泣て生れ、泣て暮し、泣て死すと、即ち是なり。』

此等の涕泣は皆福なりと云ふにあらず、勿論此の如き原因によりて泣く者も、人の同情を買ひ、慰を受くることあれば、福とならざる限りにもあらざれども、基督の説く所の涕泣と又其の報賞たる慰安は之と異なり。

世には又禍福輪轉の説をなす者あり、禍轉じて福となり、福轉じて禍となり、宛も彼の塞翁の馬の解に於けるが如く、塞上北叟馬亡げて胡に入る、人これを弔すれば、翁の曰く安んぞ福に非ざるを知らんや、居ること數日、馬胡の駿馬を將ひて歸る、人之を賀すれば、翁の曰く安んぞ禍に非ざるを知らんや、後其子騎し墮て髀を折る、人之を弔すれば、翁の曰く又安んぞ福に非ざるを知らんや、居ること一年胡兵大に入る、丁壯者戰死する十に九、其子跛の故を以て父子相保つを得たり云々と、樂み極まりて、哀み來る等の世の言も之に類す、基督は此の如き意味に於て泣く者は福なりと説きたるにあらず。

蓋し右に述ぶるが如き自然の涕泣と人生に共通せる禍福哀樂との外に、罪を悔む心より出づる涕泣あり、所謂己が罪に泣くと云ふ事是なり、これは實に道德心宗教心より出づる事にして、神の前に於て必ず慰を受くべきものなり、己の罪に泣くのみならず、人の罪にも泣きて、之が爲に天の赦を仰ぐときは、矢張り慰を受くるものなり、古來聖人は己の罪にも泣き、人の罪にも泣きて、只管神の赦を得んことを努めたり、昔ダヴィド王は人の妻を姦し、其の夫を殺して大罪を犯せしことありしも、頓て深く後悔の心を起して、その大罪を大に泣きたる故に、神の寛恕(よるし)を蒙りて、中心大なる慰安を得、遂に聖王たるを失はざりき、基督の高弟ペートルスは卑怯の爲に基督を見捨てゝ、敵の面前に彼の如き人は知らずと公言せしが、頓

てその大罪なることを感じ、大に泣き悲みたれば、之が爲に基督の高弟たるを失はざりき、傳に曰ふ、ペートルスは其罪を一生泣き悲み、涙のかはく日とてはなかりしかば、眼の下には常に二流の溝を劃してありたりとなん。

湧泣の實例

基督は溫和にして、如何なる罪人とも交りて、之を恕したれども、笑ひたりと云ふことは聖書に記されず、却て泣けることは處々に散見す、嬰兒として泣きて生れたることは姑く措き、其友ラザルスの死を聞て泣き、イエルサレム城が罪の爲に亡ぼさるべきを豫想して泣き、ゼッマニアの森の中には血の汗を流して泣き、カルワリオ山上には十字架の上に泣き、全身泣き、全身涙に溢れたりと言ふも、過言にあらじ、基督の如きは實に大に泣きたる者と云ふべし、然れども基督は身に一點の罪もなかりしかば、己の爲に泣きたるにあらず、人の爲に泣きたるものなり、即ち人の罪の爲に大に泣きたるものなり。

湧泣の報賞

基督は泣く者の報賞として、慰めらるべけばなりと說けり、この故に己の罪に泣きて、後悔の心を以て此世の憂苦艱難を甘じて忍ぶ者は、神必ず其の涙を拭ひとりて、其の心を慰め、優渥なる恩澤に浴せしむべし、同情の涙を流して、人の罪の爲に泣く者も、中心に得も言はれぬ慰を感ずべし、德を行ひたりとの心持のみにても、無限のよろこびあり、況や天は人の爲に悲む者を爭であはれまざらんや、基督敎者の解によれば、涙の谷なる現世に於て罪に泣きて深く悔ひ改むる者は、其涕泣は頓てよろこびと變じて、泣くこともなく、悲むこともなき天上の樂域に至りて、永へに神の慰安を受くべしと云ふ。

正義の解說

世には笑ふ門には福來ると云ふと雖、基督の敎訓は之と異なりて、『今笑ひ暮す者は禍なる哉、早晩泣くべき時來らんとす』と云ふ、面白可笑く世を送らんとする者は、必ず泣くべき時の來るべければ、眞に呪はるべき者なり、若夫れ罪を犯して、良心の之を咎むるに至り、之を泣て悔むことを知らず、日夜飲酒に托して耽樂の裡に其の苦悶を忘れんとするが如きは、眞の慰安を求むるの道にあらずして、却て禍の上に禍を重ぬるの道なり。

茲に正義と云ふは、啻に人に盡すべき義務を指すのみならず、一切の完全なる道義を總合したる言葉なり、聖書には能く義人の語を用ゆ、例へばヨセフは義人なりと云ふが如し、是れ圓滿なる義德を指すものにして、羅甸の學者などは既に『義

德は萬德の王なり』と道破せり、正義を渴望すとは、飢渴に迫まれるが如く一心不亂に誠心を以て要求するの謂なり、即ち正義を慕ふこと、飢者の食の求むるが如く、渴者の水に走るが如く切望するの義なり、ベルナルドスの言に『義人は決して完全の域に達したりと思はず、又決して充分なりと云ふ語を口にせず、飢渴に迫まれるが如き心事を以て、愈々益々完全の域に進まんと欲するものなり』とあり天父の完きが如く完からんと欲して、直に造化主に肉薄せずんば止まざるものなり、之を基督敎の意義によりて解すれば、正義の渴望とは取りも直さず、愈々益々完全に神を愛して之に奉仕せんとする切實の心を謂ふなり、オグスチヌスの言に『良基督敎徒の一生は德より德に進む聖き志望、神の御心を迎ひ、各種の善業を以て之を稱讃せんと欲するの飽くなき渴望に在り』と云ふ、是れ實に正義を渴望するの解釋として見る可し。

基督は一生天父の光榮を揚ぐることを飢渴に迫れるが如く切望せるが故に、『我糧は我父の聖旨を行ふに在り』と云へり、又一切人類の罪を償ひて、その救拯を謀らんことを深く渴望せるが故に、カルワリオ山上に於て十字架の上より『我れ渴きぬ』と叫びぬ。

正義の報賞

正義を渴望する者が飽くことを得るとは、正義を行ふ者は其心天恩に滿たされ、義德に進境する心愈々切實なれば、天來の幸福愈々豐饒となるの謂なり、德者は地上に於て既に此の至幸至福の鄕に達するが故に、身窮乏にして、衣食足らずとも雖、貧に安じて其心常に晏如たり、之に反して心疾しき所ある者は、位人臣を極むるも、又は貴き天子となり、富四海を保つと雖、其心天の恩澤に浴すること能はざるが故に、管絃日夜四隣を驚かすの盛宴を張るも、肉山酒地の豪奢を極むるも、其の意望決して滿足する能はざるものなり、蓋し不義の歡樂は人心を飽かしむる所以にあらず。

正義を渴望する者は現世に於てすら既に前述の如く其心不義者の味ふこと能はざる快味を覺ゆると雖、死して天國に到るときには、圓滿幸福の本源なる神に咫尺するが故に、其心初めて飽充せられ、一切の意望悉く滿足せらる、基督が正義を渴望する者に對して、飽くことを得べければなりとて、其の報賞を揭げたるは、言ふ迄もなく天國の圓滿幸福を指して語りたるものなり。

矜恤の解說

矜恤に二種あり、形體的矜恤と精神的矜恤是なり、形體的矜恤は七ッあり、飢ゆる者に食はしめ、渴ける者に飲ましめ、裸體なる者に衣服を與へ、旅人に宿をかし、病人又は囚人を見舞ひ、捕虜を救け、死者を葬むる事即ち是なり、精神的矜恤にも亦七ッあり、過失を恕し、罪人を改心せしめ、罪人の爲に祈り、愚なる者を敎へ、善き訓戒を與へ、悲める者を慰め、苦める者に同情を寄せる事即ち是なり。

矜恤の實例

矜恤を適當に行ふには、三ッの注意すべき事あり、矜恤は如何なる人に對しても之を行ひ、敵に對しても之を行ふべき事、如何なる種類の不幸に對しても之を行ふべき事、矜恤はやさしき心を以て、よろこばしく、利害の觀念を離れて、一片の誠心より之を行ふべき事即ち是なり、眞正の矜恤者はその思念に於ても、言葉に於ても、仕業に於ても此の如く行はんと心掛くる者なり。

基督は矜恤の德を最も完全に行ひたるものにして、その一生は矜恤の歷史と云ふも不可なし、『天下に周遊しつゝ恩惠を蒔けり』とは、基督に就て福音記者の記したる所なり、實に基督は病人を癒し、死者を蘇らしめ、罪人を恕し、愚かなる民に敎を說き、敵の爲にも祈りて、萬民に惠を施せり、『亡びたる者を救はんが爲に來れり』とは、基督に就て語られたる預言なり、基督がサマリアの婦人と語り、姦淫せる婦人を赦し、醜業婦の如きマリア、アグダレナを正道に立返らしめたる等の如き、之が好箇の例證として見るべし、又或時門弟等が忘恩の都城イエルサレムを咀ひて、天火の降らんことを祈りたるとき、太く之を叱責して『何たる精神ぞや、人の子は人靈を亡ぼすが爲に來れるものにあらず、之を救はんが爲に來れり』と曰へり、亦以て基督の矜恤の如何に大なりしかを見るべし。

矜恤の報賞

矜恤ある者は矜恤を以て酬あらるゝことは、自然の道なり、人を惠まば、人にも惠まるゝが、特に天より惠を受くること必然なり、天は人の一善をも空しくせず、積善の家には餘慶あることは、古來の言說と事實に徵しても知らる、基督は我が兄弟の最と微なる者に向て行ひたる善は、我に對して行ひたると同然なりとて、一杯の水を惠みても、天は其の惠を空しくせざることを、いと鄭寧に敎へたるが故に、基督の心を汲み取りたる基督敎の學者は、惠を受くる者に就き左の如き名言を遺したり、『手を出だす所の者は貧民なれども、受くる所の者は基督なり』と。

要するに凡ての善事特に愛憐、矜恤、恩惠の如き德は歸する所神にして、其の報賞

心清の解說

は神より百倍にして返さるゝものなり、人を呪はゞ、穴二ッと云ふ言に徵しても、此の道理は明に解し得らるべき筈なり。

心の清き者とは罪を避け惡を去り、善を行ひ德を積みて、神の如き生活を送り、心中些の汚れもなき者を指すものにして、基督敎の學者は之を『聖寵の地位に在る者』と云ふ、神を心中に宿しまゐらする聖者の地位なり。

尙天眞爛熳にして、頭に神の宿る正直者をも心の清き者と言ひ得べし、此の如き者は意志正しく、心眞直にして、毫も邪曲、僞善、假佯等の分子を混へざる者なり、基督の所謂『鳩の如く質朴なる者』にして、眞に愛すべき者なり。

尙現世の利慾及び淫欲を全く離れて、一念天上の神に馳せ、其心玉の如く玲瓏として、宛然天使の如き生活を送る者、即ち一片の氷心玉壺に在る底の貞潔なる者を指して、眞に心の清き者と云ふべし、肉に活きずして、靈に活き、形體の如きは在れども無きが如く、無論人としては全く肉體を去ること能はざれども、肉體のある天使若くは肉體のなき人間と云ふが如き有樣の貞潔なる者は、心清者の絕頂に達したる者として見るべし。

心清の實例

基督は眞獨者の標本にして、人間の肉體を具したれども、其心は玉よりも清く、その語る所、行ふ所、思ふ所に一點の瑕瑾もなく、毛を吹て疵を求めんとしたる敵と雖も、また奈何ともする能はざりき、蓋し天父の鐘愛を一身に聚めたる神の獨子にして、其志す所は天父の聖旨を行ふに在りたるが故に、固より曲れる所は一點もあるべき筈のものにあらざりき、是を以て自ら稱して『我は道なり、眞なり』と云ひ、世の曲學阿世の徒を指して、僞善者なり、白堊の墳墓の如しなどゝ稱するを得たり、所謂當時のファリゼイ人等の如きは外面清潔を裝ふて、內心は百千の邪曲と利慾とにて充され、宛然外裝の美なる墳墓の如く、內部は醜骨擾亂の光景なりき、世には此の如き徒に乏しからず、而して內心の清からざるほどそれほど、外面を美しく裝はんとするこそ奇怪なれ、此等は醜業婦の類なり。

心清の報賞

偖心清き者の報賞は甚だ珍らしきものなり、神を見るを得ると云ふ、蓋し心清き者は神に近き生活を送る者なり、其心肉骸を脫して、直に天上の神に肉迫せんとする者なり、日月と光を爭ふのみにあらず、神と其の清きを競はんとしつゝある者なり、此の如き清潔なる人にして、見神の榮を得ずんば、誰か此の恩典に浴する

平和の解說

者あらんや、基督敎の學者は此の如き心淸者は天上無窮の永生に入りて、面と面を合せて、神を見奉るを得と說けるが、心淸者の神を見ることは、必ずしも天上に限らず、地上に於ても此の光榮を有す、天上の明月は地上の淸き水面に映ずるを見ても、此の道理を知り得べきにあらずや、正直な頭に神宿ると云ふ諺の如きも、這個の消息を傳ふるものなり、元來神は一切の曲れるを惡み、心汚れたるを嫌ふ者にして、淸く、直くして、誠の道にかなへる者を嘉する者なり、故に心だにまことの道にかなふときは、祈らずとても神の守るや必定なり、まことの道にかなふ事が、取りも直さず神に對する一種の祈禱なり、至誠天に通ずるも、此の道理ぞかし。平和なる者とは何ぞや、先づ己れ自身と平和なる者あり、所謂心戰と稱するものを行ひて、靈をして肉に勝たしめ、一切の肉慾を鎭靜せしむる者即ち是なり。次に神と平和なる者あり、神の聖旨を奉戴して、神の道を行ひ、神の敎を信じ、神の掟を守りて、神と一致合體する者即ち是なり。

倘人と平和なる者あり、人を愛し、人と親み、人と睦み、苟にも人と爭ふが如きことをなさず、人を詬らず、人を咎めず、人の侮辱を忍び、人の無法を怨し、敵をも愛する心を以て、常に人を兄弟の如く思ひ、惡に報ゆるにも善を以てし、齳じて仇を返すが如き行爲に出でざる者は、愛德と堪忍に依りて人と平和なる者となりたる者なり。

平和の實例

基督は平和の典型なり、平和を齎さんが爲に天より來れり、故に基督の降誕に當り『地上の人々に平安あれ』と云ふ歌天に聞えたり、蓋し基督は人を神と平和ならしめ、人と人とを平和ならしめ、人をして己れ自身と平和ならしむるが爲に世に降れり、故に預言者は之を稱して『平和の王』と云へり、此の三種の平和を來たさんが爲に有らゆる手段方法を取り、有らゆる辛苦艱難を忍びぬ、道を說き、敎を布きたるも畢竟之が爲なり、謙遜を敎へ、溫和を說きたるも之が爲なり、劍を執るを禁じ、仇を報ゆるを戒め、敵をも愛して、詛ふ者を祝し、憎む者を善視し、虐遇迫害の爲に祈れと敎へたるも、亦之が爲なり、惡人より訴へられて、一言も抗訴せず、身は磔柱に懸られて、刑吏の爲に祈りたりと云ふ、平和の極致に達したる者にあらずんば、曷ぞ此の如くなるを得んや、傳道の際己を宿す家に入れば、先づ『此家に平和あれ』と云ひ、門弟に逢へば、『汝等に平和あれ』の語を以て殆ど挨拶の言葉となせり、故

にその門弟の如きも皆人に殺され、自ら人を殺すが如き行爲に出でたる者一人もなし、基督教徒の殉教する所以、亦基督の旨なり、基督の教會は劍を以て建設せられたるものにあらず、平和の道によりて建設せられたり、『平和の王』とは、實に適切なる預言と謂ふ可し。

平和の報賞

報賞＝平和なる者は神の子と稱せらるゝと云ふ、平和なる者は天父の如く完全なり、神が太陽を善人の上にも惡人の上にも照らすが如き心掛を以て人に對するが故に、眞に神の子と稱し得べき者なり、平和の王と稱せられたる基督先づ自ら神の子なり、基督に就きて平和の道を學びたる門弟及び信徒は皆基督の兄弟と稱せられて、神の嗣子なり、眞に平和なる人は皆天國に入りて神と共に樂むべければ、是も亦神の子なり、故に神の子に三種の意味あり、基督の如く神と同性質の者、基督と偕に神の後嗣となる者、神より我子と稱せられて天國に迎ひ入れらるる者即ち是なりとす。

正義の解說

正義の爲に迫害を忍受するとは何の意味なるか。

茲に謂ふ正義は前に正義を渴望する者は福なりと云へるところの正義と其義同じ、古來道に從ふ者は、多く世の迫害に逢ふを常とす、善と惡は水火相容れざる者にして、世には惡人常に時を得顏に權柄をふるひ、善人は却て諸般の苦難に逢ふを例とす、蓋しその苦難は正義を磨く砥石にして、苦難に逢ふこと益々甚しければ、正義の光益々著しく顯はる、宛も梅花の嚴冬に逢ひて、氷雪の裡に高操を持するが如き觀あり、義人を苦むる迫害者は禍なれども、正義の爲に迫害を忍ぶ者は福なり。

サンタ(惡魔)と世間と惡人は常に基督の敵となりて、その門徒を迫害し、その教徒を迫害し、その教會を迫害して止まず、基督教會の設立の當時ローマに於て凡そ三百年の久しき、絕えず迫害に遭遇したることは、人の皆知る所なり、基督教の弘布せらるゝや、其の初め何れの國に於ても迫害せらるゝを常とすることも、公衆の普く稔知する所なり、今日に於ても基督教は世間より耶蘇々々と言はれて、陰に陽に迫害せらるゝは、吾人の實地目擊しつゝある所なり、基督の言へる如く、世は先づ基督を迫害して、磔柱に懸けて之を殺したれば、その教徒が世間より迫害せらるゝは、毫も怪むに足らず、基督が正義の爲に迫害を忍受するとは、此等の事